

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著

『ドイツ伝説集』試訳（その三）

鈴木 満 訳・注

\*凡例

1. ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ伝説集』（一八五三）（略称をDSBとする）の訳・注である本稿の底本には次の版を使用。

*Deutsches Sagenbuch von Ludwig Bechstein. Mit sechzehn Holzschnitten nach Zeichnungen von A. Ehrhardt.*  
Leipzig, Verlag von Georg Wigand, 1853. ; Reprint, Nabu Press.

初版リプリント。ちなみに一〇〇〇篇の伝説を所収。

2. DSB所載伝説の番号・邦訳題名・原題は分載試訳それぞれの冒頭に記す。

3. ヤーコプとヴァイルヘルムのグリム兄弟編著『ドイツ伝説集』（略称をDSとする）を参照した場合、次の版を使用。

*Deutsche Sagen herausgegeben von Brüdern Grimm. Zwei Bände in einem Band. München, Winkler Verlag. 1981.*  
Vollständige Ausgabe, nach dem Text der dritten Auflage von 1891.

ちなみに五八五篇の伝説を所収。

なお稀にはあるが、DSの英語訳である次の版(略称をGLとする)も参照した。

*The German Legends of the Brothers Grimm. Vol.1/2. Edited and translated by Donald Ward. Institute for the Study of Human Issues, Philadelphia. 1981.*

4. DSB所載伝説とDS所載伝説の対応関係については、分載試訳冒頭に記すDSBの番号・邦訳題名・原題の下に、ほぼ該当するDSの番号・原題を記す。ただし、DSB所載記事の僅かな部分がDS所載伝説に該当する場合は、ここには記さず、本文に注番号を附し、「DS\*\*\*に詳しい」と注記するに留める。

5. 地名、人名の注は文脈理解を目的として記した。史実の地名、人名との食い違いが散見されるが、これらについては殊更言及しないことを基本とする。ただし、注でこれが明白になる分はいたしかたない。

6. 語られていた事項を、日本に生きる現代人が理解する一助となるかも知れない、と、訳者が判断した場合には、些細に亘り過ぎる弊があろうとも、あえて注に記した。こうした注記における訳者の誤謬へのご指摘、および、このことについても注記が必要、といったご高教を賜うことができれば、まことに幸いである。

7. 伝説タイトルのドイツ語綴りは原文のまま。

8. 本文および注における「」内は訳者の補足である。

\*分載試訳 (その一) の伝説

- 一 ドイツの大河ラインの話 Vom deutschen Rheinstrom.
- 二 スイスの民の起源 Des Schweizervolkes Ursprung. \*DS514 Auswanderung der Schweizer.
- 三 聖ガルス Sanct Gallus.
- 四 聖カレンの修道士たちが祈りを捧げて葡萄酒を授かる Die St. Galler Mönche erbeten Wein.
- 五 ダゴバートの徴 Dagoberts Zeichen. \*DS439 Dagoberts Seele im Schiff. / \*DS440 Dagobert und seine Hunde.
- 六 テル伝説 Die Tellen sage. \*DS298 Die drei Telle. / \*DS515 Die Ochsen auf dem Acker zu Melchtal. / \*DS516 Der Landvogt im Bad. / \*DS517 Der Bund im Rütli. / \*DS518 Wilhelm Tell.
- 七 ルツェルンのホルント殺害の夜 Luzerner Hörner und Mordnacht. \*DS519 Der Knabe erzählt's dem Ofen. / \*DS520 Der Luzerner Harschhörner.
- 八 ホーエンザクスの殿たち Die Herren von Hohensax.
- 九 イーダ・フォン・テア・トングンブルク Ida von der Toggenburg. \*DS513 Idda von Toggenburg.
- 一〇 ピラトゥスと群れなす小人 Der Pilatus und die Herdmandli. \*DS150 Die Füße der Zwerge.
- 一一 獣と魚を守る山の小人 Die Bergmandli schützen Heerden und Fische. \*DS302 Der Gämjäger.
- 一二 群れなす小人の退去 Die Herdmandli ziehen weg. \*DS148 Die Zwerge auf dem Baun. / \*DS149 Die Zwerge auf dem Felsstein.
- 一三 テトルスト Der Dürst. \*DS 172 Der wilde Jäger Hackelberg. / \*DS270 Der Türst, das Posterli

und die Sträggele. / \*DS312 Die Tut-Osel.

- 一四 有翼龍たちと無翼龍たちの話 Von Drachen und Lindwürmen. \*DS217 Der Drache fährt aus.  
 一五 ヴィンケルリートと無翼龍 Winkelried und der Lindwurm. \*DS218 Winkelried und der Lindwurm. / \*DS220 Das Drachenloch. \*DS217 Der Drache fährt aus.

一六 カステレン高原牧場 Kastelen Alpe.

一七 お花の高原牧場 Blümleis Alpe. \*DS93 Blümleisalp.

一八 マッターホルンに現れた永遠のメタヤ人 Der ewige Jude auf dem Matterhorn. \*DS344 Der Ewige Jude auf dem Matterhorn. / \*DS345 Der Kessel mit Butter. \*DS348 Das Muttergottesbild am Felsen.

Jude auf dem Matterhorn. / \*DS345 Der Kessel mit Butter.

一九 巖壁の聖母 Mutter Gottes am Felsen. \*DS348 Das Muttergottesbild am Felsen.

二〇 動物たちの楽園 Das Paradies der Thiere. \*DS300 Die Zirbelnüsse. / \*DS301 Das Paradies der Tiere.

二一 悪魔の橋 Die Teufelsbrücke. \*DS337 Die Teufelsbrücke.

二二 牝牛の小川 Der Stierenbach. \*DS143 Der Stierenbach.

二三 より良き石 Der Besserstein.

二四 十字架山 Der Kreuzliberg. \*DS340 Der Kreuzliberg.

二五 骰子が原 Die Würfelwiese.

二六 バーゼルの時の鐘 Die Basler Uhrlocke.

二七 アウグスト近郊なる異教徒穴の蛇女 Die Schlangenjungfrau im Heidenloch bei August. \*DS13

Die Schlangenjungfrau.

- 二八 ベルンハルト公誓言を守る Herzog Bernhard hält sein Wort.  
 二九 忠実なエックアルトの話 Vom treuen Eckart.  
 三〇 ツェーリンゲン家の起源 Der Zähringer Ursprung. \*DS527 Ursprung der Zähringer.  
 三一 巨人の玩具 Das Riesenspielzeug. \*DS17 Das Riesenspielzeug. / \*DS325 Die Riesen zu Lichtenberg.
- 三二 臺蛙の椅子 Krötenstuhl. \*DS223 Der Krötenstuhl.  
 三三 粉挽き小屋の熊 Der Mühlenbär.  
 三四 司教座聖堂王 Chorkönig.  
 三五 聖オットアイリア Sankt Otilia.  
 三六 父と息子 Vater und Sohn.  
 三七 大聖堂の時計 Die Münster-Uhr.  
 三八 シュトラースブルクの射撃祭とチューリッの菊 Sträßburger Schießen und Zürcher Brei.  
 三九 ブレッテンの小犬 Das Hündchen von Bretten. \*DS96 Das Hündlein von Brettta.  
 四〇 トリフェルス Trifels.  
 四一 カイザースラウテルンの赤髭 Der Rotbart zu Kaiserslautern. \*DS296 Kaiser Friedrich zu Kaiserslautern.
- 四二 舟に乗る修道士たち Die schiffenden Mönche. \*DS276 Die überschiffenden Mönche.  
 四三 シュヴァーベン録 Die Schwabenschüssel.

- 四四 シュパイアーの弔鐘 Die Todtenglocken zu Speier.
- 四五 ヴォルムスのユダヤ人たち Die Juden in Worms.
- 四六 ダールベルク一族の語 Von den Dahlbergen.
- 四七 ヴォルムスの象徴 Wormser Wahrzeichen.
- 四八 ラインの王女 Die Königstochter vom Rhein.
- 四九 オッペンハイム近郊のスウエーデン柱 Schwedensäule bei Oppenheim.
- 五〇 ジーゲンハイム Siegenheim.
- 五一 イエツテンの丘と王の椅子 イェツテン・ヒルヘーネー  
キョウシキョウノイサナ Jetten-Bühel und Königsstuhl. \*DS139 Der Jettenbühel zu Heidelberg.
- 五二 聖カタリーナの手袋 St. Katharinen's Handschuh. \*DS170 Rodensteins Auszug.
- 五三 ローデンシュタインの進發 Des Rodensteiners Auszug. \*DS224 Die Wiesenjungfrau. /
- 五四 エーギンハルトとヒト Eginhart und Emma. \*DS457 Eginhart und Emma.
- 五五 ヴインデック一族 Die Windecker.
- 五六 ロルシユのタッシロ Thassilo in Lorsch.
- 五七 鬼火 ヘーアツァンデル Der Heerwisch. \*DS277 Der Irrwisch.
- 五八 草地の少女とくさむ Die Wiesenjungfrau und das Nießen. \*DS224 Die Wiesenjungfrau. /
- \*DS225 Das Niesen im Wasser.
- 五九 沈んだ修道院 Das versunkene Kloster.
- 六〇 フランケンシュタインの無翼龍 フランクェンシュタイン  
ムウキリウ Der Lindwurm auf Frankenstein. \*DS219 Der Lindwurm am



\*分載試訳(その二)の伝説

- 六一 フランケンシュタインの驢馬扶持 ろばほふち Das Frankensteiner Eselslehen.  
六二 黄金のマインツ Das goldne Mainz.  
六三 ハットー、ヘーリガー、ヴェリギス Hatto, Heriger und Willigis. \*DS242 Der Binger Mäuseturm.  
/ \*DS474 Das Rad im Mainzer Wappen.  
六四 マインツの聖なる十字架 Die heiligen Kreuze zu Mainz.  
六五 ハインリヒ・女人讚美の葬礼 フラウトロー Heinrich Frauenlob's Begängniß.  
六六 聖女ビルヒルデ Die heilige Bilihilde.  
六七 フランク族の浴り場 フルト Der Franken Furt. \*DS455 Erbauung Frankfurts.  
六八 王の降誕祭 ヴァイハット Des Königs Weihnacht.  
六九 エツシエンハイム塔の話 トイハトクン Vom Eschenheimer Thurm.  
七〇 ファルケンシュタインの悪魔の道 トイハトクン Der Teufelsweg auf Falkenstein.  
七一 エツプシュタイン一族 Die Eppsteiner.  
七二 血の科の木 ブルートリンデ Blutinde.  
七三 神の難儀 ノイテゴツアス Noth Gottes.  
七四 レーダーベルク Räderberg. \*DS279 Räderberg.  
七五 囁きの声 ハル Die Wisperstimme.  
七六 燃える炭 Die glühenden Kohlen.



- 七七 死を告げる鳩 Taube zeigt den Tod an.  
七八 トハウンの猿 Der Affe zu Dhau.  
七九 坊さんの帽子 Das Pfaffenkappchen.  
八〇 長靴一杯の葡萄酒 Der Stiefel voll Wein.  
八一 荒れ狂う獅師 Der wilde Jäger.  
八二 シュパンハイムの創設 Spanheims Gründung.  
八三 モーゼル葡萄酒の起源の語 Vom Ursprung des Moselweins.  
八四 聖人たちの墓 Der Heiligen Gräber.  
八五 メッツは踊るのお断り Metz versagt den Tanz.  
八六 ヴィルドウングの悪魔の盟約書 Der Teufelsbündner in Virdung. \*DS536 Der Virdunger Bürger.  
八七 貞女フロレンティーナ Die getreue Frau Florentina. \*DS537 Der Mann im Phug.  
八八 トリアアの齡 Trier's Alter.  
八九 聖アルヌルフの指環 Sankt Arnulf's Ring.  
九〇 天罰靦面 Frevel wird bestraft.

\*本分載試訳(その三)の伝説

- 九一 殉教者たちの墓 Die Martyrer-Gräber.  
九二 聖女ゲノフェーファ Die heilige Genofeva. \*DS538 Siegfried und Genofeva.  
九三 ライン河畔の酒神たち Die Weingötter am Rhein.  
九四 七人姉妹 Die sieben Schwestern.  
九五 ルールライ Lurlei.  
九六 聖<sup>サンクト</sup>ゴアールの奇蹟 Sankt Goars Wunder.  
九七 兄と弟 Die Brüder.  
九八 さすらい歩く修道女 Die wandelnde Nonne.  
九九 シュタインの奥方 Die Frau von Stein.  
一〇〇 大胆不敵なクルツホルト Der kühne Kurzhold. \*DS471 Der kühne Kurzhold.  
一〇一 空の橋 Die Luftbrücke.  
一〇二 アルテンアールの囚<sup>ゲノ</sup>われ人<sup>ト</sup>た<sup>ヤ</sup> Die Gefangenen auf Altenahr.  
一〇三 ジーベンビュルクの話 Vom Siebenbürg.  
一〇四 ローラント<sup>ロラント</sup>の角<sup>ホルン</sup> Rolandseck.  
一〇五 リューデリヒの鋳夫<sup>グン</sup>た<sup>ヤ</sup> Die Knappschaft im Lüderrich.  
一〇六 最後の種<sup>サトウ</sup>蒔<sup>キ</sup> Die letzte Saat.  
一〇七 古<sup>アルテ</sup>ビルク一門<sup>ベルグ</sup> Der Alte-Berg.

- 一〇八 修道院の驢馬 Der Klosteresel.  
 一〇九 花咲ける司教杖 Der blühende Bischofstab.  
 一一〇 蜜蜂の礼拝堂 Immenkapelle.  
 一一一 ニーベルング・フォン・ハルテンベルクと小人のゴルデマール Nibelung von Hardenberg und der Zwerg Goldemar.  
 一二二 聖なるケルン Das heilige Köln.  
 一二三 市民マルシリウス Der Bürger Marsilius.  
 一二四 ケルン大聖堂の伝説 Die Kölner Dom-Sage. \*DS205 Der Dom zu Köln.  
 一二五 アルベルトゥス・マグヌス Albertus Magnus. \*DS495 Albertus Magnus und Kaiser Wilhelm.  
 一二六 グリユーン殿と獅子 Herr Gryn und der Löwe.  
 一二七 床の穴から覗く馬たち Die Pferde aus dem Bodenloch. \*DS341 Die Pferde aus dem Bodenloch.  
 一二八 馬で回って手に入れた森 Umrittener Wald.  
 一二九 カール皇帝の林檎の切れ端 Kaiser Karls Apfelschnitze.  
 一二〇 アーヘン大聖堂 Dom zu Aachen. \*DS187 Der Wolf und der Tannenzapf  
 一二一 ポネレン塔 Der Teufel im Ponellenturm. \*DS188 Der Teufel von Ach.  
 一二三 蛇の指環 Schlangening. \*DS459 Der Kaiser und die Schlange.  
 一二四 カール皇帝の帰還 Kaiser Karl kehrt heim. \*DS444 Karls Heimkehr aus Ungerland.  
 一二五 ファストラータの愛の魔法 Fastrada's Liebeszauber. \*DS448 Der Ring im See bei Aachen. /

\*DS459 Der Kaiser und die Schlange.

- 一二六 カール大帝の死と奥津城 Karl des Großen Tod und Grab. \*DS481 Otto III. in Karls Grabe.  
一二七 アーヘンの神殿騎士教会 Templerkirche zu Aachen.  
一二八 アーヘンのヒンツ小人たち Die Hinzlein zu Aachen.  
一二九 ペルフィッシュュで演奏した屈背の樂士たち Die buckligen Musikanten auf dem Pervisch.  
一三〇 翔び行くオランダ人 Der fliegende Holländer.  
一三一 スパなる聖レマクルスの足跡 Sankt Remachus Fuß zu Spaa.  
一三二 眠れる子どもたち Die schlafenden Kinder.  
一三三 駿馬バイヤールとバイヤールの城館 Roß Bayard und Schloß Bayard.  
一三四 ルーヴェンの死者たち Die Todten in Löwen.

## 九一 殉教者たちの墓

モーゼル河畔なるトリリアの下手にある古い、世に聞こえた修道院は、<sup>(1)</sup>聖マクシミン<sup>(2)</sup>という。これが建っている場所には異教時代既にディアーナの神殿があつた由。修道院はコンスタンティヌス大帝とその妃フラウイア・ヘレナがその創立者であることを誇っている。最初この僧院は洗礼者ヨハネに、次いで聖者ヒラリウスに奉獻されたが、第四代修道院長トランキイルスの時代、僧院が<sup>(3)</sup>聖マクシミンの遺骸を手に納めたので、以来現在の名で呼ばれるに至つた。コンスタンティヌス大帝が、かの名高い I・H・S・、In Hoc Signo —— <sup>(4)</sup>これすなわち vines [が続き]、<sup>(5)</sup>「この徴において汝勝利せん」となる——なる文字とともに十字架が天に現れるのを見たのは、この地方——ノイマーゲン近郊だ、との説が多い——でのことだつた由。この頭文字は昔の書法でイエーズス (I h e s u s) の御名を意味する。<sup>(6)</sup>聖なる教父アンブロシウス、ヒエロニムス、アタナシウスがしばらく暮らしたのはここだ、といわれるし、アタナシウスがその名に因む信条を書き下ろしたのもここである由。ここにはまた大司教ニケティウスとバシヌスが眠っているし、福音書の<sup>(7)</sup>黄金写本を書いたカール大帝 (「シャルルマーニユ」) の妹アダが憩うている。

そして、トリリア地域なるこのいと古き聖なる土地には、<sup>(8)</sup>聖マクシミン修道院近傍に<sup>(9)</sup>聖パウリヌス修道院がある。この修道院の地下聖堂はこの上もなく尊い多数の殉教者の巨大な骨壺となつた。皇帝マクシミアヌの総督リクテイオウアルスは主君の命令に従い、キリスト教徒のいわゆるテイベ軍団を至るところで迫害したが、この地方でも然りで、情け容赦無く殺戮した。トリリアの大司教パウリヌスは鉄鎖で絞首された。ティルススなる名の軍団指揮官の一人がパウリヌスの左手に、執政官<sup>(10)</sup>パルマティウスはその右手に埋葬された。聖者の頭の方にはテイベ

軍団兵とともに殉教の冠を授かった七人の聖堂参事会員たちが休らっている。その中の一人はマクセンティウスという名である。これに続くのはコンスタンティウス、クレセンティウス、ユステイヌス、レアンダー、アレクサンダー、ソーターで、最後の三人は兄弟である。聖パウリヌスの足許には、リクテイオアルスがおぞましい拷問を加えてから斬首させた四人の殉教者が葬られている。すなわちホルミスダ、パピニウス、コンスタンス、ヨウイアヌスである。トリリアおよびこの地方で殺された数千人の血潮は小川のようになってモーゼル川に流れ下り、その河波を遙か下流、ノイマーゲンの城に至るまで、紅に染めた。

## 九二 聖女ゲノフェーファ

モーゼル河畔のプファルツェル、あるいはプフェルツェル（小プファルツ）にゲノフェーファの館と呼ばれる塔を持つ邸がある。トリリア大司教ヒルドゥルフスの時代、ここに宮中伯ジークフリートなる人物が住んでおり、その貞節にして敬虔な奥方はブラバント公の息女だった。ところがある時、ジークフリートが聖地に出征しなければならなくなった。そこで妻をモーゼル河畔の居城に残し、腹心の家臣で名をゴローという者に庇護を委ねた。出立する前に、宮中伯は愛する妻ゲノフェーファと心を籠めて合歓、かくして彼女は男の子を授かった。けれどもゴローはいやもうひどい番人で、麗しい女主人に情欲を燃やし、奸智奸策を回らし始め、ジークフリートが部下の総勢もろとも海難で溺死した、との偽手紙を教通作り、宮中伯夫人に読み聞かせ、己の愛を告白、相手を抱き締めようとした。しかし奥方は拳でゴローの顔を打って拒んだ。そこで愛は一転して激しい憎悪に変じた。ゴローは、宮中伯夫人の身辺から悉く召使いを引き下げたので、奥方の分婉——これで彼女は男の赤ちゃんを産むの

だが——が迫った時には、老年の洗濯女一人を除き、介添えする者はいなかった。そのうち、奥方の背の君が息災で帰還する、との知らせが館に齎もたらされた。背信者ゴロ口はこれには死ぬほど驚愕きやうがくし、ある年老いた魔女に相談した。魔女はなんともおぞましい入れ知恵をした。ゲノフェーフアが産んだ綺麗な男の児が、宮中伯ゴッホーフが思い込んでいように彼の実子だなんてとんでもない、あれは料理番のドラコの種だ、と宮中伯ゴッホーフに吹き込むがよい、というもの。ゴロ口は主君を出迎えに旅立ち、言われた通りのことをやった。ジークフリートは悲嘆のどん底に落ち、自分をこうまで辱めた——嘘つきの不実な報告によれば——妻をどう処置すべきか迷った。するとゴロ口がこう提案した。自分がゲノフェーフアを子どももろともどこか水辺へ連れて行き、二人ながら溺死させよう、と。そこでジークフリートは同意したのである。その後ゴロ口は二人の下僕を呼び寄せた。彼らは、ゲノフェーフアとその息子を城から連れ出し、殺してしまえ、そして、これこれしかじか、と命じられた。けれども途中下僕たちは麗しい奥方と可愛らしい子どもがかわいそうで堪たまらなくなり、お互いこう語り合った。「この人がどんな悪いことをしたつちゅうのだ。どのみちおれたちが何かされたわけじゃあんめえ。どうせこの人が死ぬと決まっとるならよ、おれたちが命を取ることはねえわな。おれたち、一緒に連れてくるこの犬の舌を切り取ってよ、奥方を殺した証拠だつてゴロ口に見せようじゃねえか。そしてこの人はどこへでも好きなように行かせべえ」と。

かくいうしだいで、下僕たちはそうした。そしてかわいそうなゲノフェーフアを、絶望して、すすり泣き、祈るがままに委まかせ、子どもと一緒に曠野こうやに置き去りにした。この子をゲノフェーフアは悲しや悲しと名付けた。まだ生後三十日にもならず、悲嘆のあまり母親の胸の乳はすっかり涸れ果てていた。そこで哀れな若い母は全ての苦悩と全ての至福の母に懇願した。すると永遠の処女なる御方おんかたは寄る辺ないこの女性をいとおしんで恩寵を垂れたもうた。森の繁みから一頭の牝鹿めじかが出て来て、ゲノフェーフアの前に横たわった。ゲノフェーフアは坊やを獣の乳首に

継つらせ、自分とはいうと、森が与えてくれるもので身を養つた。そして木木や小枝、茨いばらや苔こけで自分と息子のため  
に小屋を作り、六年と三箇さんかげつ月暮らしたが、忠実な牝鹿以外生き物は目にしなかつた。

たまたまある時、宮中伯フアラウツグライフ、ジークフリートはこの森のある一帯で狩りをした。すると、犬どもが例の、その乳  
でゲノフェーフアと坊やを養つてくれた牝めすの角鹿ヒルシュを駈かり立てた。獵師たちと犬どもが獸の跡を追うと、牝鹿はゲノ  
フェーフアの小屋へと逃げ、少年の傍ひでりに跪ひざまずいた。そこでゲノフェーフアはその辺にあつた棒を手を取つて急迫し  
て来た犬どもを防いだ。この時、宮中伯フアラウツグライフが現れ、長い年月のせいで身に纏まとう物としてほとんど無くなつてこの  
森の女を見てびっくりした。宮中伯フアラウツグライフは、これは宿無しの異教徒の女か、漂泊ジプシーの女の類たぐひであろう、と推量し、「そ  
ちはキリスト教徒か」と声を掛けた。——答えて「わたくしはキリスト教徒でございます。——なれど、この身を  
覆おほえますよう、お召ましの外套マントをお貸かしてくださいまし」。——ジークフリートはそうしてやつて、どうして着物を持  
たないのか、また、どうして人里離れた森の中でこゝも孤独に住んでいるのか、と訊きねた。——「わたくしの着物  
は歲月のためにぼろぼろになつてしまいました」と彼女。——「そちはどれほどの間この森で暮らしておる。この  
童わらわはだれの子じゃ。父はいずれの者か。してまたそちの名はなんと」。——訊きかれたことに対してゲノフェーフア  
はこゝ返辞した。「わたくしはこの森で六年と三箇月孤独に暮らしております。これなる童はわたくしの息子。  
この子の父はわたくし同様神様がよつこ存じ。して、わたくしはゲノフェーフアと申します」。最後の言葉を耳  
にした、宮中伯フアラウツグライフは愕然がくぜんとした。すると従者の一人が近づいて、こゝう言つた。「殿、それがしの記憶に誤りなくば、  
これなるはまこと我らが奥方。もうずっと前にお亡くなりあそばしたはずの。——したが、お頸筋くびに黒子くろこがあるや  
いなやご覽みじろ」。——すると、なんと、その徴しむがあつたのだ。宮中伯フアラウツグライフはたじたと後ずさり、どうしたものや  
ら、茫然とした。そしていわく「この女がまだ結婚指環ゆびわを嵌はめているかどうか見届けよ」と。——指環はまだ嵌



まっていた。そこで宮中伯プファルツグラーフは名状し難い懊惱おうのうと深い後悔に襲われ、急いでゲノフェーフアに歩み寄ると、両腕で抱き締めて接吻くちづけし、少年を愛撫して、こう叫んだ。「しかり、これぞ余の妻。これぞ余が息子ぞ」と。——するとゲノフェーフアは、ゴロの奸計かんけいと背信によつて自分にいかなることが起こったか、逐一物語った。そこへこうしたできごとに何一つ気づかぬまま当人がやつて来た。宮中伯プファルツグラーフの部下たちは激怒して、こやつを刺し殺そうとした。しかし宮中伯プファルツグラーフは、控えよ、と命じ、このような裏切り者は騎士の手で殺す値打ちはない、と言明。これまで一度も犁すきを牽ひいたことのない牡牛かうしが四頭連れて来られ、この悪人の両手両足がそれぞれ綱で縛られ、その綱が牡牛たちに繋がれ、次いで牡牛たちは四方へ駈り立てられた。かくしてゴロは生きながら四つに裂かれたのである。

さて、それからジークフリートは奥方を居城へ連れ戻し、あらゆる榮譽を恢復しようとしたが、彼女はそれを受け入れようとせず、こう言った。「これなる場所で聖処女様が私を庇かばい、護り、目にはそれと見えませぬが野獸たちを近寄らせず、あの牝鹿を通じて我が子を養ってくださいました。ここをこのままわたくしの住まいといたして、あらゆる天使がたの女王様にお捧げしとう存じます」と。宮中伯プファルツグラーフはこの言葉に従い、「司教ヒルドゥルスに使いを送り、彼にこの場所を聖別してもらった。それからゲノフェーフアの願いに応じて教会建立の手配をした。宮中伯プファルツグラーフ夫人はこれまでよりましな屋根の下に住んだが、もはや人間の手になる食べ物を受け付けることができず、これまで慣れ親しんだ森の糧かてしか喉のどを通さず、発見されてからほんの数日しか生きなかつた。彼女は喜びと淨福の内に亡くなり、新たに造営された森の禮拜堂である我が聖母教会ウンザー・マリアン・キルヒェに憩いこうた。これはマイエンから程遠からぬところにある。そしてこの教会では奇蹟が少なからず起こり、敬虔なゲノフェーフアの物語はありとあらゆる地方に伝わった。もつともプファルツエルばかりでなく、マイフェルトにあるマイエンにもゲノフェーフアの塔なるも

のがあり、その地の 聖母教会フラウエン・キルヒエの方が本物の由。ここの大祭壇の後ろにゲノフェーフアが坐つて、糸紡ぎをする姿がしばしば見られるとか。

### 九三 ライン河畔の酒神たち

ドイツの古い押韻格言(16)によると、ライン河畔のバハラッハ(17)では最上の葡萄酒の一つができる、とのことだが、こにはその昔酒神バツコス(18)の祭壇があつたそうで、町の名はこの祭壇、すなわち「ばつこすノ祭壇(19)」に由来している由。祭壇の石を周辺の葡萄栽培農家にして葡萄酒醸造業者は 親石エルターンユタイン(20)とも呼んでいる。同地のラインの流れの中には巖いわが一つあつて、これはラインの流量がごく少なくなる折、つまり、非常な渇水で夏の気候が暑く乾燥している時にしか見えず、見えると常に葡萄酒の当たり年となる前兆とされる。なにしろ、こんな諺ことわざがあるから。「水の涸れたるラインこそ旨い葡萄酒をくれまする」。この巖そのものがバツコスの祭壇なのだ、と主張する者が多い。これはさまざまな模様で飾られている。舟人たちはこの 親石エルターンユタインが現れると、バツコスに擬した藁人形わらを盛装させて石の上に安置するが、これにはもしかすると、古の異教時代の儀式が遠く幽かに反響しているのかも知れない。学者たちが、信じられるものか、と頭を振ろうとも、伝説の中の信仰はこんな風に民衆の間に生き続けるのだ。ラインの流れの只中にある古いプファルツグラーフェンシュタイン城(21)にはその昔、宮中伯プファルツグラーフのそれぞれが使つたその揺り籠かごがあつた。なにしろ 宮中伯 夫人の産褥まむしむくは 悉くここに設しやちやうえなければならぬ、ということになつていたので。さて、この城塞の近くの町カウプにはなんと不思議な聖者テオネスト(22)に纏まとわる伝説がいまだに健在である。ちなみにこの名にはギリシア語のディオニュソス(23)（バツコス）が訛なまつたような響きがある。もつともこの

テオネストは異教の酒神だったわけではなく、キリスト教の殉教者だった由。彼はマインツですんでのところ死ぬほど拷問を受けたが、それから葡萄酒樽ワインデンを小舟代わりにライン河上を流れる運ぶまま下流へと脱出することに成功した。行き行けば行き行くほど、「樽たるの葡萄酒ワインで」ますますご機嫌になったテオネストは、樽に入ったままカウプ近郊に流れ着き、キリストの教えを弘めるとともに葡萄酒を、それも甘美な房をつけるものを栽培した。この甘美な房をテオネストはまず自分が乗って来た樽樽に搾り込んだ。彼がライン河畔のこの地に建設した町カウプは、その名をこれからもらったのである。その後カウプの人人は感謝を籠めて市の印章の中に葡萄酒樽ワインの中に坐っているテオネストの像を入れ、市の紋章に使った。今日もこれが印章である、さよう、それからまた後代カウプはライン河通行税と河川船舶業によって重要な町となった。

#### 九四 七人姉妹

プファルツグラーフェンシュタインの下手のライン河畔に高く屹立きつぷつする城の廢墟がある。麗シュェンベルクしの山なる城(24)である。ここにはかつてそれはそれは美しい騎士の姫君たちが暮らしていたとか。その麗しさは彼女らの住まう城そのものにはその名を与えたほどだった。しかし、七人姉妹のこの姫君たちは頗る綺麗なのと同じ度合いで、恋の道に関しては頗る冷淡かつ無情だった。騎士輩ばらの求愛を一切聞き入れず、次々と求婚者を拒絶、美しい七人姉妹の巖根いわねのような心に座礁して砕け散った若い貴族の心は少なくなかった。しかし、運命は彼女らに科す罰を定めていたのである。ある日一艘いっそうの小舟が城山の裾すそに着いた。乗っていたのは七人の凜凜りりしい青年で、騎士の装束を纏まとい、典雅な物腰ものこしだった。城へやって来た彼らは姫君たちに向かつて、我らは御心みこころと御手みでを請い願うしだい、と申し述べた。結

果は空しく、姉妹たちはいつも通り冷やかな応対だった。その時突然一天俄にかき曇り、陰惨な楽の音が響いて来たと思うと、青年たちは各各さながら輪舞に誘うかのように七人姉妹のそれぞれを抱き、踊りながら、旋回しながら、ふうわり城から連れ出し、撥ね橋を渡り、城山を下り、雷鳴轟き、稲妻の閃く下、激浪逆巻くラインの流れに入って行つた。——魅惑の岸边が再び明るく麗らかな風情を取り戻すと、なんと、河中から七つのごつごつした巖根が突き出しているではないか。これぞ、巖根のような心の七人の乙女たちが世の常ならぬ頑なさの罰として変身させられたもの。水量が多いと巖は没し、少ないと河面に現れる。ラインの舟人らは七人乙女という名で馴染んでおり、こんな言い伝えを語り合う。いつの日にか、だれぞ力のある男が、これらの巖を河床から持ち上げ、岸边に建立される礼拝堂の柱に使えば、乙女たちは救済されて、修復成つた城に再び戻り、何世紀にも及んだ厳しい贖罪も終わったこととて、めいめい幸せな結婚をすることだろう、と。



## 九五 ルールライ

ラインの河谷がカウプの下手で最も狭まる箇所箇所の兩岸には、よく俯くだする黒く不気味な片岩へんがんの巖壁いわかべが高く、こごしく聳そびえている。ここでは流れが一際射るように速くなり、波浪は一層高くざわめき、巖裾いわすそに砕けては、泡立つ渦を作る。この山峡やまがけの中、この奔湍ほんたんの高みにはおどろおどろしい気配が漂っている。ラインの麗うるはしの水の精ニクセ、油断ゆだんのならぬルールライ、あるいはローレライ(26)が巖の中に呪封じゆふうされているのだ。とはいえ、しばしば舟人たちの前に姿を現し、黄金こがねの櫛くしで長い亜麻色の髪を梳すき、聴く者を甘く惑わす唄を歌う。この唄に誘いざなわれて、巖に攀よじ登ろうとし、渦巻きに落ちて命を終わる男が少なくない。ラインの上流、下流を通じて、ルールライの伝説ほどだれもが口にする話はない。もつともこれは種種さまざまに変転、反響すること、さながらここなる巖壁の罅ひまのごとし。数多の文人が扮飾ふんしやくを施し——遂にはほとんど似ても似つかぬ物語にまでなっている。

ルールライはラインの水の精ワッサーゲストである。彼女を目にし、その唄を耳にする者は、胸から心臓を抜き取られてしまう。遙かな高み、その巖の最も高い頂たかねきに坐る彼女は、白い衣装を纏まとい、面纱ツェーメルを翻ひるがえし、髪を靡なびかせ、両の腕かいなで差し招く。けれどもだれも傍には近づけない。男が巖の頂たかねきに登りついても、さつと身を避ける。——それからふんわり戻って来て、蠱惑こわくに満ちた麗うるはしさで男を誘う——切り立った絶壁の縁まで。男の目には女の姿しか入らず、足許あしもとが堅固な大地だ、と思ひ込んで前に踏み出し、谷底に転落して五体を打ち砕く。

ルールライの諸伝承は、お互い共通点がないのに、陰鬱いんうつで物悲しいところだけは似通っているが、そうした他のどれよりも明るい色調のものはかくのごとし。昔むかし悪魔もライン河で船旅をし、ルールライの巖のところによつて来た。この地峡がどうも狭過ぎる、と思った悪魔は、対岸の巨大な巖壁をどこかへ移すか、流れを完全に堰せき止

めて舟の行き来をできなくするような石塊に打ち砕いて、ひろ拡げてしまおうとした。そこで悪魔はルールライの巖に背中をつつかつて、向かい側の山裾のところで巖壁を持ち上げたり、押ししたり、揺すったりをやらかした。この巖壁が揺らぎ始めた時、ルールライが歌い始めた。歌声を耳にした悪魔はどうにも妙ちきりんな気分になった。仕事を止めたものの、なにかもうこれ以上我慢ができそうもない。なるうことならルールライを自分の愛人にして連れ去りたくて堪たまらなかつたが、彼女は意の儘ままにはなりはしない。けれども愛欲のせいでおそろしく体が熱くなったので、悪魔はもうもうと湯気を上げた。ルールライが歌い終えると、悪魔は慌あわてて立ち去った。このままだとずっと巖に呪縛しゅばくされてしまうに違ちがいがない、と考えたので。でも、悪魔がいなくなると、おや、まあ、不思議、悪魔の姿形が、尻尾しっぽも含めてそっくり全部、巖壁に黒黒と焼き付けられていた。こやつはこれを形見にルールライに残したというわけ。それからというもの悪魔は、二度と再びラインの歌うセイレーネス妖女(28)に近寄らないよう用心した。またしてもあいつに絡め取られようものなら、おいらの仕事はしっちゃかめっちゃか、尻切れとんぼになっちゃまあ、と心配したのである。

さてルールライは今もなお静謐せいひつな月夜に歌い、今もなお巖頭に姿を現し、今もなお救済を待ち焦がれている。しかしかかつて彼女に惑まどわされた恋慕こいぼう男どもは死に絶たえてしまった。現代人にはルールライの巖に攀のぼり登のぼったり、月明の夜小舟に乗のって巖に近づちかづくようなゆとりなど微塵みじんも。せわしない蒸気船の回まわる外輪がいりんは休やすむことなくそこを通り過ぎ、そのごとごととざあざあという騒音さわおんをものともせずに突き抜けて響ひびいて来るような歌声や伝説を語る声のあらばこそ。

## 九六 聖ゴアールの奇蹟

アキイタニア<sup>(29)</sup>の国から一人の敬虔な修道士がライン地方とモーゼル地方にやって来た。彼はライン川の畔<sup>(30)</sup>にもしばらく滞在、キリストの教えを弘め、少なからぬ奇蹟を起こした。ルールライ下流に存するある巖は今なお彼の証となつてゐる。この巖には四角い窪みが彫られているのが見え、聖ゴアールの説教壇とも、聖ゴアールの寢床とも呼ばれる。かの聖なる御人はここで長いこと住み暮らして、福音を説き示し、遭難した舟人たちに力添えをした由。ライン河を隔てて互いに向かい合つてゐる町ザンクト・ゴアールスハウゼンとザンクト・ゴアール・アム・ライン<sup>(31)</sup>に、今もなお、そして今後幾久しく、聖者の名は生き続ける。ザンクト・ゴアールの背後、プファルツフェルトの近くにかつて聖者の記念柱が立てられたということである。聖者はザンクト・ゴアールにあつた自分の庵室<sup>(32)</sup>で亡くなつたそうだが、その跡地に彼に帰依した人人が禮拜堂を建立した。これはカール大帝の時代に既に存在しており、旅人、舟人、巡礼、巡拝者に対して物惜しみせずもてなしをする歓待の家として名高かつた。この地方を領有してゐたカツツエンエレンボーゲン伯爵家の一員<sup>(33)</sup>によつて造営された教会の地下納骨堂には聖者の等身大の彫像がある。ここにはまたかつてその他にも数多くの聖遺物が奉安されていたが、今は散逸してしまつた。聖ゴアールをトリリアの使徒と呼ぶ者が少なくない。かつて司教ルステイクスが特使らを遣わして聖ゴアールをかゝの地へ召喚したことがある。ルステイクスは聖者の奇蹟の噂を耳にしたのだが、信じてゐることができなかつたのである。聖ゴアールは使者らとともに旅立つた。けれども道中は荒れ果てていて、人跡も稀だつた。やがて糧食が尽き、特使らは「奇蹟が助けてくれなんだら、わしらは餓え死にいたす」と言つた。——すると聖ゴアールは奇蹟を起こした。彼が森の中に声を掛けると、乳の出る牝の角鹿が三頭出て来て、乳を搾らせた。使者一行はこの乳の



お蔭<sup>かげ</sup>で命を救われた。聖なる人がトリリアに到着して司教の前に案内された時、彼は歩いたため体が火照<sup>ほ</sup>っていた。なにしろ暑い夏の季節だったので。集会所の大広間の中に着ている外套<sup>マント</sup>を掛ける場所か掛け釘がないかと見回したが、そうしたものは見当たらなかった。そこで彼は外套<sup>マント</sup>を広間に斜めに射し込んでいる陽光に掛けた。諸人は驚嘆したが、司教は相変わらず疑い深かった。そしてたまたま同じ日に拾われた乳呑み児を連れて来させた司教が言うよう「おお、聖なる人よ、おぬしに叶<sup>かな</sup>うものなら、この哀れな嬰児<sup>えいじ</sup>の口から、この子の父親がそも何人<sup>なんびと</sup>なるや、我らに聞かせて欲しい」と。聖<sup>セント</sup>ゴアールが指を赤児の唇に触れると、広間に参集していた者たちは子ども<sup>子</sup>の口からはっきり次の言葉を聴き取ったのである。

我が父コソ

るすていくすナレ、

司教ナレ。<sup>(34)</sup>

すっかり黙り込んだ司教は聖<sup>セント</sup>ゴアールの奇蹟を起す能力を信じ、それ以上彼を試みようとはしなかった。そして赤児が更に語り続けることも望まなかったらしい。

かつてカール大帝はインゲルハイム<sup>(35)</sup>にあった宮廷から船でコーブレンツ<sup>(36)</sup>に行幸したが、聖<sup>セント</sup>ゴアールの庵室に立ち寄りずに通り過ぎた。これに気を悪くした聖者はひどい濃霧を生じさせたので、カールは上陸して、野天で一夜を明かさねばならなくなった。これに反し、お互い憎しみを抱き合っていた大帝の息子たち、カールとピピンはたまたま聖<sup>セント</sup>ゴアールの庵室で落ち合い、聖者は二人の胸に宥和<sup>ゆうわ</sup>の情<sup>じやう</sup>を注ぎ込んだ。彼は大帝の妃ファストラダ<sup>(37)</sup>

の懇願に優しく応じて、妃の激しい歯痛を治してやった。カール大帝は感謝して例の客もてなしの手厚い礼拝堂の賄い所に上等の葡萄酒を二樽贈った。聖者はこの酒樽を祝福して決して尽きることがないという力を与えた。ある時酒蔵管理係の神父が——どうやらこの樽の能力を試し過ぎたせいだろう——樽の栓をちゃんと締めるのを忘れた。そこで樽からはひどく酒が滴り落ちた。すると一匹の蜘蛛がやって来て、栓の口の下でせせせせと糸を紡ぎ続け、とうとう巣をびっしり織り上げたので、一滴も流れ出さなくなった。亡くなった後もまだ長いあいだ聖ゴアールは永続するその奇蹟を起こす力でこうしたなべてのことどもをやつてのけたのである。

## 九七 兄と弟

ライン河畔の隣り合った城塞シュテルンフェルスとリーベンシュタインに二人の兄弟が住んでいた。彼らはしく裕福で、父から受け継いだ遺産で堂々たる城郭を構えたのである。母親が亡くなると、彼らは更に豊かになった。もっとも二人には妹が一人いた。妹は目が不自由だった。兄弟はこの妹と母親の遺産を分け合うことになった。さて彼らは——その金はどっさりあったので——めいめいが順繰りに榼一杯ずつ受け取るという形で分配することにした。盲の妹はそのつど同じように、榼がちゃんと一杯だ、と感じた。けれども狡猾な兄弟は、榼が妹に回る番になるたびに、榼を逆さまにし、細い縁で囲まれている底を貨幣で覆ったに過ぎなかった。賢女は上からそれに触れて、榼一杯分もらった、と満足し、そうではないなどとは思ひも寄らなかつた。彼女はこうして神を蔑する騙くらかしに遭ったわけだが、それでもそうした金は神の祝福に恵まれ、ボルンホーフェン、キートリヒ、神の難儀とといった三つの修道院にたっぷり寄進をすることができた。これに反し兄弟の金には絶えず天罰が下り、資産は減る

一方、飼っている畜群はばたばた死に、耕地は電で壊滅、城は崩れ始めた。やがて兄と弟は仲良しだったのが仇同士に變じ、つい近くに隣り合っている城塞の間に隔てとして厚い壁を設けた。この隔壁の名残は今日なお見ることが出来る。遺産がすっかりおしまいになると、敵対していた兄弟は和解して、また仲良くなった。けれども幸運も祝福も授けられなかつたのである。兩人は一緒に騎馬で狩りに行く計画を調べ、先に目を覚ました方がもう一人を早晩窓の鎧戸に箭を射掛けて起こそうではないか、と約束した。ところがたまたま二人とも同時に目覚め、同時に弩の弦を引き絞り、同じ瞬間に鎧戸を押し上げ、箭を発射した。その結果兄弟それぞれの箭が相手の心臓に突き刺さった——これぞ二人が盲目の妹に対して犯した背信行為の報いだったのである。

こう語る者もある。運命の導きで兄弟の片方の箭だけがもう一人の心臓を貫いたのであって、生き残った片割れは贖罪のため聖墓への巡礼に旅立ち、東方の国で死んだのだ、と。仇同士になつたこの兄と弟について新たにいろいろ物語を創作した連中はまだ他にもあるが、そうした話は専門家なら一目で、その普民衆の中に息づいていた伝承ではない、と見て取れる。

### 九八 さすらい歩く修道女

ニーダーラーンシュタイン近郊<sup>(40)</sup>、ライン右岸に、かつてマツヘルンという女子修道院があつた。院内の規律はどう考えても神に嘉されるものではなかつた。近隣の幾つもの修道院から修道士たちが訪れ、放縦な酒宴、大騒ぎ、あまつさえ夜の輪舞まで行われるという始末。深更になると修道士たちは乗り込んだ荷馬車をせわしなく駈り立て、小川に沿つた谷あいの道をヘルヒハイムやニーダーラーンシュタイン指して帰つて行つた。信心深く徳高い修道女

はたった一人で、彼女はひたすらお祈りに身を捧げ、聖典の数を一心に読み、一方仲間の尼僧たちはありとあらゆる世俗の快樂に陶酔しきつていた。ある時、ミヒヤエルなる名で、マリーエンブルクの傍の静かな谷に住んでいる敬虔な隠遁者が、嵐の夜修道院の門に辿り着いた。折も折、修道院では挙つてラーンシュタインの教会堂開基祭をことほいでいた。祝宴は大層な盛り上がりで、愛し恋しのお客様がたにも不足は無かつた。隠遁者ミヒヤエルは、中へ入れて欲しい、と要求したが、俗界の罪を犯している女たちは霊界の目撃者を恐れ憚り、招き入れることなく、雨露を凌ぐ屋根も元気づけの飲食も提供せず、そのまま外に置き去りにした。信仰篤い御仁は激怒して全修道院を呪詛し、尼僧たちを梟と夜鷹に、助平修道士どもは悉く悪魔蛆虫に変えてしまった。そこで朝になると――修道院は消え失せており、それがあつた場所は蕭条たる曠野だつた。以来毎年ラーンシュタインの教会堂開基祭の頃ともなると、修道院が建つていた峡谷の奥から金切り声、わめき声、どんがらがつちやの莫迦騒ぎ、猥歌などが聞こえる。その合間には敬虔な歌声も混じるのだが。――それからおぞましい修道士の亡霊どもが焔を上げる車輪のついた荷車に乗つて、谷沿いの道をそちらへ向かうのが見られる。あのただ一人の信心深い修道女はというと、聖夜に、それからかの開基祭の折に、生真面目かつ穏やかな面持ちで、谷から流れ出るあのせせらぎの畔に立つ風雨に曝された路傍のキリスト磔刑像のあたりへときたま彷徨つて来る。なにやら本に読み耽つている様子である。彼女はだれにも害を加えはしないし、愛想良く会釈もするのだが、その姿を目撃するだけで多くの者はぞつとさせられた。

ところで、隠者ミヒヤエルが呪いを掛けてここなる土地から取り去つたマツヘルン修道院はモーゼル河畔のツァイトリンゲンの傍で再び発見され、敬神の念篤い尼僧たちが住みついた。隠遁者ミヒヤエルについてはこんな言い伝えがある。彼は死期が迫ると、遺骸が埋葬されぬままにならぬよう、神に懇願した。すると、なんと、彼が息を

引き取った時、ニーダーラインシュタイン近郊の古いヨハネ教会の鐘がおのずと一斉に鳴り始めたのである。引き綱を天使に引かれて。そこで人人が馳せ参じ、隠遁者の亡骸を運び、ヨハネ教会の墓地の聖別された土に埋葬した。

## 九九 シュタインの奥方

ナ―エ河谷のシュタイン城に同名の貴族の女主人が住んでいた。彼女は寡婦で、しごく雄雄しくかつ騎士らしくかつ城主を夫としていた。彼女はこの夫との間に四人の花も盛りの息女と二人の子息を儲けており、子息たちはいずれも既に騎士に叙任されていた。四人の息女は全て結婚していて、夫君は皆、非の打ち所のない、よくできた騎士だった。ある時シュタインの奥方は息子たち、娘婿たち、娘たちを客として豪華な宴会を催した。これら内輪の者以外にはだれも招かなかつた。宴席では一同心楽しく上機嫌だった。するとシュタインの奥方がこう語つた。「四人の立派な騎士の婚殿、二人の立派な騎士の息子たち、四人のしつかり者で花も盛りの娘たち。そして凜凜しい騎士でいらしたかの御方の寡婦が一人。わたしのように、かような幸せを誇れる寡婦がまたありましようか。わたしに授けられたこうした誉れの数はまこと身に余るものです」と。――母堂の言葉聞いた子息たち、息女たち、そして女婿たちは、彼女を帝国一番の幸福な寡婦だと褒め讃え、母堂の健康と長寿を祈り、朗らかに酒杯をちりんと打ち合わせた。しばらくすると、シュタインの奥方は、部屋の外で何か指図か手配をして来ようといった風情で座を立った。――そして集まった者たちは長いこと歓談していたが、そのうち母堂が一向席に戻つて来ないことに気づいた。もしかしたらちよつととうとうとしようとなつておいでかしら、と考へた娘たちはそつと寢室を覗いたが、シュタインの奥方は中にはいなかった。下男下女に訊いて回つたが、奥方が出て行くのを見掛けた者は一人

もいなかった。——そして、彼女がどこへ行つたかだれにも分からなかったし、彼女の姿は二度と見られなかった。つまり、奥方は決して戻って来なかったのである。

## 一〇〇 大胆不敵なクルツホルト

その昔、下<sup>ウンター</sup>ラーンガウ伯<sup>(45)</sup>クンツなる御仁がいた。ハインリヒ<sup>デア・フラインクラー</sup>捕鳥王<sup>(46)</sup>の父にあたるドイツ王コンラートの弟<sup>(47)</sup>の息子だった。——伯は剛勇無双の武者だったが、姿形はちつぽけだった。そこでクルツホルトという<sup>あだな</sup>綽名を付けられたが、これは親指<sup>ドイムリンゲ</sup>小僧とおつつかつつの意味である。けれども、クルツホルトの体軀<sup>たにく</sup>がそれはそれは小さくとも、彼の知力<sup>ちりき</sup>はそれはそれは大きく、ためにこの勇士は賢者と言われた。勇士クルツホルトはハインリヒ<sup>デア・フラインクラー</sup>捕鳥王<sup>(48)</sup>を鉄のように強固な友情で愛していた。クルツホルトの近縁者であるザリエル一族は王に対して謀叛<sup>むはん</sup>を起こし、兵を挙げたのだが。その中でもとりわけ<sup>(49)</sup>ロートリンゲン公ギーゼルバート、フランケン公エーバーハルトは一軍を率いて<sup>(48)</sup>ブライジヒの近く、アンデルナハ<sup>(49)</sup>の下手で、ラインを渡河しようとした。クルツホルトは僅か二十四人の兵士とともに対岸でこれを待ち構え、ロートリンゲン人ギーゼルバートが座乗する小舟が岸に着こうとした時、クルツホルトが恐ろしい勢いで槍<sup>やり</sup>をその舳<sup>はしけ</sup>に突つ込んだので、舟はたちまち沈んでしまい、乗っていた者は全員ラインの流れに巻き込まれて、水の藻屑<sup>もくす</sup>となった。この椿事<sup>ちんじ</sup>の最中、フランケン人エーバーハルトは上陸を果たした。と見や、クルツホルトはたちどころにそちらへ向き直り、馳<sup>は</sup>せ寄つて、剣でエーバーハルトをずんぶりと刺し貫いた。

ハインリヒ<sup>デア・フラインクラー</sup>捕鳥王<sup>(50)</sup>がもはやこの世にいなくなると、オットー——添え名<sup>あそな</sup>として一世、または大王<sup>デア・クローゼ</sup>・大帝とも——がドイツ王となった。この人もまた勇士クルツホルトを大いに尊重した。ある時王がクルツホルトとただ二人

で佇たつんでいると、捕らわれの獅子ライオンが檻おのを破り、二人の男目掛けて襲い掛かるといふ事件が起こった。得物えものを持ち合わせていなかった王は、クルツホルトの佩剣はいけんを取ろうとしたが、こちらは王に先んじて獅子ライオンに突進、これを殺してのけた。また別のある時、オットー王と対峙たいじしていたボヘミア公率いるスラヴ軍の陣中から巨人のように大きなペチエネグ(51)の男が現れ、その大変な臂力りよりよと恐ろしい顔つきを誇示して、オットーの將たちに決闘を挑んだ。すると往昔の巨人ゴリアテと小さなダヴィデの勝負さながら、大胆不敵なクルツホルトがその前に進み出て、槍を用いての徒歩たかの闘いに誘い、大男の刺突を素早く躲かすやいなや、こちらの槍をすさまじい力でその体に突き通して、相手を斃たおした。——勇士クルツホルトにも苦手が二種類あった。女と林檎りんごである。それゆえ彼は妻帯したことがなく、従って嗣子たつぎもいなかった。けれどもラーン河畔のリンブルクに壮麗な聖ザンクトゲオルク教会を創設した。この教会を彼はかの龍退治の勇者のために龍退治をした場所に建立、奉獻したのである。言い伝えによれば、昔一頭の無翼龍リントホルムがこの地に棲すんでおり、かつてあった城と今日の町の名の元であるリントブルクはこれに困ちまんだ、とのこと。このリントブルクが後世リンブルクに変わったしだい。剛勇クルツホルトの奥津城おくつぎは今日なおこの教会の中に見ることができる。

## 一〇一 空の橋

その昔、隣接する二つの壮麗な城塞が誇らかにかつ雄雄しくアール川(52)の河谷から向かい合つて屹立きりつしていた。両者の間をアール川が深淵となつてどよめき流れたのである。これぞヌーヴェンアール城とランツクロン城で、更に峡谷の高みに空中橋きゆうきょうが架かつており、二つの城の中心部を互いに結んでいた。この城郭の両城主、ヌーヴェンアー

ル伯とランツクロン殿は極めて親密な友人同士だったので、この橋を共同で建設したのである。橋材の接合には筆舌に尽くし難い伎倆が發揮され、橋脚が無いのに堅牢無比だった。そこで、二人の友垣はいつ何時でも逢え、しかもどちらもさつと帰宅することができた。本来なら、隣り合っているとは申せ、騎馬で城を下り、また騎馬で城に登るには数時間も掛かったのであるが。この仲良したちが死んでしまうと、橋は崩壊した。自然の力が滅亡させたのである。ただ、どちらの城にも橋全体を頑丈に支える役目の基部が残されていた。たまたまランツクロン城の騎士の子息が隣人であるうら若いヌーヴェンアールの女伯と恋に陥った。そして二人は父たちの友誼を忘れず、橋を取り戻したいと切望した。そこで伯爵の姫君は弩の箭にごく緩く巻いた紐玉を結び付け、一端を固定しておいて、隣城へと箭を射渡した。こうして城同士が再び紐で結ばれた。そして「この紐にくぐらせた」窓掛けの環に付いたもつと細い紐がこの紐に沿って動き、これを使って、恋の玉章やら愛の贈り物やらが明け方や黄昏刻に行ったり来たりしたもの。細紐は、真つ白でも真つ黒でもないもので、上の方で見てもよく分ならず、下からは皆目見えなかった。相思の二人はこうしてその胸の裡をよくよく理解し合うことができたので、やがて華燭の典を挙げ、言い伝えが語るところによれば、橋をもう一度再建した、ということである。さて、やがてこの橋も崩壊、その後二度と架け直されることはなかった。そして両城も崩壊、友誼も恋もはやかしこには住んでいない。さよう、ヌーヴェンアールの城塞はその廢墟を除いては消滅してしまっている。

## 一〇二 アルテンアールの囚われ人たち

二代目のヌーヴェンアール城（ノイエンアール城）の瓦礫は時の菌に悉く齧り尽くされ、もはや跡形もないが、



片や、誇らかなアルテンアール城(54)の廢墟は同名の村を見下ろすごつごつした円錐状の峰に、それだけ一層堂堂と空高く聳そびえている。強大な地域ガウグラーフ伯たちがこの城から全土を支配したのである。そのうちの一人、弟のコンラート・フォン・ホッホシユターデン(55)が大司教としてケルンを治めていたホッホシユターデン＝アーレ伯フリードリヒは、全伯爵領をその二つの牙城がじょうであるアールとホッホシユターデンごとケルン大司教管区に遺贈し、ために大司教管区はこれら強力な城塞をうまく利用することができた。ある時ケルンの市參事と市民らのだれかれが大司教に謀叛むはんした折、反大司教派の指導者である十一人の都市貴族たちが逮捕されて、アルテンアール城に厳しく拘禁されるに至った。苛酷な虜囚生活に長いこと苦しんだ彼らの唯一の気慰み、憂さ晴らしは一匹の小鼠こねずみだった。これを彼らは手懐てなずけたので、鼠は物怖じせず傍に来るようになった。もつとも、何か音を聴きつけると、さつと素早く自分の穴に潜り込むのだった。ある日のこと、囚とらわれ人たちがいつものように小鼠が楽しげに麵麩パンくず屑をポリポリやっているのを眺めていると——突然牢の外で鍵ががちゃがちゃ鳴った。そこで鼠はぱつと穴に逃げ込んだ。その時囚われ人の一人が、穴の中でもがちゃがちゃと音がしたのを耳にし、外がまた静かになって危険がなくなると、音の正体を突き止めに掛かった。すると、鼠穴の中には一挺いつとうの鏢やうと一挺いつとうの鑿たがねが隠されているのが分かった。これらはいくらか錆びてはいたが、それでもまだ充分使用に耐えたので、囚われ人たちは間もなく鎖を鏢やうで摩すり切り、枷かせを断ち割り、獄房の格子を切り取ることができた。次いで囚われ人たちは衣服を細く引き裂くと、それで何本も綱を作り、それをしっかりと繋ぎ合わせ、残らず窓から降下、山羊やぎの通う険しい小径を伝い下り、うまうまと脱獄に成功した。こうした逃亡がどうしてできたのか、だれにもとんと見当がつかなかった。

## 一〇三 ジーベンビュルクの話

ライン河沿いのジーベンゲビュルクの名称のもととなったのは、隣接する山の高みに位置して、お互い近近と聳えていた七つの城塞、つまり「七ツ城」でこそあれ、古人が訛ったラテン語で「モンスンシエベス」と称した山地に由来するのではない。それはまあ、この山山の寄り合いも小さい山地の名に値するけれども。これらの城塔の名を挙げれば、ドラッヘンフェルス、ヴォルケンブルク、レーヴェンブルク、ダーネンベルク、ブランケンベルク、マールベルクおよびシウトロームベルクである。かつてオランダ人たちは——テューリンゲンの人間がヘルゼル山について同様に考えたように——ジーベンビュルクの胎内には淨罪火の燃え熾る場所がある、と信じていた。ここには最後の審判の際に山羊の仲間に入れられざるを得ない、「悪人に分類されざるを得ない」哀れな魂どもも閉じ込められる、とのこと。そこでこうした魂どもはもう前もって事を、すなわち受ける判決を予行するのであった。しばしば城塞と山山——山の数は七つどころではきかないのである——の間にあれやこれやの魂が形を備えて出没するのが目撃される。両脚に碎石の重しを付けられ、よたよたと苦しげにふらつくのはケルンのさる高利貸しの亡霊で、鉛の靴を履いて最後の審判まで徘徊するよう呪われてかかる仕儀。それからまた、せわしなく動く大きな灯りで、ゆらゆら近づいて来ることがあるが、これぞ休憩安息することとてない。火男で、生前ボンの政務参事だったしごく猛烈な男。こやつは人民を苛斂誅求して甚だ貪欲に財貨をさらい込むことにまことに熱心だった代物で、自分さえ安泰なら全世界が減じようともまよ、だった。ある気さくな農夫がこの火男参事にケーニヒスヴィンターの近くでふと出くわし、相手が有名な政務参事キュンメルシュパルター一族の一員と気づき、こう呼び掛けたもの。「ちよつくら待つてくんなされや。おら、おめえ様の火でおらの煙管を点けてえだ。——そうそ——あんが

とさん<sup>(65)</sup>。——火男<sup>フオイマン</sup> ははあはあ、ひゅうひゅう喘ぎ<sup>あえ</sup>、火花の雨をざざと撒き散らしたが、歩みを留めて、自分を農夫の煙管<sup>パイプ</sup>の火種にしてやらなければならなかった。で、農夫は右の礼を述べてから、更にこう付け加えた。「生きてるときゃあおめえ様、なんちゅうても悪い人だったでの。ちつとばつか燃えてもごうつくぶりに差し障りがあるわけじゃねえら<sup>(66)</sup>」。四年に一度、焰<sup>ほのお</sup>の車輪の付いた馬車に乗ってやって来るのは、治めていた都市を敵勢に内応して引き渡した忌まわしいケルン市長で、赤赤と燃えながら巡行する。数数の峽谷がジーベンビュルクから吐き出す霧<sup>もや</sup>、峰峰の回りに低迷する暗雲、これぞ夥<sup>おびただ</sup>しい哀れな魂どもの群れなのである。時時、外に出ることを許されて新鮮な外気を吸うのを楽しんでるわけで、さながら汎愛校<sup>フライトロレン</sup>から解放された生徒たちのごとし。もつとも魂どもはいつもまた山の胎内へと退去しなければならぬのだが。この小山地の最高峰はドラッペンフェルスである<sup>(68)</sup>。

この山は数数の有翼龍<sup>ドラッグヘ</sup>やら無翼龍<sup>リントルム</sup>やらの伝説で山肌一面鱗<sup>うろこ</sup>と甲羅で覆われているといった具合。これだけで優に本が一冊書けよう。古きドイツの民衆本の主人公、かの角肌<sup>デア・ヘルネ</sup>の——角質<sup>ゲヘルンテ</sup>の、と誤って通称されているがそうではない——ジークフリート<sup>(71)</sup>が龍を斃<sup>たお</sup>し、焼き、溶け出たその脂を肌全体に塗りたくり、それが角のように硬くなったので、金剛不壊<sup>こしつふみえ</sup>の体と化したのは、ここでのこと。ただ、両肩の間には手が届かず、ために一部僅かな所に脂を塗れずじまいだった。これが後にこの英雄戦士が横死する原因である。ジークフリートがとある泉の畔<sup>ほとり</sup>でかがみ込んで、この箇所をなすすべもなく露<sup>あら</sup>わにした折も折、邪な仇敵<sup>あくつて</sup>が槍を投げつけ、これが致命傷となったのだ。

#### 一〇四 ローラントの角

ライン河谷を遙か下に望み、ライン河畔に聳え立つ城にローラントという名（カール大帝（Ⅱ）シャルマーニユ）

の甥アンゲルスのローラント（「ローラン・ダンジエ」<sup>(72)</sup>）だった、と語る者が少なくない）の若き騎士が住んでいた。彼は近隣のドラッヘンフェルス城の主である。城伯<sup>ブルクグラーフ</sup>ヘリバートの息女ヒルデグンデなる姫君と相思相愛の仲だった。老齢の<sup>ブルクグラーフ</sup>城伯も、息女が騎士ローラントと結ばれることに何ら異存がなかったので、愛娘<sup>まんなすめ</sup>を喜んで婚約させた。ところが華燭<sup>かじやく</sup>の典がまだ挙げられずにいるうちに、帝国の東部を脅かす<sup>ゲ</sup>フン族と異教徒の軍勢に対抗するため騎士たちに動員令が下り、騎士ローラントは義務と名誉の命ずるままこの招集に従った。ローラントは異教徒軍との戦いで数数の勇猛果敢な武勲を立てた。彼の大胆不敵な行動がキリスト教徒軍を戦況有利に導いたのである。間もなくそうした吉報がライン一带とドラッヘンフェルスに届き、その地で快哉<sup>かいさい</sup>が叫ばれた。けれどもそれからしばらく、騎士ローラントについての消息はまた聞こえなくなった。とうとう帰還する騎士の一人がジーベンゲビュルゲに立ち寄り、ドラッヘンフェルス城に一夜の宿りを求めて歓待された。この騎士は、主人側にそれがどれほど苦痛なところか知らぬまま、終盤の合戦の一つにおいて騎士ローラントが自分の傍らで壮烈な最期を遂げた、と語った。そこで大いなる苦悩と哀泣が生じ、悲嘆のどん底に落ちたヒルデグンデは即座にノンネヴェルト修道院で修道女になる決心をした。この修道院の上長である司教は親族だったので、修練女として過<sup>と</sup>ごす一年を免除して欲しい、とのヒルデグンデの要請を認め、一箇月<sup>いっかげつ</sup>の猶予期間が過ぎるともう彼女に修道服を纏<sup>まと</sup>わせた。<sup>(73)</sup>

そのすぐ翌日のこと、一人の客人がドラッヘンフェルスに登って来、城に招じ入れられ、だれの顔にも悲愁の色を見た。騎士ヘリバートは旅人が愛する騎士ローラントであることに気づき、驚愕<sup>きょうがく</sup>、喜悅<sup>きえつ</sup>こもこもとなった。ローラントは確かに戦場で死んだと思われて搬送されたのだが、快癒したのである。なるほど彼は手紙を送ったのだが、この知らせは遂に着かずじまいだったわけ。さて、いとしいヒルデグンデの安否<sup>やすび</sup>を訊<sup>たず</sup>ねた彼が聞かされたのは、衝撃の一言「あれは修道女になり申した」だった。

ローラントは茫然自失した。苦悩の余り口もきけぬままドラッヘンフェルス城を辞し、愛馬にまたがり、ローラントの角へと登る。——従者たちには暇を出し、ノンネンヴェルトを見下ろせる巖の座を一つ丘の上を選び、愛しい女の姿を追い求める。来る日も来る日も、来る月も来る月も、来る年も来る年も。隠者として暮らし、下の谷間で修道院の鐘が鳴ると祈りの言葉を呟く。ときたま彼は、自分を悼んで永久に解消し得ない誓願を立てた修道女ヒルデグンデを見掛けた。——しかしやがて長いことその姿を目にしないことが続き、遂には、彼女が現世に別れを告げ、永遠の平安に赴いたことを葬儀の列から察知した。その後間もなくローラントは死んでいるのを発見された。彼女の後を慕い、相愛の魂が永遠の愛の懷で再び溶け合うところへと赴いたのだ。

### 一〇五 リューデリヒの鉱夫たち

ケルンの大聖堂造営のため、その石材の大部分を提供したのはドラッヘンフェルスだが、フォルベルクを見下ろすリューデリヒ——ケルン司教座聖堂参事会の所有だった——も偉大なる大聖堂建築に鉱石を、それもドラッヘンフェルスより高価な鉱石を供給した、との伝説がある。リューデリヒの胎内からは計り知れない産出高の鉱石が生み出された。昔の異教時代にも既にそうだった。それゆえリューデリヒの鉱夫たちは後世キリスト教化されてからも異教の色合いに染まり、数数の不遜な所業に耽った。今日なおその地に異教徒の酒蔵と呼ばれる場所があり、リューデリヒ鉱山では、異教とキリスト教がやがて融合し、キリスト教が完全な勝利を得る前に、異教とキリスト教が相克した時期がしばらくある、と伝説は語り伝える。たとえば、鉱夫たちははなはだ不信心で、手押し車の車輪や巻き揚げ装置の滑車をオランダ産の乾酪でこしらえたり、聖餅のような形を印した小麦の丸麵麩を山の上から

ころころ転がし、「落ちて死んじやえ、主なる神、落ちて死んじやえ」と後ろからだとなり、更には後ろから石を幾つも追わせ、「悪魔よ、主なる神を追い掛ける、主なる神を追い掛ける」とはやしたたてたもの。——こうした夥しい悪業はどうとう天の報復の怒り呼び起こした。リユーデリヒの日当たりの良い草原で羊群を放牧していたあの信心深い羊飼いが、「牧人よ、群れを追ってリユーデリヒから去りなさい」と空から声がしたのを耳にした。——やがて鉦山の持ち主たちの前に一頭の猟獣がこれみよがしに現れ、彼らが急いで追跡すると、異教徒の酒蔵の洞窟に逃げ込んだ。彼らがその後から洞窟に入ると、突然雷のような轟きとともに全ての鉦坑が崩壊、鉦夫たちを圧殺した。縦坑は水没、横坑は通れなくなり、埋もれた縦坑の裂け目からある場所ですっと噴出した水は、押し潰された者たちの血で真っ赤だった。これは今なお噴き出しており、その色は今なおお血のように赤い。

### 一〇六 最後の種蒔き

ライン河の近く、ミューールハイムの郊外に昔デュンヴァルトなる修道院があった。この修道院は百モルゲン(79)にも及ぶ耕地に関して近隣の豪族、郷士ユンカイハル・フォン・シュレーブツシユと係争していた。修道院も郷士もこの広大な地所を我が物と主張したのだが、現実には支配していたのは郷士だった。とは申せ、そこから生ずる利益は法廷に持ち出された訴訟の経費として雲散霧消、すなわち、法律顧問、代言人、裁判官、審判人、書記といった輩やからに食い尽くされてしまふ始末。とうとう郷士ユンカイハル・フォン・シュレーブツシユは和解を提案、デュンヴァルト修道院の敬虔な神父たちに向かつて、こう述べた。「信仰篤き師父ご一同、我ら双方にとつてなんら益のない、かくも長きに亘る争いに、それがし、ほとほとうんざりつかまつった。かの百モルゲンは今後永劫修道院の所有といたそ

う。ただし、それには条件が一つござる。今一度の、それが最後の種蒔きのじや。して、これが実り熟して刈り入れ時となり、穀物の収納があい済んだら、それがしはかの百モルゲンに対するいかなる要求をも放棄いたす。

——「郷士殿、かようにご奇特なご決心に至ったとはげに神意のなせるわざでござろう。したが、さような約定を文書にして我らにくだされましような」と院長。——かくして羊皮紙に認められた証文が二通作成され、郷士が自分の印章をその封蠟に捺し、修道院長が自らのを、次いで大きな修士会の印章をこれに加え、副院長のそれが捺され、それからなお依頼を受けた騎士階級の証人たちの十二の印章が続いた。最後の種蒔きの収穫——これはまだ郷士のものとなる、とされている——が済んだら未来永劫の譲渡を約するこの証書は、まこと麗麗しい書状だった。さて、それから、郷士ハル・フォン・シュレーブツシユは地所を耕し、例の百モルゲンに種を蒔いた。これは秋のことだった。春となり、種が芽を出したが、世の常の種のようにぐいぐい伸びはしなかった。そうこうする内、行列を作り、旗を靡かせて畑を練り歩き、畑のために祈りを捧げる電の式典の祝日が来て、修道士たちはやがて修道院の財産となる耕地に蒔かれた種の様子を検分した。——けれど彼らは何を目にしたか——見たのは柏の芽生えだったのである。——「瞞着じや、瞞着じや」と修道院長と副院長、それから修士会の面々は叫んだ。——しかし、叫んだとて甲斐のあればこそ。いかんせん、証書にはこう記されていたのだから。「而して〔我らは〕郷士シュレーエンボツシユのハル殿が最後の播種を行うことに何ら異論無く、かつは何ら腹蔵無く、同意つかまつる。我らはかかることを確証せんと願ひししだいなり云云」と。郷士ハル・フォン・シュレーブツシユはすくすく生育して行く若い柏の森の領有をその後長いこと楽しみ、そこで野兎や山鶉の狩りをした。——樹樹は育ち、修道院長、副院長、そして当時の修士会の面々は一人また一人、果ては悉く「神の蒔きたもう種」の永久の眠りに就いた。——そして柏の樹樹はなおも伸び続けた。例のみごとな証書は文書庫の中で灰色になり、封蠟に捺さ

れた印章は塵にまみれ、だれ一人覚えている者はいなくなつた。——そして柏アイヒェの樹樹はなおも伸び続け、修道院は廢墟・瓦礫がれきと化し、続く新たな世代は古証文ふるの書面などもはや読むことはできなくなつた。

### 一〇七 古きベルク一門

誇らかなベルク伯爵(84)の城は眼下にデューネ川(85)の河谷を望み、高みに巍然ぎぜんと聳そびえ立つて一帯を支配していた。この家門がその名をベルク伯爵家一統に与えたのである。ベルクなる名はユーリヒとクレーフエの後に連なつてドイツ諸侯の多くの称号の中に滅びることなく継承されている。昔ヴッパール川(86)の畔ほとりにタイサーバント家の出でエーバーハルトという一人の代官が住んでいた。彼にはアードルフなる名の仲の良い兄がいた。二人はベルクの城とアルテナの城を所有していた。アードルフは結婚しており、エーバーハルトはオーディンタール城のある麗しい姫君に求愛していた。しかしこの乙女は花も盛りの年頃に死んでしまった。ベルク伯爵エーバーハルトは深い懊惱おうのうを武具の触れ合う音で押さえ込もうと、折からブラバント公ゴットフリートがリンブルクの騎士とベルク伯らに私闘フューヂを仕掛けて来たのを機とし、軍勢を率いて完璧かんぺきな勝利を贏かちえた。しかしながら傷を負つて、部下たちから離れ、部下たちは彼が死亡したと思わざるを得なかつた。それからのエーバーハルト伯はローマ、およびコンポステーラ(88)まで出る巡礼を行い、その遍路の途中テューリンゲンの地にやつて来て、ケーフェルンブルク城に立ち寄つた。彼の親戚で名をジッツォ、一説によればジークハルトという者が城主だった。聖者ポニファキウス(89)がテューリンゲンの民に初めて福音を説いたアルテンベルクにある聖ザンクトヨハネ教会の下方に、聖者ゲオルクを顕彰してもう一つ教会を建立し、その後谷間にアールフェロート修道院を造営したのは、他ならぬこのジッツォである。修道院の造営には



エーバーハルト伯もなにくれとなく助言をし、ゲオルゲン山ベルク山上の小教会に因ちかんでその修道院をゲオルゲンクール谷修道院と名付けたもの。それからベルクとマルクの伯爵エーバーハルトがその初代院長になった。さりながら伯爵の謙讓で敬虔けいけんな心根はこうした高い地位に長くは耐えられなかった。彼は〔神に〕仕えたかったのであって、〔人を〕支配したくはなかったのである。それゆえやがてテューリンゲンはゲオルゲンクール谷の修道院長という顯職を自ら進んで放棄し、またしても懺悔ざんげ三昧さんまいの一介の巡礼として旅を続けた。とかくする内彼はシャンパーニュのモリムン(モリモン)<sup>(9)</sup>修道院に至り、そこで最も卑賤な仕事をさせていたきたい、と願った。人人は彼に下男の賃金で豚の番をさせた。伯爵は素性を知られぬまま豚飼いを長年勤めた。エーバーハルト伯の兄アードルフと伯爵の夭折した許婚いひなづけの兄なる人はともに行方知れずになった伯の身を大層案じていたが、後者がモリムンにある聖者エギディウスおぐつきちゆうの奥津城詣おくつきちゆうでのため巡礼をした折、思いも掛けぬ賤役に従事している伯爵を発見した。ところで、この友が、一緒に帰ってくれ、とエーバーハルトにせがむと、伯は大声で「いざ、かの古きベルクアルテン・ベルクへ」と叫んだ。そしてモリムンの修道院長に、十二人の同胞修道士を自分とともに我が古里へ引き移らせていただけまいか、と頼み、帰国すると、ベルクの城を修道院に改造し、これを——木木の生い繁る高みで幾たびも幾たびも跪ひざまずいて祈ったあのテューリンゲンのアルテンベルクを追憶してのことか——やはりアルテンベルクと命名した。兄アードルフはエーバーハルトに先んじて共同創立者としてやはり新修道院に入った。さて、やがてエーバーハルトの臨終が迫り、兄が泣きながら弟の臥床ふしどの傍たなすに佇たずんでいると、エーバーハルトはこう予言した。一日と一時間すれば自分はアードルフと再会するであろう、と。そして事実アードルフはこの刻限に亡くなり、永遠とわの生の裡うちに再会を果たしたのである。

## 一〇八 修道院の驢馬

かつての伯爵でその後修道士となったエーバーハルトとアードルフがアルテンベルク修道院で世を終わると、モリムンから一緒に来たある修道士で同所では既に副院長だった者がアルテンベルクの修道院長に選ばれた。その名はベルノーといった。彼の下で修士会は、修道院をそれが置かれているごしい山巔さんけんからデューネ川がせわしない川波を転まろばせている谷間へと移すことを決議した。さて、新たな建設地として相応しい場所について、ここがいい、と言う者たちもいれば、かしこがいい、と主張する者たちもあり、意見はまことにとりどりで、一向に纏まとまらなかつた。するとベルノー院長は「兄弟たちよ、修道院の驢馬に決めてもらったらよからう」と提案した。さて、修道士たちはこの決定に心底賛同したので、驢馬が古城の城門に連れて来られ、そこからどう歩あこうと自由に任された。長耳君は悠悠と城山しろやまを下り、修道士たちはその後ついて行つた。谷間の、カイのせせらぎがシユプレヒツハルトから流れ下つて来る、その当時森と林間の草地しかなかったところに驢馬は立ち止まり、水を一口飲んで、辺りを見回し、イーアーと嘶いないて、寝そべつた。かくしてこの場所に新しい修道院が建立された。これは百年間同所に存続。次いで、ケルン大聖堂建立のため最初の石を置いた、かのコンラート・フォン・ホツホシユターデン(9)がアルテンベルク修道院をも来訪、豪奢ごうしゃと壮麗を極めた大聖堂兼修道院教会の礎石が置かれた。現在ここにほとんど全てのベルクおよびマルク伯らと後の公爵たちの墓所および墓石がある。一五一一年古来から令名高かつたこの高貴な一族は湮滅いんめつした。

## 一〇九 花咲ける司教杖

第四十六代ケルン大司教ブルーノもベルク＝アルテナ伯一門の出身である。この御仁はまことに信心深く敬虔な聖職者で、かくも枢要な職務に就くことを長い間拒んだほど、しごく謙虚恭順な人柄だった。高位は彼に重荷だったので、その地位にあったのは三年に過ぎず、次いでケルンからアルテンブルクに引き移ると、もう一度祭服に威儀を正して、素晴らしい司教座聖堂で荘厳ミサを司式した。それが終わるや、一介の慎ましいシトリー会修道士としてアルテンブルク修道院の修道士たちの群れに入り交じった。彼はその司教杖を記念として教会の大祭壇の後ろに掛け、まめやかに神に仕え、主のご降誕後一二〇〇年、聖グレゴリウスの祝日に亡くなった。徹夜課を詠唱するたぬ修道士たちが未明に教会に入ると、会堂は芳香に満たされていた。かの司教杖から棕櫚の枝と白百合の花が生え出ていて、それらがこのように薫薫と香ったのである。かくして一同はブルーノ修道士がいつも聖なる人だったことを知ったしだい。

## 一一〇 蜜蜂の礼拝堂

やはりアルテンブルク修道院だが、ある修道士がいた。彼は修道院の養蜂係をしていた。特に聡明な天分がある様子もなく、どちらかという知能が高いとは言えなかったが、ごく律儀な性分だった。さて、蒔いた種の発芽と生育がはかどるよう、聖歌を歌い、連祷を唱えながら耕地を縫ってご聖体が運ばれた折、単純素朴な養蜂係はつらつらこう考えた。聖餅が穀物や小麦を育ててくださるなら、蜂蜜と蜜蠟にも効き目があるはず、そうだろう、そう

に違いない。と。そこで浄められた聖餅ホスチヤをこっそり取って来て、これを空の硝子ガラスの籠かごに納め、蜜蜂小屋みつばちに置いた。するとすぐさま蜂たちがぶんぶん寄り集まり、ご聖体を囲む極めてみごとな聖櫃せいひつを蜜蠟ろうだけでこしらえた。これには幾つもの扉、丸屋根、小塔、尖塔アプ、追持チ、列柱、はたまたなんとも優美な装飾ゾクが具わっていた。すると野の生き物らがやって来て、この素晴らしい聖体モモス顕示台ランツの前に拝跪はいました。それから仲間の修道士たちがこの奇蹟に驚嘆したので、養蜂係修道士は自分が何をしかしたか思い知らされた。蜂の作った聖体安置塔ザクアメントウカスはそこから運ばれ、敬虔けいけんな聖歌詠唱の下、修道院教会に奉安され、蜜蜂小屋はとうとうと打ち壊されて、その場所に礼拝堂が建立された。後にこれは蜜蜂インメンの礼拝堂メンカペレと呼ばれるのが常となった。ところで養蜂係修道士はこの時以来前にも増して寡黙、かつ内に籠もるようになり、それから間もなく死んだ。

## 一一一 ニーベルング・フォン・ハルデンベルクと小人のゴルデマール

ユーリヒ地方(97)に貴族がおり、その名をニーベルング・フォン・ハルデンベルクといった。彼はハルデンベルク城、ハルデンシュタイン城、およびラウエンタール城あるじの主だった。彼の許もとにはゴルデマールなる小人の王あるいは妖精エルプが棲すみついていた。ゴルデマールはニーベルング・フォン・ハルデンベルクに大層親切だったが、その美しい妹をもこれに劣らずとても好いており、二人にいろいろ忠告を与え、あらゆることで力添えをした。妖精エルプゴルデマールは姿を見せたことがなかった、と申すより、ずっと姿が見えないままだったが、存在を知覚させはした。騎士と葡萄酒ワインを酌み交わし、騎士やその妹と盤上遊戯ゲイムをし、骰子賭博さいころとばくさえやり、この世の人間にはだれもその調べを真似られないほどいと巧みに竖琴ハルフェを奏でた。ニーベルングが、本当に妖精エルプが傍にいるのか確かめたい、と思うと、そ

の手を探るのだったが、手はとても小さく、華奢で、柔らかく、暖かかった。妖精はこのように三年の間ハルデンベルク所有の諸城に出没したが、人に危害を加えたことはなかった。ところがある時妖精の方が危害を加えられたのだ。城の者たちには妖精がいることは別に秘密にされてはいなかったもので、この連中が、その姿を目撃したい、それもどんな姿形をしているのか知りたい、という好奇心に駆られた。そこでひそかに灰と豌豆を床に撒いておいた。小人のゴルデマールは何も気づかずに広間に入り、豌豆を踏んづけた。そして滑って倒れたので、その恰好が灰にかたどられた。それはごく幼い子どものような姿で、足はみっともなかった。それからというもの、妖精ゴルデマールは二度と再びハルデンベルクの諸城に現れなかった。彼はどこかよそへ行ってしまい、ヘルティンという王女を拐かした。王女の母は息女が失踪したのに心を痛めたあまり亡くなったが、王女の方は、数数の古謡が誉め讃えているかの無敵の勇士ベルンのデイトリヒによって救出され、彼の妻となった。勇士デイトリヒがその名に帯びているこのベルンなる地名だが、これはスイスのベルンではなく、また、南国（「イタリア」のベルン、つまりヴェローナでもなく、本当のデイトリヒのベルンはボンのこと、この都市の最古の部分がヴェローナともベルンとも呼ばれたのだ、と説く者が少なくない。ベルンのデイトリヒの事績がこのライン地方一帯に夥しく残されており、その内数多くを昔の英雄叙事詩で読むことができるので、こうしたことどもや言い伝えにはなにがしかの真実が含まれているのかも知れない。ところで小人のゴルデマールはというと、せっかくの獲物をデイトリヒに奪い取られてから、巨人どもを助つ人と呼ばれ集め、周辺の山山や森の数をひどく荒廃させた。エルバーフェルトの町は他ならぬこの妖精にちなんでその名が付けられている由。町は妖精の原に建設されたのだ。

## 一一二 聖なるケルン

ケルン<sup>(10)</sup>はライン河畔に位する最古、最大、かつ最も名高い都市の一つである。この場所には既に原住諸部族が住みついていたが、キリストご生誕に先立つこと十六年、皇帝アウグストゥスの女婿マルクス・アグリッパ<sup>(11)</sup>によって都市が創建されたのだそう。それゆえラテン語名を「コロニア・アグリッピナ<sup>(12)</sup>」と称し、今日なおその名を冠している。数数の石造建築物がこの都市は遙かなる昔にも存在していたことの証左となつてはいるが、仮にそうしたことがなくても、この名がローマの植民を明白に指し示している。ケルンの町には一年の日数ほとんど夥しい教会や礼拝堂があり、それらにはこれまた夥しい聖人がたや殉教者たちの遺骸が奉安されていたので、この都市はもう昔から「聖なる」という添え名が付けられていた。また、ケルンはしばしばドイツのローマとも呼ばれた。この地に安置されている殉教者の遺骸、頭蓋骨、四肢の骨のどれについても無数の不思議な宗教伝説を語る事ができると申せよう。嬰兒キリストに贈り物を捧げた東方の三賢人たちもここに憩<sup>(13)</sup>うている。聖<sup>(14)</sup>ゲレオンとその兵士たち、聖<sup>(15)</sup>ウルズラとその一万一千の処女たち、龍退治の聖<sup>(16)</sup>ゲオルク、マカベア一統<sup>(17)</sup>の母たちとその息子たち。聖<sup>(18)</sup>マテルヌスは使徒聖者ペトルスの弟子で、他でもない、ナインの寡婦の息子だが、聖者ペトルスによつて、エウカリウス、ウアレンドティアヌスなる連れとともにドイツの地へ派遣された。しかし、エルザスのシュレットシュタットから三哩<sup>(19)</sup>のところまで二度目の死を迎え、埋葬され、四十日後聖<sup>(20)</sup>ペトルスの杖——これはいまなおケルン大聖堂の宝物庫に現存——に触れられて甦<sup>(21)</sup>り、ケルンの初代司教となつて百と十五年の生涯を送つた後、これでも三度目になるが最後の死を遂げた。それから聖なる、かつ敬虔<sup>(22)</sup>なる司教が延々と続き、次いでライン地方のこの上もなく高貴で著名な家系出身の、強大な力を賦与<sup>(23)</sup>された大司教たちとなる。これらの中には聖<sup>(24)</sup>セウエリヌス、

聖クニバート等々が教えられる。そして聖なる大司教アンノ。聖なる都市ケルンはこの御仁と初めて反目し、都市の聖人たち、殉教者たちの旗印を掲げて彼を追放したものの、やがて改めて恭順を誓わねばならなかった。——まだまだ他にも夥しい。この都市はかつてまことに大きな特権と自由を数数保有していたし、現在も依然としてその一部を確保している。これらの特権と自由の発祥は遙か昔に遡る。

### 一一三 市民マルシリウス

異教時代のことだが、あるローマ皇帝がケルンを攻囲してひどい艱難<sup>(註)</sup>辛苦に陥れた。市内では何もかも欠乏し始めたが、最も足りないのは薪だった。さてこの町にはマルシリウスという名の身分の高い市民で市民軍隊長を務める者がおり、妙計を案出、皆にうまい知恵を貸した。男に扮した女たちの一団が手車やら材木運搬用荷馬車やらとともにある市門から外に出て、森へ赴き、そこで木を伐るよう、あるいはこの一団が目指す仕事がそれだというふりをするよう、指図された。その一方、マルシリウス率いる市民軍が別の門から市外へ出て行き、敵勢が女性部隊に向かったら、その背面から襲い掛かるというものだった。何もかも謀った通りに行われ、市民軍は敵軍を猛攻、女たちの武装も見せ掛けではなかったもので、ケルン市民は完全な勝利を収め、夥しい戦利品を鹵獲、大量の捕虜を得、その中には市の攻囲者である皇帝本人もいた。皇帝は深い地下牢に監禁され、次いで市の中心広場で首を刎ねられることになった。今やローマ皇帝の血を吸わせるための高価な絨毯が敷かれ、今や皇帝はその上に跪かされた。その時皇帝はこう言った。「朕を生かしておいてくれい、コロニアの市民諸君。生きている朕の方が死んだ朕よりずっとそなたらにとって役に立とうぞ」と。——刑吏は執行を待つよう命じられ、もう一度市参

事会が開かれた。マルシリウスは、皇帝を助命するよう、ただし、大きな特権を幾つも彼に要求するよう、提案した。この提案はまたしてもケルン市民の賛同を博し、マルシリウスと市参事たちは要求する特権の諸項を起草、これを鞫した獣皮に書き記した。皇帝は、往古の慣わしに従って、これに捺印、嵌めている大きな指環を羊皮紙証書に垂らされた厚い封蠟の塊に押しつけ、その脇に署名をしなければならなかった。これが行われたのは水無月のある木曜のこと。以来ケルンの人人は聖霊降臨祭の後の木曜日はずっとこの日を祝い、薪採りの日と称し、唄を歌い、遊び戯れながら、お祭り気分で例の森に出掛けたもの。ところで名案を出したマルシリウスは、ケルンの筆頭市民にして市民軍隊長として大いに尊敬され、死去するとその柩は市壁の内部に埋葬された。そこは後世、聖使徒と呼ばれ、彼のために小さな記念碑が建てられた。また彼の立像は今日なおギユルツエニヒ——ケルン市の古い商工組合館にして舞踏館——に見られる。この都市の創立者マルクス・アグリッパの像の隣に、不朽の榮譽と追憶の徴として。

#### 一一四 ケルン大聖堂の伝説

ケルン大聖堂の建設が始まると、この聖なる都市ケルンにはさなきだに善男善女が神を礼拝する、夥しい教会や礼拝堂があるのに、その上かくも巨大な寺院を主のために造営しようとはなつたこと、と悪魔はひどく癩癩を起こした。そこで人間の恰好に化けた悪魔は企みを抱えて建築の棟梁に近づき、こう言った。「あなたはできっこないような難工事を引き受けるんだな。どうだ、賭をしないか。あなたが建物を仕上げる前に、わしはトリーアからケルンまで水路をこしらえてみせるが。あの素晴らしいモーゼル葡萄酒に負けず劣らずの清い飲み水をこのけっ



こうな町に流してよこせる上水路じよすいろうをなあ」。——「どんな賭をしろというのかね」と棟梁。——「こういう賭さね(18)  
 わしらのどつちかが工事を完成させたら、もう片っぱはどんなに仕事が進んでいようと、手懸けた工事を止めるの  
 よ。あんたが大聖堂の幾つもの塔の先つちよに一番高い塔飾ケローネりを載のつけ終わったら、わしはわしの仕事を止めるし、  
 トリアーからの水がわしの水路を通つて流れて来て、あんたの建物のとこまで行き着いたら、あんたはあんたの仕  
 事を止めるちゆうこと」。——大聖堂建築の棟梁はこの取り決めに同意し、双方仕事に取り掛かった。大聖堂の建  
 築はどんどん高く聳そびえ、巨大な水路橋すいろうきようを支える列柱——古代ローマ人しか築造できないような壮麗な工事——はト  
 リーアからどんどん近づいて来た。既に大聖堂の幾つもの塔が起重機クレーンの高(19)さに到達済みとなつていたある時、棟梁  
 は高みの足場の上に立つて、ふと下を眺めやつた。すると水路が竣工しんこうしているのを目にして愕然がくぜんとした。水路が  
 大聖堂のところに来ていたのだ。水はまだ湛たたえられていなかったが。すると遠くに何やら白い点が一つ動いて  
 いるようだった。それがずんずん近づき、見ると——水が矢を射るような速さで轟轟こうこうと流れ進み、水の上には白い  
 鴨かもが一羽浮かんでいるのだった。棟梁は打ち負かされたのを知り、塔と足場の高みから遙かな下へ跳び下りた。足  
 場まで随まいで来ていた彼の忠犬も後を追つて身を躍らせた。かくして大聖堂の完成は不可能になった。(20)一方水路に  
 しても強大な歲月の手が破壊してしまつた。その遺跡を民衆は悪魔の鉤爪トイフェルスクワと称している。悪魔は事のついでに、か  
 つ勝利の記念として、三聖王礼拝堂(21)を見下ろす聖壇内陣の屋根に石をぶつけた。そのため三、四尺フイットの幅の穴が開  
 いたままになった。後世の碑文に従えば、石を投げ落としたのは風だったさうである。ところでこの石は礼拝堂傍  
 の舗床ほしうの上にかつてあつた、あるいは今でもある。これは 悪魔石トイフェルスエタイン(22)と呼ばれている。石の上には雄鶏おんせりの爪つめのよ  
 うな印が見えるが、これは悪魔の鉤爪かぎづめによつて焼き付けられたもの。三聖王の遺骸——ダッセル伯にして大司教ラ  
 イノルト二世(23)が、ケルンにご下賜を、とフリードリヒ赤髭帝バルドゥワッに懇望すると、フリードリヒは聖なる遺骸がそれまで

奉安されていたミラノにこれを譲渡させたのである——がケルンに到着すると、一頭の駱駝らくたがこの貴重な積荷を運んだが、賢者の遺骸に敬意を表して塔の一つがお辞儀をした。そしてお辞儀した姿勢のままとなった。遺骸がライン河に面した市門を通って運び込まれると、以後決して神聖冒瀆ぼうとくが行われないようにと、この市門は壁で塞ふさがれてしまった。この聖者がたについては無慮無数の奇蹟が語り伝えられており、市は彼らの三つの王冠を市の紋章に採り入れている。かつて大旱魃かんばつが続いたため由しい飢饉きんが生じたハンガリアからたくさんの民衆がケルンを目指してやって来て、三聖王に雨乞いをしたことがある。最初の祈祷が唱えられるやいなや、一天俄にわかにかき曇り、恩寵の徴しるしとして豪雨が滝津瀬のごとく降り注いだ。<sup>(15)</sup>それからハンガリアにはたつぷり雨が降った。これに感謝して七年ごとにハンガリアからケルンへ使節団が到来、三聖王を讚美さんびし、その禮拜堂と禮拜堂付き聖職者たちに喜捨きせつをはずんだ。市参事会は使節団に四十日間飲食を饗応し、宿泊の便を図った。

#### 一一五 アルベルトウス・マグヌス

昔むかし高名な修道士にして学問に精通した博士がいた。その名はアルベルトウス・マグヌス(16)といい、その上はレーゲンスブルクの司教であり、後にライン河畔のケルンで死去、埋葬された。彼はありとあらゆる高等な技芸に熟達していた。さよう、建築の棟梁とうりやうでもあった。ケルン大聖堂の基礎設計を考案し、図面を引いたのは彼で、また、以前あったドミニコ教会の聖壇内陣を造ったのもそうだと主張する者が少なくない。彼の遺骸はこの教会に憩いこっていたのだが、ドミニコ会派のこれが崩壊した時、聖ザラトアンドレアス教会に移されたのである。

一二四八年、皇帝フリードリヒ二世の対立皇帝ヴェイルヘルム・フォン・ホラント(17)がその宮廷人ほとんどを従えて

ケルンにやって来たことがある。それも三聖王の日に<sup>(8)</sup>だった。アルベルトゥスは皇帝を随行の宮廷人とともにドミニコ会士たちの賓客として自分の修道院の庭園に招待した。折しも大寒波が襲来していて、ひどい積雪だった。市参事会員や皇帝の高官たちは、こんな季節に園遊会へ招くなんて、坊さん、脳味噌<sup>のうみそ</sup>が凍っちまったんだらう、と考へ、主君たる皇帝に、招待をお受けにならない方がよろしいかと存じます、と言上した。けれども皇帝は説得されるどころか、家臣に伴をするよう命じ、ドミニコ会派修道院に行幸した。すると早速庭園に案内されたものである。いずれの樹木も繁みも雪にすっかり覆われており、道は残らず雪に埋もれ、木木の葉や草には雪が降り積もつていた。ところが木<sup>こ</sup>の下蔭<sup>したかげ</sup>には、豪華な卓布<sup>テブルクロス</sup>が掛かり贅沢<sup>ぜいたく</sup>な飾り食器<sup>しやく</sup>が設えられた食卓と、壮麗な椅子<sup>いす</sup>が並んでいて、着飾った召使<sup>しやくし</sup>たちががずらりと控えていた。こうした対照の奇妙さに心そそられた皇帝は自分のために用意された椅子に腰を下ろした。そこで他の者たちもよんどころなく着席し、饗宴が始まった。すると空がさあつと晴れ渡り、快い陽射しが降り注ぎ、雪はすっかり消え失せ、姿を現した草や木の葉は瑞瑞しい緑で、大地から花花が一面に咲き初<sup>はじ</sup>め、木木は悉<sup>ことごと</sup>く葉と花を着けた。小鳥<sup>こどり</sup>も翔<sup>と</sup>んで来て、愛らしく啼<sup>な</sup>きしきるうち、しだいに暑気が強くなり、木木の花は落ち、果実の芽が膨らみ、やがて果実が熟した。そして皇帝はどうにも暑くなったので冬用の毛皮の長上着<sup>シヤウベ</sup>をかなぐり捨て、余の者<sup>なみど</sup>らもこれに倣<sup>な</sup>った。大満足で饗宴が終わると——さはさりながら、優美かつ諸事行き届いた召使<sup>しやくし</sup>たちがそも何人<sup>なんびと</sup>でいづれから来たのか、ご馳走の数数がどんな場所<sup>ところ</sup>で調製されたのか、だれも知らなかった——召使<sup>しやくし</sup>いたちはいなくなり、小鳥<sup>こどり</sup>も囀<sup>さえず</sup>るのを止めて翔<sup>と</sup>び去り、花花は萎<sup>しぼ</sup>み、木木はすっかり葉を落とし、辺りは冷え冷えとして来たかと思うと、次いで寒くなり、冬用の長上着<sup>シヤウベ</sup>が再び羽織られ、皇帝は会食をお開きにし、太陽は消え失せ、空は灰色に変わり、木木や葉や草にはまたしても雪が降り積もった。一同は、暖かな食堂で寒さを凌<sup>しの</sup>ごうと、とつとと修道院に逃げ込んだ。さて皇帝ヴィルヘルムは妙技に長けた接待者を賞讃し、彼と

修士会にたつぶり財貨を下賜したのだが、かように摩訶不思議な饗宴を体験することは二度となかった。

## 一一六 グリユーン殿と獅子

かつてケルンで霊界の首長の座に着いていた大司教エンゲルバートは市民たちとしばしば抗争し、これはやがて流血の闘いまで発展した。この司教は獅子を一頭持っていた。二人の司教座聖堂参事会員が彼のためにこれの世話をしていた。司教に敵対して常に争っていたのは市長のヘルマン・グリユーン殿で、市民の側に立ち、その特権の擁護者だった。とは申せ、かの司教座聖堂参事会員たちとは個人的に不仲なわけではなかった。この兩人、大司教の莫逆の友だったが、ある日——事件は一二六六年に起こった由——市長を自宅の饗宴に招き、話題を獅子に向けた。実はひそかにこの獣を断食させ、ひどく飢えた状態にしておいたのだ。そして、食事の前に獅子を是非お見せしたい、と言った。彼らはヘルマン・グリユーンを獅子の檻の戸口に連れて行き、これを開くと、不意に市長を中へと突き飛ばし、がしやんと扉を閉ざしてしまい、これですぐさま獅子が市長を引き裂いてしまっだろう、と思った。獅子は男を目にすると、鋭い牙の生えた口をかつと開き、尻尾をくるりと回し、跳び掛かろうと猫のようにうずくまった。ヘルマン・グリユーン殿は、危機迫る、と見て取るやいなや、急いで外套を左腕に巻き付け、手にしていた垂れ布付き頭巾をしつかと握り締めると、佩剣を引き抜き、獅子が跳び掛かるのを待たず、抜き身を構えて突進し、獣の喉に左腕を押し込み、剣をぐっさり刺し通した。それからしやにむに出口に辿り着き、食事はせずじまいで帰宅した。さて、この午餐だが、司教座聖堂参事会員のご兩人の体には大層有害だった。というのは、市長が突如捕吏どもを差し遣わし、彼らを逮捕させると、大聖堂に隣接する聖堂参事会館の大門の露台で二人一

緒に吊し首にしてしまったからである。その後かくも雄雄しい勇気を記念して、グリユーンの姿が他の三人の獅子使いととも石に刻まれ、市庁舎の拱廊上部の装飾として取り付けられた。今日、ハインリヒ獅子公、サムソンの獅子との闘い、それから獅子の洞窟に投げ込まれたダニエルの話がこのケルンの獅子殺しのそれと一緒に見ることが出来る。

### 一一七 干し草置き場の床の穴から覗く馬たち

ケルンなる十一使徒聖者教会の入り口近くに絵が一つ見られるが、これは世にも奇妙な物語を描いたものである。昔、リヒムート・フォン・アンドホトという市長がいたが、この人の夫人が亡くなり、埋葬された。墓の傍らで——通例のことながら——柩がもう一度開かれ、亡骸を見下ろして祈祷が行われたが、その折、夫人の指に大きな黄金指環が嵌まっているのが、墓掘り人の目に入った。さだめし宝石も幾つか鑲められていたことだろう。そこで墓掘り人はむらむらと欲心を起こし、夜になったら墓を再び開いて、死体から指環を盗もう、と思つた。しかし、それを実行したところ、死体が男の手をぎゅつと握つたのだ。なにしろ夫人は死んだのではなく、生きながら埋葬されたので。そして、棺から外へ出して欲しい、と言つた。びっくり仰天した墓掘り人は泡を喰つて逃げ去つたが、埋葬されていた夫人は体に巻き付けられていた屍衣を振りほどき、墓から足を踏み出すと、自宅を指し、扉を叩いて、わたしよ、開けてちょうだい、と下僕を呼んだ。その姿を見、声を聞いた下僕は、てっきり幽霊だ、と思ひ込み、事を知らせに主人の許へ急ぎ、吃り吃り、「ああ、ご主人様、奥様が、お邸の前の下の通りにまぎれもなくご自身立っておいでで、あたくしに、戸を開ける、とおっしゃってます」と言つた。——「このた

わけ者」と市長のリヒムート・フォン・アンドホト殿はのたもうた。「おまえの申したことが真なら、わしの白馬どもが〔厩うまやの〕二階の干し草置き場に立つだろうて」。——こう言い放った途端、階下から階上へとひどい騒音が上がって行き、下僕が調べに行くと、六頭の馬車馬が一頭残らず悉く階上に立っていた。市長は驚愕のあまり体が凝り固まり、今度は信じた。そこで夫人は中に入れられ、何枚もの温めた布で擦ったり、いろいろ薬剤を服ませたりといった充分な介抱を受けて、元氣を取り戻した。翌日、人人は〔厩の二階の〕床の穴から外を覗いている馬たちを目の当たりにして、だれもが訝しんだ。馬たちをまた下の厩に降ろすには、大きな足場を組んだり、幾つもの滑車装置を使ったりしなければならなかった。その後何頭かが剥製にされたが、これらは記念として以来同じように階上から外を眺めるような具合に置かれた。夫人はなお七年の間存命し、糸を紡いで織り上げ、白い亜麻布の美しい大きな窓掛けを製作、これを使徒教会アポストル・キルヒェに奉納した。

このような伝説が語られている場所は一つに留まらない。その中にはかつて古い帝国直属都市だったシユヴァインフルトの話がある。法律顧問アルバート・アンゲトラウテの妻が産婦の身で埋葬され、墓掘り人が盗みを働こうとして甦よみがえらせたのである。しかしながら、彼女も嬰兒えいじも長くは生きなかった。その墓碑はシユヴァインフルトの墓地に今日なお見られる。

## 一一八 馬で回って手に入れた森

デーレン(註)(ケルンとアーヘンの間)からさほど遠からぬところに村が一つあり、アーノルツヴァイラー(註)の集落なる名である。この名はカール大帝〔シヤルルマーニュ〕の宮廷に仕え、大帝のお気に入りだったある温順善良な歌い手にちな

んだもの。ある時大帝は家来の歌い手アーノルトに、「これまでのそちの数数の美しい唄の褒美として何が欲しいか言うてみよ」と命じた。すると歌い手はこう願った。「陛下がお食事を召し上がるお時間の内にわたくしが馬でぐるりを回れるだけの広さの森をご下賜くださりませ」と。願いは叶えられた。ところでアーノルトは、駒一頭が全速力で走り通せるだけの行程ごとにそれぞれ、充分休養している駒を自分のためにあらかじめ待たせておいたのだった。男が終日歩いてようやく回れるほどの区画の御料林を一周できるように、と。かくして彼は皇帝が午餐を始める時、自分なりの狩りを始め、疾駆しつつ至るところで木木の枝に剣を揮い、柏や樺の緑の葉をばらばらと撒き散らし、通った道の徴とした。そして戻って来るなり、皇帝の御前に参上したが、こちらはまだ食事を終わっておらず、林檎を食べている最中だった。カールは言った。「かように早く引き揚げてまいったようでは、そちが馬で手に入れたのはさだめしちつぽけな地所だろうのう」。しかしアーノルトはこう答えた。「とんでもござりませぬ。わたくしは、男が終日歩いてようやく回れるほどの大きな地所を馬で回りました」。——そこで、憤まじやかにさなる花、アーノルトのやつめには帝室林で咲きおらざったわえ、と考えた主君は厳しい目で歌い手を見やって、黙り込んだ。けれどもアーノルトは言葉を継いで、こう言った。「お怒りにならないでくださりませ、皇帝陛下。どうか、お怒りあそばさぬよう。御料林を馬で回ってご下賜いただきましたのは、わたくしのためではござりませぬ。ご存じでいらせられましょうか、デーレンからプレートベルク、およびユーリヒからベルクハイムに掛けての村人たちはだれもが薪に不自由いたしております。陛下がくださるとおっしゃいました森を、わたくしが馬で回りましたのはひとえにあの者たちのためでござります」。——そこで皇帝カールは家来の歌い手の真っ直ぐな心ばえを喜び、その森の区画をそっくり与える、と快く確約した。

## 一一九 カール帝の林檎の切れ端

大帝にして大王たるカールにはこんな習慣があった。食事が終わってもすぐ食卓を立たぬのが常で、林檎を一個、自分で皮を剥いて食べるのだった。ある時のこと、カールの三人の子息がその椅子の傍らに立っていた。そこでカールは、子息たちがどれほど自分に従順か試したい、と思ひ、まず長男——大帝と同じでやはりカールという名——を呼んで、こう言った。「これへまいって、そちの口を開けい。して朕の遣わすこの林檎の切れ端を受けるがよい。けれどもカールいわく「父上様、あなた様から林檎の切れ端などいただいたら、体面に関わります。わたくしは自分で林檎を剥けますし、自分で食べもできます」と。そこで父親は次の息子——これはピピンという名——を呼んで、こう言った。「これへまいれ、して朕の遣わすこの林檎の切れ端を口の中に入れるのじゃ。ピピンは「父上、なんなりとお言い付け通りにいたします」と答え、近づくと、跪いて、林檎の切れ端を口の中に受けた。すると父親は「朕はそちをガリアとイタリアの王にいたす」と告げた。それから三番目の息子——これはルートヴィヒという名——を呼んで、こう言った。「これへまいって、林檎の切れ端を受けい。するとルートヴィヒは同じく従ったので、大帝は言った。「そちに遣わすのはロートリンゲン（「ロレーヌ」とブルグントじゃ。してまた、朕が死んだら、このドイツ王国全土をそちのものにいたす」。そこで今度はカールも傍に来て、「あのう、父上、わたくしも口を開きます。わたくしにも林檎の切れ端を一つただかせてください」と言った。しかし王はこう答えた。「息子よ、そちは来るのが遅過ぎた。朕はそちには林檎の切れ端をやらぬし、領土も民もやらぬ」と。以来、これらの国には「カール、あんたは口を開けるのが遅過ぎた」なる言い回しが生まれた。



## 一 二〇 アーヘン大聖堂

アーヘン<sup>(註)</sup>大聖堂は森厳かつ壮麗に造営されたが、実はケルン大聖堂建立と同じでいたらくに陥る恐れがあった。資金が涸渇し、建築を継続することはできなくなり、素晴らしい大聖堂が未完成のまま建ち曝しになったのである。すると市参事会のお歴々の前に一人の見知らぬ財産家が現れ、自分は金ならたつぷり持っている、それを大聖堂が竣工するよう提供つかまつりたい、ただし参事会諸公におかれてもあることを約束してただかねばならぬ、と述べた。そこで市参事会がその見知らぬ男に、いったい何が欲しいのか、と訊ねると、男はこう答えた。「ささいなものでござるよ。竣工後大聖堂に真つ先に入る者の魂を頂戴いたせばそれでよろしい」との返辞。たかが魂一つせしめるのに、こやつ、それほど金に糸目を付けなかったとは、当時の人間はなんとも敬虔<sup>けいけん</sup>だったに相違ない。なにしろ、後世であれば魂なんぞもつと格安、かつどつさり手に入ったのだから。——さて参事の画面は、この見知らぬ男が悪魔だ、と気づき、震え<sup>おの</sup>戦き、長いことためらったが、結局はそれでもやはり承諾した。この契約を秘密にしておく、という条件で。さて、こうして特別な伎倆<sup>ぎりょう</sup>と援助が導入されたお蔭<sup>かげ</sup>で大聖堂は迅速かつ堂々と落成したが、かの秘密はやはり人人の間に知れ渡ってしまい、僧侶であれ俗人であれ、大聖堂に入ろうとする者は全くいなかった。悪魔は来る日も来る日も初物<sup>はつもの</sup>の哀れな魂を待ち焦がれたが、そのうちほとほとうんざりした。だけれもやつて来やしない。そこで悪魔は市参事会のお歴々を脅かした。皮切りに教会詣<sup>もうち</sup>でをするやつを好い加減に調達しないと、手っ取り早くあんたらの中から一人連れて行くぞ、と。市参事諸氏は怖くなり、一計を案じた。山地で狼<sup>おおかみ</sup>を一頭捕らえさせ、これを大聖堂の大門のところに連れて行き、大祭日の折のように鐘を鳴らし、玄関を開いてから、狼を堂内に押し込んだ。ここはまだ神に奉獻されていなかったの、悪魔がああも長いことたむろして

いたのである。悪魔はすぐさまやって来て、哀れな狼を鷲掴みにし、たちどころにその魂を首から抜き取った。しかし、ろくでもない狼の魂を手に入れたに過ぎないと気づくやいなや、吼え猛りながら寺院から飛び出し、青銅製の扉を激しく閉じたので、扉は罅割れた。この裂け目は今日なお見ることが出来る。一方、市参事会は悪魔を厄介払いできたのを喜び、狼とその哀れな魂を青銅の铸件にして、大聖堂に据えた。魂は朝鮮薊アトイナと樅ヒノキの毬果マキノの間のような形をしている。

この言い伝えには異説もある。さればこんなお話。悪魔が条件を出した時丁度、アーヘンの市参事会は一人の哀れな女の罪人を拘禁していた。女は既に死刑の判決を受けており、その魂は地獄行きと定められていた。さて、この女死刑囚が寺院に押し込まれ、悪魔はその魂を手に入れたが、どのみち女の魂はとづくに自分のものと決まっていたのだから、怒り狂って扉をばたと閉め、ために扉には罅が入った。その後、青銅の像が铸られ、悪魔自身が穢けがらわしい獣である狼の姿にされた。狼は樅の毬果の形をした魂を呑み下そうとしているのだ、と。

## 一二一 ポネレン塔トッセルムの悪魔

アーヘンの市壁にはポネレン塔トッセルムと呼ばれるが、つしりした塔があるが、この中には悪魔が一匹、決して外へ出られないよう呪封されている。こやつが中でしばしば荒荒しく騒音を立て、わめき、鐘を鳴らしたりするのが聞こえる。また、通りすがりの者をおちよくつたりすることもある。けれども、この呪封された悪魔は外へは出られない。最後の審判の日が到来するまでは。そこで、民衆の間に何か不可能な事についてこんな言い回しが生まれた。あるいは、近近こんなことがありそうだ、と他の者が言うのに疑念を表明しようとする場合にも。いわく「そうさな、

そんな事もあるだろうよ。アーヘンの悪魔が出て来るならな。——つまり、決して無い、と同じ意味である。

## 一二二 アーヘンを見下ろすロース山の話

狼おおかみの魂なんぞを掴つかまされて手ひどく欺あやむかれた悪魔はアーヘンの町におそろしく腹を立て、嵐の翼に乗ってネーデルラント(15)（「ロランダ」）の海岸へ行き、その白い砂丘が荒涼とした光に照らされて輝いているのを見、復讐計画を思いついた。大きな砂丘を一つそっくり引つ担かいだが、これは農夫が背負った粉袋(16)みたいのに、悪魔の両肩にだらりとぶら下がった。そうやってどえらい力を出してアーヘン目指して出発。さて、マース川(16)はとつくに越えてしまいい、ゾアース谷タール(16)に辿り着いた。その時激しい旋風つむじかぜが捲まき起こり、砂丘からたくさんの砂を悪魔の目に吹き込んだ。そこで悪魔は道に迷いそうになってしまった。と、一人の老婆が悪魔に行き逢あったが、この老婆はアーヘンからやって来たところ。で、悪魔は婆ばあ様に「アーヘンまでまだどれくらいあるかね」と訊きいた。——婆ばあ様が男をつらつら眺めると、馬の脚で相手の正体が分かったので、自分が履はいている靴を見せて、こう言った。「ご覧なされ、旦那さん。わしがアーヘンでこの靴を履いた時にはまっさらでしたのが、今は摺すれて破けちまっていますだ——まあ、まんだそれくれえありますだよ」。こう聞かされて悪魔はかんかんになった。なにしろもうくたくただったし、重荷くそいまいまの運搬と目に入った砂にうんざりしきっていたのだから。そこで怒鳴なった。「ええい、悪魔の名にかけて、この糞くそいまいま忌し砂め、ここに転がるとるがいいわ。——そうしてどどつ、ぎざぎざと砂丘を丸ごと投げ出したので、そこにこんもり盛り上がった。これがかの二つの山山で、一つはロース山(16)、またの名ルイス山(16)、もう一つはその隣の、もつと低い 聖救世主山 である。アーヘンではこう言っている。ロース山は例の老婆が悪魔をたぶらかした

抜け目<sup>ロ</sup>の無い根性<sup>ス</sup>に困<sup>ちな</sup>んだか、もしくは、そもそも老婆<sup>(50)</sup>というものは悪魔自身より抜け目<sup>ロ</sup>が無いので、そう名付けられた、もしくは悪魔がそう名付けたのだ、と。

さてアーヘンでは大聖堂が、教皇およびカール大帝により、夥<sup>おびただ</sup>しい司教並びに全ての民衆が陪席して、堂堂と神に奉献された。砂でできた山の一つの上にカール大帝は礼拝堂と修道院を建立、これらを救世主に奉献した。アーヘン市が邪<sup>よこしま</sup>なる者〔「悪魔」〕に脅<sup>おびか</sup>かされていた危険から救われたので。これが、聖<sup>サント</sup>・救世主<sup>サルヴァトア</sup>・礼拝堂<sup>カペレ</sup>である。

アーヘン大聖堂が神に奉献された時、一年の日数<sup>ひかず</sup>だけの司教たちが奉献儀式の介添えをすることになった。ところが三百と六十三人しか集まらなかった。そこで既に亡くなっていた司教が二人、マーストリヒトの<sup>(51)</sup>その奥津城<sup>おくつぎ</sup>から起き上がり、もろともにミサを行い、それが済むと再び<sup>とわ</sup>永久<sup>いこ</sup>の憩<sup>いこ</sup>いに就いた。

### 一二三 蛇の指環<sup>ゆびわ</sup>

カール大帝がチューリヒの「隠れ処<sup>アム・ロホ</sup>」と名付けられた邸<sup>(52)</sup>に住んでいた時、引き綱<sup>ひきつな</sup>の付いた鐘を吊した告訴柱<sup>あかこ</sup>を設置させ、どうかして裁きを拒まれた者が裁きを要求したいなら、いつ何時<sup>なんどき</sup>でも、たとえ、皇帝が午餐<sup>ごさん</sup>を摂<sup>と</sup>っている時であれ、その綱を引いて、鐘を鳴らすように、と布告<sup>ふれ</sup>を出した。すると、ある日、鐘が鳴ったのである。皇帝の下僕たちが急いで柱のところへ行つたが、だれ一人見当たらなかった。けれどもまたすぐに鐘が鳴り響いて止まらなかった。そこで皇帝は再び見に行かせた。すると下僕たちは大きな蛇が一匹、綱を口にくわえて、鐘を鳴らしているのを発見したのである。下僕たちがこの奇怪な出来事を主君に知らせると、皇帝はすぐさま立ち上がり、動物なればとて、要求があれば、さような相手でも裁きをいたそうぞ、と言った。すると、なんと、この長虫<sup>ながむし</sup>は皇帝の

御前で深深と頭を下げると、柱の許から川の汀まで下って行った。一同がそこで目にしたのは件の蛇の巢で、蛇の卵の上にはおそろしくでかい蟊蛙が坐り込んでいて、一向にどこうとしなかった。皇帝はただちに、焚き火を燃やし、蟊蛙を火ばさみで掴んで、火炙りにせよ、と命じた。これが実行されてからのある日のこと、皇帝が食卓に着いていると、例の蛇が部屋にうねくねと入って来て、食卓に這い寄り、高脚杯の蓋を上げると、貴重な寶石が一個鑲められた指環を口から杯の中に落とし、皇帝にお辞儀をして、素早くするすると去った。カール皇帝はその指環を取り、熱愛する妃ファストラダへの贈り物とした。そしてそれからというものはいや増して妃を愛するようになった。なにしろ、この蛇の指環には秘密の不思議な魔法が籠められていたからである。また皇帝は、自分が蛇に裁きを行った場所に教会を建立するように命じた。竣工すると、この教会は水の教会と呼ばれるようになった。

#### 一二四 カール皇帝の帰還

アーヘン大聖堂には象牙でこしらえた椅子が一つある。これにはごく古い彫刻が見られる。これぞカール大帝の玉座である。かつてこの雄雄しい英雄は、異教徒をキリスト教に改宗させようと、異教徒の国へと出征したが、王妃に別れを告げる際、留守居の妻にこう申し渡した。「十年の間操を守って朕を待つように。十年経つても戻ってまいらなんだら、朕が最期を遂げたのは確かじゃ。したが、今嵌めているこの指環を携えた使者をそなたに送ったら、そなたは使者の申すことを全て信頼し、朕が使者に託してそなたに伝えさせる通りにいたすのだぞ」と。

九年と数多の月が経過し、その間にカール皇帝はハンガリアで異教徒どもに対して勝利を収めた。が、故国では、

彼は死んだ、と思われた。国に峻厳しゅんげんな君主がいないので、アーヘン市の周囲やライン河沿岸一円は略奪、殺人、放火が横行するばかり。そこで市参事の画面は女主人、すなわちカールの妃の許もとに参上、国が滅亡いたしましたせぬよう、どなたかしかるべき殿を王としてお選びくださいませ、と懇願した。奥方は長いこと拒み続けた。なにしろ約束の徴しるしが送られて来ないのだから。しかし、貴族諸卿と市参事たちが総掛かりでやいのやいのとせっついたので、とうとうある富裕な王との婚礼の日取りを決めることを承諾した。やがてその日が近づき、婚礼まであと三日しかなくなった。式は絢爛豪華げんらんに行われるはずだった。その時主なる神はハンガリアの陣営へ御使みいをお遣わしになった。御使みいはカールに故国でいかなる事態が生じているかを告げ、こう言った。「旅支度を調べ、馬で国へ帰りなさい。三日以内に婚礼になります」。——「この身がいかにして」とカールが応じた。「百日の旅路を三日の内に騎馬までこなせましようや」。——「馬に乗りなさい。神はそなたとともにあります」と天使。そこで皇帝は駿馬しゅんまを一頭手に入れ、それに乗るとブルガリアからラーブ(16)まで一日で騎行した。その翌日はラーブからパッサウ(17)に行き着いた。ここで新しい馬を入手、「更に一日」これに乗ってアーヘンの市門外に到着した。神はカールとともにあったのである。アーヘンはいち早く全市を挙げて華燭かしょくの典をひたすらことほぎ囃はやす唄と楽の音の大賑にぎわい。なにしろ次の日は婚礼で、朝がた大聖堂で式が執り行われることになっていたので。そこでカール皇帝はまだ夜の内の丁度うまい時刻に大聖堂に入り込み、象牙の玉座に腰を下ろし、佩おびていた大剣を「抜いて」膝に横たえ、さながら石像のごとく泰然と鎮座し、遠乗りの疲れを休めた。さて、まず最初に大聖堂に入って来たのは聖物保管係(18)で、聖典類を運び、そここの祭壇の準備を調べ、燭台しやうたいに蠟燭ろうそくを立てていたが、一人の老人が厳かにひっそりと玉座に着き、白刃を携よわしているのに突然気づき、ぞつとして、この由を司教座聖堂参事たちに告げた。聖堂参事たちはそんな与太よたばなし断を信じようとはしなかった。かの椅子には王でなければ何人なんびとたりとも坐ることは許されなかったからである。

そこで燈火とうかを持ってやって来、彼らの内で最も大胆な者が怖おそめず臆おそせず玉座ぎよくに近寄った。ところがそこに一人の男がしんとして石でできたように着席しているのを目にすると、手にした燭台とうみょうを取り落とし、震え上がって院内から逃げ出し、司教にこの椿事ちんじを言上した。司教は即座とうざに二人の聖堂せいどう付き燈明とうみょう持もちを呼び寄せ、燃える燈明とうみょうを持って先に立つように命じ、その後のちに随ついて玉座ぎよくに向かった。すると老人が坐まっているのが見えたので、びくびくもので語り始めた。「そんな男おとこ、汝なんぢはそも何者なにものなるや申し述べよ。して、いかなる権利けんりによって敢あえてこの椅子いすに座まを占めるのか。汝なんぢ、この玉座ぎよくは我われらが主君しゅきんにして皇帝てんていたる御方みかたのものなることを存ぞんぜぬのか。——皇帝てんていはこれにこたえていわく「まことそちの申まをす通りぞ。いまだカール王カールと名乗なをつておった時とき、朕みづかはそのほうたち一同いどうによく知られていたのう。また、その折をは何人なんにんもこの椅子いすを朕みづかに拒こむことは許ゆるされなんだ。——そう言うなり腰こしを上げ、最も丈高さかい男おとこより頭かぶ一つ擢ぬんでた堂堂たうたうたる身長しんじやうで司教しきやうの前にすつくと立つた。そこで司教しきやうは欣喜きんじやく雀躍せつやくしてこう叫こんだ。「ああ、ありがたや、ようこそお戻かえりあそばしました、我が国王こわう陛下てんか下げ。ご帰還きかんとに祝福しゅくふくあれかし。——するとあらゆる鐘かねがおのずと鳴り始めた。かくして婚礼こんらいの客きやくたちはびっくり仰天おうえん、蒼惶そうかうとして引き揚げた。司教しきやうは王妃おうひのために陳弁ちんべんこれあい努こめ、お妃きさき様さまは無理強むりこわいされたのでございます、と告つげた。そこでカールは奥方おくかたを許ゆるし、寵愛ちゆうあいしておるぞ、と言いい聞きかせた。なにせ以前いぜんと変わることなく慈いづくしんでおり、彼女かのじよと別わかれることなど決きしてできなかつたのだから。

## 一二五 ファストラダーダの愛の魔法

カール皇帝カールは妃きさきのファストラダーダファストラダーダが病びやうの床とこに臥ふし、世よを終わるまで、不朽不滅こくふめつの情愛じやうあいで彼女かのじよを慈いづくしんだ。彼女

が亡くなったのはマイン河畔のフランクフルトでのこと。遺骸はそこから移されて、マインツにおいて埋葬すべく、かの地へと運ばれた。しかし皇帝は故人の傍から離れず、遺骸から遠ざけられるのをなんとしても承知しなかった。なにしろある種の魔法が生前と同様カールを死んだ妃に呪縛していたからである。これが長きに亘つたので、皇帝の側近の者たちは、しょっちゅうひどい腐臭を吸い込まねばならないのをどうにも我慢ができなくなった。そこで遂に、皇帝の母方のおじにしてマインツの司教たる賢人テウルパンが、これには何か魔法の力が働いている、と推測して探したところ、遺骸の口の中に入っていた——あるいは異説によれば、遺骸の髪に編み込まれていた——寶石を鑲めた指環、すなわちかの折チュリヒで例の蛇がカールの酒杯に沈めた品を発見、その指環を手に入れた。するとたちどころに魔法はファストラダの遺骸から消え去った。遺骸はこれまで皇帝にとつて麗しく、瑞瑞しく、咲き匂う花のようで、眠っているようにしか思われなかつたからこそ、埋葬することを許さなかつたのである。——ところがいまや妃の姿を一瞥した皇帝はぞつととして、もう二度と見ようとしなかつた。こういうしだいでファストラダは埋葬されたが、今度はカールの情愛は挙げて大司教に向けられるようになった。そこで大司教は、こうした恩寵の原因がいったい何なのか、はつきり分かつた。皇帝に随行してアーヘンに赴いたテウルパン大司教はフランケン山の麓にひっそりと静まりかえつた水深のある美しい湖を目にした。この湖中にテウルパンは蛇の指環を投げ込んだ。魔法による愛はすぐさまカールの心から去つて、この湖に向けられ、決して湖から離れようとしなかつた。湖を見下ろす山の上に居住用の館を築かせた皇帝は、今度はしょっちゅうここに滞在、四六時中湖に目を曝し、自分が死去したら必ずアーヘンの自身の大聖堂に埋葬するよう指図し、そればかりでなく、己が後継者は全て戴冠の前にアーヘンで塗油と聖祓の儀式を受けなければならない、と定めた。従つて長きに亘つて続いた累代のドイツ皇帝にもつい先頃の近世に至るまでやはり変わらずこれが挙行されたのである。今はもはやドイツ皇帝



に塗油戴冠することなく、帝国は既に終焉を迎えてしまっているが。

## 一二六 カール大帝の死と奥津城

カール皇帝の死が近づいた時、この英傑は、自分の埋葬をかように行え、と指図をしたが、同時に天と地の双方に大いなる不可思議な徴が生じた。これは偉大な皇帝の薨去をあらかじめ告知するものだった。たとえば皇帝の居城から市の立つ広場を抜けて大聖堂へと通じている屋根で覆われた歩廊が崩壊した。さて、カールが亡くなると、遺骸は文字通りの意味で「安置」された。新たに設けられた堅固な地下霊廟内の大理石製椅子に威儀を正して坐り、頭には冠を戴き、片手に王笏を携え、もう一方の手には福音書を持った状態で。それから墓所は上で閉ざされ、塗り込められた。これはこの大君主の死後二日目にすぐ行われた。そしてほんの数週間後子息のルートヴィヒ敬虔帝・王が参着、王国を継承した。ルートヴィヒはカールにもはや拜顔できなかつたし、西暦千年になるまで、だれもカールを見た者はいなかつた。この時帝冠を戴いていたのはザクセン朝の皇帝オットー三世だったが、ふとカール大帝の亡骸が見たくて堪らなくなり、二人の司教と一人の伯爵に伴われて、地下霊廟への入り口を壊させた。ほぼ二百年来安置されていた皇帝は、大理石の椅子に石の英雄像のごとく、今なお巍然として鎮座していた。頭には冠を戴き、手袋を嵌めた片手には王笏を持ち、膝には聖書を置き、全くもって畏れ多く恐ろしげだった。四人はいずれも恭敬の念を籠めてこの偉大な死者の前で身を屈めた。そして目にしたのは、死後も爪が伸び続けて手袋を突き破っており、腐敗はようやく鼻に及んでいるに過ぎない、ということだった。オットー皇帝は黄金で鼻を繕い、遺骸の爪を黄金の鉄で切り、白い衣を着せ掛けた。次いで聖遺物として奉安すべくカールの口から歯を一本抜き

取った。これが済むと再び墳墓を閉ざし、しつかりと塗り込めさせたのである。けれどもその夜カールが皇帝オットー三世の夢に気高くも恐ろしい様な様で現れ、こう語り掛けた。「なぜそちは我が許に来て、我が平安を乱さねばならなかったのか。間もなくそちは我が憩うところに憩うのだ。朕からさして隔たらぬところにな。して、そちとともにそちの血統は消え去るのだ」。オットー皇帝は目の当たりにしたものが心魂に徹し、教会一字と修道院を一つ建立、聖アーダルバートを顕彰して奉献した。そしてカールの遺骸を見た翌年亡霊の言葉が成就、オットー三世はアーヘン大聖堂の皇帝地下霊廟に葬られた。さて、その後二百年経ってホーエンシュタウフェン家出身の皇帝フリードリヒ二世がカールの遺骨を引き揚げ、これを金・銀製の櫃に納め、王冠その他の貴重品類は大聖堂の宝物として委譲した。

## 一二七 アーヘンの神殿騎士教会

神殿騎士修道会の拡がりには広範囲に及んでいた。彼らはアーヘンにも神殿騎士館を設けていたし、それがあつた場所は今日なおテンペル・濠と呼ばれている。修道会の敵たちが騎士団に対して蜂起した時、一三一四年は弥生月のおおぞましい日が、雄雄しき騎士修道会総長ジャック・ド・モレーを二人の死の盟友とともに火焰の中で殉教者に変容させた時、この神殿騎士礼拝堂は突然地中に沈み、その代わりに水柱が迸り出て、そこには池が広がった。これが起こったのはフリードリヒ皇帝がカール大帝を再び納骨してから、ほぼ丸九百年経った頃のこと。今日なお沈んだ神殿騎士教会の上でこの泉は湧き出ている。そして弥生月、迎りがしんと静まりかえっていると、地底深くで鐘が鳴るのが聞こえる。これは遙か遠くからのような響きでなんと不気味である。また、こんな伝説

も語られている。かの災厄の日の真夜中、テンブル神殿騎士の装束——その外套には赤十字が血で描かれている——を纏つた三人の騎士がテンペルグラーベン濠を越えて彷徨い歩く、というのだ。

## 一二八 アーヘンのヒンツ小人たち

ドイツおよびその近隣諸国至るところで小人たちや妖精たちの伝説が物語られている。彼らの呼び方は、ハインツエルメンライン(1)、バルクカマンドリ、ヒュートヒエン、ネッペンボルト(2)、ヘンクウチや小人、山の小人、帽子小人、ハインツヒエン、悪戯小人、クヴェーアヒライン、クヴァルクセ、シュテレスウオルク、ウンターイルディッツシェ、静かな衆、地べたの下の衆、といった具合にそこそこで様様であり、変幻極まりない不思議な精霊で、時に応じて人間に親切だったり意地悪だったり、助けてくれたり仇をしたり、役に立ったり邪魔したりだが、大抵は善人には好意を、悪人には敵意を示す。

このようなコーボルトたちはかつてアーヘンにもいて、そこではヒンツと呼ばれていた。ヒンツはドイツのここのやかしこで猫——魔女のお気に入り——の名にもなっている。棲処としていたのはエマ城(3)の地下の巖窟で、ここには夥しい通路と穴蔵があり、そこから夜ともなると時時ヒンツの群れがいても妖しいどよめき、ざわめきともにも押し出して来て、家家の扉をがた叩き、いろいろな悪戯やどうしようもないおふざけを働いた。こうしたヒンツ小人どもの百鬼夜行沙汰を防ごうとして、魔除けの呪文を唱えようが、扉や錠戸に白墨で十字の印を書こうが、何の役にも立たなかった。エマ城の巖山のすぐ近くに礼拝堂を建立し、その鐘が打ち鳴らされた時初めて、こうしたことは全ておしまいになったのである。——なにしろ地べたの下の衆というのは鐘の響きを聞くことができない、これに耐えられないので。ところがアーヘン市民は、礼拝堂建立でますますもって厄介ごとを背負い込ん

だことに迂闊にも気づかなかつた。そのわけはこう。なるほどヒンツ小人<sup>ライン</sup>どもは巖窟から立ち去りはした。けれどどこへ行ったのか。——彼らはアーヘンの市壁のある古い塔へ移住したのだ。ここへはエマ城<sup>ブルグ</sup>の下の巖山との間に地下道が通じていた。そこでいよいよまた莫迦騒ぎが始まった。この古い塔はケルン通りから程遠からぬところにあつたので、この通りの家は夜になるとどんどん戸口を叩かれ、竈<sup>かまど</sup>には火がばちばち燃え上がり、台所の鍋釜類<sup>なべかま</sup>がちやがちやぶつかり合い、これがまた何時間も続くので、家の者たちは一睡もできない始末。性悪な騒霊<sup>ポルターガイスト</sup><sup>(10)</sup>を鎮める手立てをどう講じたらよいか、とんと思案に余つた。そこへ世間を広く遍歴している旅職人がどこからアーヘンへやって来て、この妖異を聞かされると、こんなことを語つた。そつういふ小人衆<sup>ツヴェルク</sup>はテューリゲンにもザクセンにもたくさんいる。イエナ近郊、ケーニヒ湖<sup>ゼー</sup>の辺り、ブラウエンの傍、ハルツ山地<sup>ヴァルト</sup>の麓<sup>ふもと</sup>のホンシュタイン伯爵領、ザクセンのツイッタウ近く、シレジアのツオプテン、ボヘミアのクッテンベルクその他もの場所、なおまたフォイクトラント全域、スイスのピラトゥス山麓<sup>さんろく</sup>、エルツ山地<sup>エルツ</sup>、ザルツブルクの傍のウンタースベルク、およびライン河畔などなどに。で、どこの家でも戸口に、金属製でも陶器でも何か料理用具を置いておくに越したことはない。これをヒンツ小人<sup>ライン</sup>たちはとても嬉しがり、夜それを使い、壊したりしないで元通りその場所に戻して、その代わり人間を構わないでくれる、と。この親切な旅職人の助言を試してみると、確かな効能があつたので、皆職人の言つたことに従い、悩まされずに済むようになった。その後余所者<sup>よそ</sup>の兵卒が二人アーヘンに到着したが、この連中は兵舎で事のしだいと言ひ伝えを耳にし、アーヘン市民が深鍋とか釜とかを小人たちのために並べておくというのをおちやらかして止まず、そんなもん世の中にいるわきゃねえ、とせせら笑い、夜間歩哨勤務に立つぞ、と突つ張つて、ヒンツどもにやびかびかの釜の代わりにびかびかの軍刀をお目に掛けてやらあ、と言ひ捨てた。それから吞兵衛<sup>のんべゑ</sup>兵士らは酒を酌み交<sup>く</sup>わし、戸口に坐り込んで放歌高吟、しばらくいかにも楽しそつだつたが、

そのうちひつきりなしに「おい、ヒンツだ。さあ、ヒンツが来やがるぞ」と叫びながら、退屈セウケン凌シぎにお互い同士道を追っかけっこしたり、駈かり立て合ったり、どたばたやっていたかと思うと、ヒンツエン小路ヤスライを抜けて例の古い市壁の塔まで走って行った。そこでもう一度二人がわめくのが聞こえたが、それつきりしんと静まりかえってしまつた――。

翌朝、広言を吐いた男たちはヒンツエン塔トウカムスの前で倒れて死んでいた。お互いの体に剣をずんぶり突き通して。――その後もまだ長いことヒンツたちの出没は続いたが、とうとう、一件の出る横丁の近くに司教座聖堂参事教会が造営されると、またしても大きな鐘の響きがヒンツ小人ラインたちを永久に追い払つた。

## 一二九 ペルフィツシュで演奏した屈背の楽士たち

古き帝国直属都市アーヘンに昔二人の楽士が住んでいた。どちらも小さいとはいえない背瘤セコガを持っていた。もつとも兩人に共通していたのはそれだけ。なにせ一方は温良で好い氣立て、もう片方は怒りっぽくて陰険、妬ねたみ深くて欲張りだったので。さて、ある時、前者がどこやらの村での婚礼の伴奏に呼ばれて行き、宵も深まつた頃ようやく家路についた。なにしろとても愉たのしかったので、祝宴で一杯、一杯、また一杯、と随分きこしめしたものだから、途みちすがら高く聳そびえる大聖堂の脇を抜けながら、心浮き浮き、陽気な戯ざれ唄を口笛で吹いたもの。そうこうする内鐘楼の鐘が撞つかれて真夜中を告げた。するとすぐさま、何かこう不気味でぞおつとする感じで、身の周りになにやらふわふわゆらゆらするものが漂つて来た。そこで楽士は妖怪変化が怖くてならず、恐怖に駈かり立てられてしゃにむに鍛冶屋横丁シユメツザツセを抜け、ペルフィツシュ⑧――これは魚市場である――へと急いで進んだ。ところがなんとまあ、そこ

が煌煌と明るいのを目の当たりにしたのだ。魚の売り台が悉く照明されており、豪華な卓布が掛かっている。その上には貴金属の器に入った葡萄酒と数種の料理がふんだんに並んでいた。そして貴婦人がが食卓に着いてご馳走を食べ、大いに杯を干していた。そうした上臈衆の一人がごとと楽士の傍に歩み寄り、「のう、提琴弾き。そなた、丁度良い折に来やった。さあ、我らのために一曲奏でてたもれ。我らは踊りたいのじゃ。されどその前にまずは一献いたせ」と言い、黄金の高脚杯に入った香り高い葡萄酒を差し出した。楽士は飲んで、楽しみに気分がいとど昂揚、楽器を構えるなり、愉快な調べを弾き始めた。女性たちは二人ずつうち連れて拍子の急な輪舞を踊り出し、提琴弾きの舞踏曲は夜の静寂を貫いて狂ったように鳴り響いた。やがて時計が十二時四十五分を打った。すると、渦を巻くように旋回していた組になった踊り手たちは疲れ切ったかのようにだんだんに舞踏を止めて行った。——最初に提琴弾きに声を掛けた上臈がまた楽士の傍に来て、「お礼申すぞ、謝儀も遣わす」と言いながら、片手で男の背中をそつと擦った。そこでこちらは相手が自分を引き寄せようとしたのか、と思つたが、その途端上臈は消え失せ、他のご婦人がたもこれまた同様、それから燈火も料理も器も——何もかも——影も形もなくなった。——そして大聖堂の時計が一時を打った。楽士は身も軽やかに気持ちよく家に戻つたが、自分の体がどうなつたのか、これっぱかりも気づかなかつた。けれども、着物を脱ぎ捨ててみると、なんとまあ、背瘤がすっぱり無くなつていたのである。あの夜の踊り手が謝儀として払い落としてくれたわけ。この奇譚は間もなくアーヘン中に広まり、そうすぐにでもなかつたがもう一人の屈背の楽士もこれを耳にした。妬ましくて堪らなくなつたこの男、あのやろうにそんなうまいこと行つたんなら、このおれ様だつていい目に逢つて当たり前だわい、と考へた。そこで夜になるのを待ちかねて、真夜中までまだ随分あるのに、提琴と弓を手にしてペルフィッシュに突つ立っていた。とうとう鐘が鳴ると、やはり魚の売り台が明明と輝き渡り、貴金属の器がずらりと並び、何もかも前回と同じで、一人の

上臈が香り高い葡萄酒を男に差し出し、舞踏曲を演奏するよう求めた。で、やってみたところ、なんと、弾き始めた舞踏曲はそのつもりもないのに葬送の調べになってしまい、踊りは死人の踊りに、優雅な婦人がたは骸骨と化した。そして十二時四十五分が打つと、あらかじめ銀の器から何やら装身具のような物を掬い出していた朦朧とした幻影が楽士にさあっと近寄り、「お礼申すぞ、謝儀も遣わす」と言いざま、纏わりついて、その装身具を勲章みたいに男の胸に押しつけた。それから一切がぱつと消えてしまい、楽士はふらふらよろよろ家路を辿ったが、胸が痛いし、息も切なかった。そして着物を脱ぎ捨ててみると、仲間の楽士の瘤が前の胸に、もともとは後ろの背中に付いたままで、二つの瘤を生涯持つていなければならなかった。

### 一三〇 翔び行くオランダ人

リンブルク〔⑧リンブルフ〕地方に古い城があり、その名を鷹フアルケンベルクの山という。ここには物の怪けが出て、徘徊する。だれやらの声が四壁に響く告発の叫びを挙げるのだ。「人殺し、人殺し」と。——二つの小さな焰ほのおがゆらゆらと声の露払いをするが、叫んでいる者の姿は見えない。こうしたことは六百年来続いている。その遙か昔、城がまだ繁栄していた時、そこにはファルケンベルクの殿たちである二人の兄弟が住んでいた。その名はヴァレラームとレギナルトで、兩人ともクレーフエ伯爵⑨の麗しい息女アリクスに恋をした。幸運だったのはヴァレラームで、乙女が選んだのはこちらだった。かくしてヴァレラームは彼女と華燭かしよくの典を挙げたのである。一方拒まれたレギナルトの胸裡きょうりで愛が復讐ふくしゅうの憎しみに一変、ためにレギナルトは新床にいどこに臥せっていた相愛の夫婦を殺した。断末魔の苦しみの中でヴァレラームは兄弟の凶器に掴み掛かり、血塗れの手で相手の顔を打ち、次いでくずおれて死んだ。殺人者

は刺し殺した花嫁の頭から短刀で一房の巻き毛を切り取り、逃れ去り、二度と見つからなかった。人人は死者たちを發見、哀悼し、下手人がだれかを推察した。当時鷹の山城からさして遠からぬところに一人の敬虔な隠者が住んでおり、その庵室は小さな礼拝堂の傍らにあった。真夜中頃この庵室の扉をほとほと叩く音がして、神の名にかけて中へ入れて欲しい、と乞うのだった。これなん、罪の呵責に耐えかねたレギナルトで、その顔には血塗れの手の痕——この犯証は洗っても落とせなかつた——がまざまざと見て取れた。レギナルトが隠者に重大な罪業を懺悔すると、隠者は、一緒に来るように、と言い、彼を礼拝堂に連れて行き、祭壇の前にもろともに跪いて、夜を徹して祈った。翌朝、隠者はファルケンベルク伯レギナルトにこう命じた。「贖罪の巡礼として北へ北へとひたすら行かれよ。足の下に大地の無くなるところに辿り着いたら、神がそなたに何か御徴を表されるであろう。そなたは更にこの御徴に従うのじゃ」と。そこでレギナルトはただ「しかあれかし」とだけ答え、祭壇の常明燈でアリクスの巻き毛を燃やし、そこを立ち去り、北へ北へとひたすら歩き、贖罪と祈禱に身を捧げた。二つの姿が彼と行をともし、白い姿が右側、黒い姿が左側だった。右手を歩む者は贖罪と祈禱をするレギナルトを力づけたが、左手を歩む者は、そんなことは止めてしまえ、世俗の悦楽に生きるがよい、と囁くのだった。このように二つの姿は彼の魂を巡って闘ったが、レギナルトが心の裡に感じ、ともに闘ったこの闘いこそが、取りも直さず彼の贖罪なのだ。こうして何日も何日も、何週も何週も、何箇月も何箇月も歩き続けたあげく、とうとう海の畔に出た。もはや目前に足を置くことのできる大地は無かった。すると一艘の小舟が近づいて来た。中に一人が乗っていたが、これがレギナルトを手招きして、「我ラ汝ヲ待テリ」と言った。これが御徴だったので、レギナルトはその小舟に乗り込み、二つの姿も続いた。と、小舟の男は櫂で岸から舟を突き離し、沖の巨船へと漕いで行った。三人が甲板に上がると、男は小舟もろとも消え失せ、巨船は海原を帆走し始めた。レギナルトは甲板の下に降りてみたが、



ひとけ  
 人気がなく、乗組員は一切いかなかった。卓子ディブルが一つと椅子いすが数脚あり、三人はそこに坐った。すると黒い姿は骨製の  
 骰子さいころを三つ卓上に置いて、こう言った。「さあ、おまえの魂を賭けて最後の審判の日まで骰子遊びをしようではな  
 いか」と。

彼ら三人は今日なおそれを続けている。權も舵かじも無いまま船は北の大洋を航行、夜ともなると檣マストに焰はのちが幾つも  
 幾つも揺らめき、帆桁はげたの上で踊る。張られた帆は土気色で、掲げる旗はいずれも墓に供えられた花束の朽ちた布紐  
 のように色褪あせている。甲板には人っ子一人おらず、舵の許もとには操舵手さうたしゅがいない。この船の帆走ひしよぶりは飛翔、こ  
 れとの遭遇そうごうは不祥ふしょう。これに出くわした船には災厄が待っている。この船を目撃した船乗りは少なくとも、いずれも  
 身の毛のよだつ思いをした。この船は風の時なまですら滑らかな海面うなもを矢のように翔とんで行く。そこで船乗りたちはこ  
 れを「翔デア・フリースンデ・ホレндаーび行くオランダ人」と呼んでいる。

### 一三一 スバなる聖レマクルスの足跡

泉源豊かなスバ(88)——かしこでは百以上の源泉から温泉が湧出している——にフルースベーク(89)という源泉がある。  
 これは若返りの泉にして子授けの泉である。卓効があり、強壯にしてくれる。その近くの地面に足跡が一つ深く付  
 けられている。リエージュ(90)「リユツティヒ、ライク」地方に住んでいた聖者レマクルス(91)がこの泉に来て、ここで  
 礼拝を行った。けれども聖者は疲れ切っていたのか、それともあまりにも祈禱りたうに没頭し過ぎたせいかわ、祈りを捧げ  
 ながら寝入ってしまったのである。神様はこれにいくらか気を悪くなさり、聖者の片足を地中深くに沈み込むよう  
 計らわれた。かくして決して埋め戻すことのできない徴しるしが残った。聖者レマクルスは自分がしでかしたことを深

く後悔し、自らにこの上もなく厳しい贖罪を科した。これを見そなわした神は善哉と思し召し、その足跡に奇蹟を起す力をお授けになった。子宝に恵まれず、子どもが欲しい、と願う女性は、スパなる聖者レマクルスの教会で九日間祈りを捧げ、この間毎日フルースベークの泉で、片足を聖者レマクルスの足跡に置きながら鉱泉水を一杯飲む。こうした信心が功を奏したご婦人がたは数多い。

### 一三二 眠れる子どもたち

リエージュ（「リユツテイヒ、ライク」地方の町ストックムに哀れな女——子どもを三人抱えた寡婦——が食うや食わずの暮らしをしていた。なにぶん諸式の高い時代だったので。そこで女は物乞いをして回らなければならなかったが、頼もうが祈ろうが何ももらえなかった。女は悲嘆にくれて三人の小さな子たちの許に帰って来て、こう言った。「あたしら貧乏人は悲しいなあ。世間の衆は情が剛いつたらないし、神様は耳を塞いでおいでだ。あたしら、一緒に死のう。それがあたしら四人にはなによりなのさ。そうすりやもうひもじい思いをせずに済む」。子どもたちはこの言葉を聞いて、しくしく泣き始め、一人がこう言った。「ああ、母ちゃん、母ちゃんは自分とあたいたちを殺しやしないよね——（なにしろ婆さんは鋭い小刀を手にしていたのだ）。それよか秋まで眠らせてくれた方がいい。秋になればまた穀物も果物も実るし、またあたいたち、母ちゃんとみんなで落ち穂拾いをしましょ。そうすりや生きてける」。母親の手から小刀が落ちた。子どもたちは三人とも目を閉じて寝入り、その冬から春、夏とぶっ続けにくうくう眠って通し、一度も目を覚まさなかった。リエージュからもブラバントからもたくさんの人がやって来て、眠り続けている子どもたちを見てびっくり仰天した。そしてだれもが哀れな女にながしか喜捨

したので、貧乏だった女はお蔭かげでとても裕福になった。八月が到来、穀物刈り入れ人の大鎌おちかまが畑でざくざく音を立てるようになる、子どもたちは同時に目を覚ました。本当にまあたつぷり眠ったものだ。そこで彼らは母親とともに神と優しい救世主を誉め讃えた。それからというもの二度と再び辛い暮らしに苦しむことはなくなった。<sup>(四)</sup>

### 一三三 駿馬しゅんばバイヤールとバイヤールの城館やかた

かのハイモンの四人の子ら(四)がとりわけ乗り回したのは巨大で途方もなく強い馬で、その名はバイヤール(四)。この駒こまに関わる事柄かかが今日なおりエージュ(四)（「リリュツテイヒ、ライク」）地方とその周辺一帯おびたに夥おびたしく伝えられている。リエージュの町の近くに巖いわが一つあり、その剥むき出しの滑らかな部分に馬の蹄ひづめの痕あとが刻きまれている。これはバイヤールが付けたものである。カール皇帝の命に応じ、ハイモンの四人の子らから償つくないとしてこの馬が差し出されると、苛烈かれつな皇帝は、馬をあらかじめ綱で縛り上げ、パリの橋からセーヌ河に投げ落とさせた。しかし駿馬は自力で縛いめを断ち切り、再び水中から浮かび上がって主人の許もとに(四)駈かけ寄ると、その手を舐なめた。そこで皇帝は幾つもの石を馬に背負おわせ、またしても流れに突き落とした。すると馬はこのたびも河から出て来て、石塊を振り落とし、主人の許もとに駈かけ寄って、佇たんだ。けれども皇帝のこの駒こまに対する怒りは際限も無く、頸くびとそれぞれの脚に石の碾ひき臼うすを付け、またまた投げ込め、と命じた。利巧な馬バイヤールはこの酷むごい言葉を聞くなり、びっくりして一目散に逃げ出した。——すると皇帝は、馬の主人で、この馬が子どものように従順に仕え従うドルドーニユのラインホルト、すなわち、ハイモンの末子にして最も剛勇な息子に、行って、馬を捉とらえよ、と命じた。そこでラインホルトが——石を背負おわされた時の愛馬よりも重い心痛を抱えながら——行って、バイヤールを捉とらえ、連れ戻すと、この

忠義な駒は、二度と再び河から逃れられないよう重石おもしを付けられ、これで三度目だが、水に突き落とされた。馬は一度だけ首を高く上げて自分の主人のラインホルトを見やり、次いで沈んだ。ラインホルトは騎士の武器装束しよぎぞくを悉くことごとくかなぐり捨て、贖罪者しよびざいしやとして巡礼の旅に立出、聖なる都市ケルンに到着すると、大聖堂建立の石工の一員となり、僅かな賃銭で働いた。やがて、彼を妬ねたんだ仲間たちが高みから投げ落とした石の一撃で死ぬまで。

さて、駿馬バイヤールは忘れ去られることはなかった。その名は繰り返して諷えられた。それどころか、こんな伝説も語られている。それでもバイヤールは遠く離れたところで再び河から逃れ出し、アルデンヌ高地(註)に隠れ潜んだのであって、今なお時時その姿が見られる、というのだ。ディナン近郊(註)に夥おびただしく鱗ひびが入った巖があるが、これはバイヤール巖と呼ばれている。シャルルロワに程近いクイエ村の上手にもバイヤールの蹄痕ていこんがある。ハイモンの四人の子らはこの駒の榮譽を讃えてある城館をバイヤールと命名した。この城館はナムュール伯爵領のデュイ(註)にあり、ハイモンの子息たちはしばしばここに住んだ。同じくリエージュ州(註)のライノルトシュタインの城館でも暮らしたが、リエージュ州にはこの城館の近くにかつてブルスユールの城館(註)があった。ここはハイモンの四人の子らの従兄で強大かつ狡猾な魔法使いマラギスの住まいだった。ハイモンの四人の子らはアンブレームの城館——ここは今日なお彼らの名にちなんで呼ばれている——やエツガーヴァルトにも住んだ。また、ベルギーにベルテムなる村があるが、ここは駿馬バイヤールを紋章としていた。同地には、この駒用だった、といわれる巨大な秣桶まぐさおけが、そしてベルテムの近く、メールデルの森にやはりバイヤールの蹄痕があった。ドルドーニュのラインホルトが兄たちに別れを告げた時、長兄のアーデルアルト(註)も世を捨て、ベルテムの領主権をコルヴェイ修道院(註)に寄贈し、修道士として同院に入り、やはりそこでやがて浄福の死を迎えた。ベルテムの教会の中央祭壇上部にはかつて一枚の絵が掛かっていた。これにはアーデルアルトとその弟たちが駿馬バイヤールとともに十字架の前に跪ひざまずいている図が描かれていた。

## 一三四 ルーヴェンの死者たち

ルーヴェン<sup>(28)</sup>に一人の墓掘り人がいた。墓穴の用意をしなければならなかったが、どうも体の具合が悪かったし、ことに万聖節<sup>(29)</sup>の宵（万霊節<sup>(30)</sup>の前の晩）で、もうかなり寒かった。で、墓掘り人が嘆くと、名付けの父<sup>(31)</sup>が、代わりに墓を掘ってやろう、と言ってくれた。もつとも、これはその夜の内に済ませてしまわなくてはならなかった。男は真夜中前に仕事を終え、教会墓地を立ち去ろうとした。するとあらゆる墓を越えて何やら葬列のごときものがこちらへ練って来るのが見えた。白衣の修道士たちのようで、めいめい蠟燭<sup>(32)</sup>を一本携えており、名付けの父——稼業は楽士<sup>(33)</sup>だった——のところまで来ると、皆持っている蠟燭をその前に落とした。最後尾の修道士は大きな玉を投げ落とした。これには燈芯<sup>(34)</sup>を挿す穴が二つ開いていた。——「おんや」と物怖じしない楽士は考えた。「こりやまた綺麗に白く晒した蜜蠟<sup>(35)</sup>だて。わしの骨折りにやあけっこうな労賃<sup>(36)</sup>だわい」。そこでこれもこれも注意深く集め、手巾<sup>(37)</sup>に包んで結ぶと、家へ持って帰って、寝台の下に隠し、その夜は安心してきって熟睡した。

ところが翌日、楽士は床に就くのがいつもより早かったのに、眠れずにいて、真夜中近くになってもまだ目を覚ましていた。すると、なんと、寝室の扉がぱつと開き、例の白衣の修道士たちが全員中に入って来たのだ。そして楽士とその女房<sup>(38)</sup>が臥せている寝台の周りにずらつと並び、屈<sup>(39)</sup>んで寝台の下を覗き、楽士が蠟燭だと思い込んでいる物が入った手巾<sup>(40)</sup>を引っ張り出した。屈んだ時に修道士たちの体から白い頭巾や外套<sup>(41)</sup>がはらはら落ちた。すると全部が全部おぞましい骸骨ばかりで、あたしの腕の骨を、おれの足の骨を、あたしの腰骨を、おれの肋骨<sup>(42)</sup>を、あたしの肋骨をよう、と叫び出した。「おれの頭蓋骨をよこせ」と叫んだ最後の骸骨には事実頭が無かったし、他の骸骨どもにはいずれも叫び求めている骨が欠けていた。これらの骨は楽士が蜜蠟の蠟燭やら蜜蠟の玉やらと勘違いし

て手巾ハンカチに包み、家へ持ち帰った物だった。さて、一同はいずれも、骨と皮ばかりの腕をかたかた突き出し、取られた自分の骨を攔つかんだし、頭をなくした骸骨は背を屈めたので、楽士はその頭蓋骨を胴お体に載のつけて、ちゃんと据えてやらねばならなかった。それが済むと、この骸骨、楽士の提琴ヴァイオリンに腕を差し伸べ、それを楽士の両手に押し込み、演奏しろ、と合図した。で、骸骨連はお互い同士骨と皮ばかりの指を絡め、曲に合わせてかたかた踊り始めた。楽士も女房ともども「怖こくて堪たまらず歯を」かたかたかたかた。骸骨どもは急調子で部屋中輪舞し、これぞまさしくなんとも凄すごい死人しびとの踊りで、いつまでもいつまでも続いた。楽士がくたびれて演奏を止めると、そのつど、骸骨のどれかがその顔に痛烈な平手打ちを喰くらわせるのだった。やっとのことで一番鶏どりが啼なくと、骸骨たちはまた外套マントに身を包み、さっと姿を消した。

楽士とその女房はこの奇怪な事件を体験してからぶつとりと物を言わなくなった。もつとも、告解こくかいの折まげに自分たちが見たことを語りはしたが。そしてその後間もなく相次いで世を去った。

ルーヴェンのある信心深い桶屋おけやの身に起こったことはこの楽士に較べありがたい話だった。この男は聖カタンセントカタン教会の墓地の傍そばに住すんでいたのです、この教会墓地を毎晩通るたびに死者たちの冥福を祈いのちて数珠ロザリキを繰くりながら天使祝詞アヴェ・マリアを一回か二回唱えるのが常だった。ある時、注文品を引き渡したので纏まとまった額の金を受け取り、これに身に着けて、いつもの習慣通り死者たちの冥福のために祈りながら、教会墓地を抜けようとした。ところが近隣のごろつきどもが数人、桶屋が金を受け取ることを嗅かぎつけ、身に着けているだろう、と考え、待ち伏せしたもの。そして桶屋が教会墓地をやつて来ると、襲い掛かって、押し倒そうとした。しかし、その途端、辺り一面ざわざわ、ぶつぶつ、かたかた、ごことごとくという音が騒然と起こり、かねて桶屋がしげしげ冥福を祈いのちてやつた死者たちが恐ころく墓はかの中から立ち上がり、腕の骨や足の骨を振りかざし、強盗どもに激しく打ち掛かかったので、こやつらは恐

慌をきたし、あるいはぶつ倒れ、あるいは蒼惶として遁走した。かくして信心深い桶屋の親方は解放され、救われた。親方はそれからというもの前にも増して熱心に死者たちの冥福のために祈りを捧げたのだった。さて市参事会はこの顛末を一枚の板に描かせ、これを教会の外壁に吊させた。これは同所に今も見ることができる。

こうした伝承は、僅かな差異こそあれ、トリアリナーなる騎士のこととしてドイツでも語られている。この騎士は、夜毎教会墓地を馬で通り抜けるたび、死者の鎮魂のため必ず祈った。しかし、ある晩、ぴったり背後に迫った一隊の凶猛な敵に追われて、己が砦を目指し疾駆しながら、ここを通り掛かった。すると、なんと、死人たちがわらわらと墓から現れ、逃げる者と追跡者らとの間に立ちはだかった。月明の下で髑髏や骸骨が道を遮るのを目の当たりにした追っ手は愕然として跳びすさった。かくして騎士は要害堅固な自城に無事に辿り着いたのである。

### 訳注

- (1) ディアーナ Diana. ローマ神話の狩猟の女神。月の女神とも。処女神。ギリシア神話のアルテミスと同一視される。
- (2) コンスタンティヌス大帝 Kaiser Konstantin der Große. 分割統治されていたローマ帝国を再統一し、三三四年唯一の皇帝となり、ボスフォルス海峡に臨む交易都市ビュザンティオンを「新ローマ」と名付けて帝国の新首都——これが後のコンスタンティノポリス（現イスタンブール）に発展する——と定めたコンスタンティヌス一世（二七二—三三七）。帝国を再統一し、専制君主制の下、国力を恢復かつ繁栄させたことから「大帝」と呼ばれる。
- (3) フラウィア・ヘレナ Flavia Helena. 大帝の妻ではなく、母（二五〇頃—三二九）。DSB八八注参照。
- (4) 聖マクシミンの遺骸を den Leichnam Sankt Maximins. もとより聖遺物としてである。マクシミン、あるいはマクシミアスはコンスタンティヌス大帝の息子たちの統治時代トリアーの司教。
- (5) コンスタンティヌス大帝が、かの名高いI・H・S・C・H Hoc Signo ——これすなわち vines（「が統<sup>ぎ</sup>」）、「この徴<sup>しるし</sup>において汝勝<sup>なむ</sup>利せん」となる——なる文字とともに十字架が天に現れるのを見た dem Kaiser Konstantin dem Großen das Kreuzzeichen am Himmel erschien mit dem berühten I. H. S. In Hoc Signo —— schiæet vines, in diesem Zeichen wirst du siegen. 四分割統治時代の

- ローマ帝国で並立する皇帝の一人だったコンスタンティヌスは、ローマに君臨して皇帝を僭称していたマクセンティウスを、三二二年十月二十八日、ローマ北方ミルウィウス橋の戦いで撃破し、ローマに入城、自らが帝国西方の正帝となり、後の帝国統一への道を進み出した。この戦いの折、コンスタンティヌスは空に十字架（あるいは X・P・P・I キリストのギリシア語綴り *Xp̄ist̄os*）の最初の二文字）と「汝これにて勝利せよ」 *En touto vika* なる文字を目にした、という。あるいは、戦闘前後の夢で、X・P・Pの組合せ文字（「ラバルム」 *Labarum*）を見ることもに、「この徴において汝勝利せん」 *In hoc signo vinces* なる声を耳にした、とも。この頭文字は昔の書法でイエーヌス（*Ihesus*）の御名を意味する *welche Buchstaben nach alter Schreibung den Namen Ihesus bedeuten*。イエス・キリストの組合せ文字 IHS はギリシア語 *ΙΗΣΟΥΣ* (*IESOUS*) の最初の二文字と最後の二文字である。Jesus を Ihesus と綴っているベヒシュタインはギリシア語の Η をラテン語・ドイツ語の H と思い違っていたのか。もっとも、この綴りは確かに中世の文献にある。
- (6) その名に因む信条 *das nach ihm benannte Glaubensbekenntnis*。アタナシウス信条。三位一体論。
- (7) キリスト教徒のいわゆるテーベ軍団 *die christliche sogenannte Thebanische Legion*。上エジプト地方（かつて古代エジプトの王都テーベがあったので、「テーベ地方」とも呼ばれた）出身の兵で編成されたこのローマ軍団（その数六六〇〇だったとか。ただしギボン著『ローマ帝国衰亡史』 *Edward Gibbon: The History of the Decline and Fall of the Roman Empire* (1776-88) によれば、ローマ帝国最盛期の正規一個ローマ軍団は、ローマ人である歩兵六一〇〇名、騎兵七二六騎で編成され、これに非ローマ人の補助隊が割り当てられ、総計約一二五〇〇人に達していた、と算定される由）は専らキリスト教徒だったが、ローマ帝国四分割統治時代の皇帝の一人（最初はディオクレティアヌスとの共同統治。帝国西方の正帝）マクシミアヌス（在位二八六—三〇五／復位三〇六／復位三一〇。添え名ヘラクレス）によって、アフリカからアルプス以北に送られ、ガリアの地のある叛乱を鎮圧しよう命じられた。会戦に先立ち公に生贄を捧げる儀式を行うのがローマ兵にあつては通例だったが、テーベ軍団はこの異教の祭祀を拒否して処刑された、とのこと（もっとも異説まちまちである）。全員が殺されたとは信じ難いものの、軍団の三人の指揮官マウリティウス、エクスペリウス、カンティウスが夥しい仲間とともに殉教したこと、および、軍団が二回に亘って十人に一人の死刑（一個ローマ軍団全体を処罰する場合の方法）を執行されたことは歴史的に証明され得るようだ。
- (9) 執政官 *コンスル* *Palma Teius* *Consul Palmatus*。「執政官」は共和政ローマの最高官職だが、官職名としては帝政ローマでも残り、廃止されたのは六世紀半ば。
- (10) プファルツ *Pfalz*。現在トリーアの行政区画の一つ。
- プファルツ *kleine Pfalz*。「プファルツ」とは中世の宮中伯の居城。



- (12) プラバント Brabant ヘルギーとオランダにまたがる地方。かつてはプラバント公国。  
悲しや悲し Schmerzlich 直訳「悲しみ多き」。KHM三一「手無一娘」Das Mädchen ohne Hände の女主人公がある王との間に儲けた男の子の名もこの語である。
- (14) かくしてゴローは生きながら四つに裂かれたのである。So ward Golo lebendigen Leibes in vier Theile zerrissen. 古代のアレマン人は裏切り者に対する刑である四つ裂きの刑 Viertheilen を斧で執行した。より知られているのは、両手、両足をそれぞれ一頭(場合により複数)の馬に繋ぎ、四頭の馬を同時に四方へ駆り立て、文字通り四つ裂きにするものである。フランス王アンリ三世の暗殺者ジャック・クレマンは一五八九年犯行に及んだ当日の内にこのようにして処刑された。
- (15) マイエン Mayen. ライン左岸奥、ドイツおよびベルギー東部に広がるアイフェル山地への門ともいうべき位置にある都市。ローマ時代既に地域の経済的中心だった。
- (16) ドイツの古い押韻格言 たゞせば「マイン河畔のクリンゲンベルク、ライン河畔のバハラッハ、ヴェイルツブルク(=ヴェルツブルク)のシュタインにヤ、三大美酒生い育つ」Zu Kingenberg am Main, zu Bacharach am Rhein, und zu Wirzburg an dem Stein, wachsen die drei besten Wein. "なまの類もなまへ"。
- (17) バハラッハ Bacharach. ライン左岸の町。かつてワイン取引における樽の積替え拠点として栄えた。現在もこのワインは有名。ただし、古名「バックラクス」Baccaracus はケルト起源と思われ、「バッコス」とは関係無さそうである。
- (18) バッコス Bacchus. キリシマ神話のワインの神ディオニュソスの夥しい異名の一つだが、ローマ神話でも用いられる。ラテン語読みでは「バックス」。
- (19) 「ばっくす」祭壇 Baccih ara. ラテン語。  
親石 Elterstein. 親の石。
- (20) プファルツグラーフェンシュタイン城 Burg Pfalzgrafenstein. 宮中伯、バイエルン公、ドイッ王(一三二八年以降神聖ローマ皇帝)で、バイエルン人と添え名されたルートヴィヒ Ludwig der Bayer (四世。二二八―終/八二初―一三四七)は、一三二六年から二七年に掛けて、カウプの前にある巖礁ファルケンアウエ(ライン右岸から一一〇メートル、左岸から一六〇メートル)に高い塔を建設した。これは居住のためではなく、ライン河を上下する船舶から通行税を徴収するのが目的だった。後にこの周囲に重厚な外郭が設けられた。このさながら石の船のような建築物は類を見ないので、現在もラインの河中に一幅の絵のような姿を見せている。
- (22) カウプ Kaub. マインツとコーブレンツの丁度中間のライン右岸にある小さな町(現在の住民は九〇〇に満たない)。町の前面にあ

- るプファルツグラーフェンシュタイン城のお蔭で有名。なお、現在、町の盾形紋章を作る四分割の区画クワールテイルには葡萄の文様こそあれ、樽に入った聖者の図など無い。
- (24)(23) 聖者テオネスト *der heilige Theonest*. 四世紀の生まれ。五世紀現フランスのポワチエに死す。五世紀前半マイニツの司教だった由。麗しの山なる城 *Schloß Schönberg*. ライン中流左岸の町オーバーヴェーゼル・アム・ラインのシェーンベルクの頂きには十二世紀前半に建てられたシェーンベルク城 *Burg Schönberg* が今も健在である。
- (25) 七人乙女 *sieben Jungfern*. 「七人乙女」*Sieben Jungfrauen* と呼ばれる大小の巖礁は今もオーバーヴェーゼルが面するラインの河中にある。
- (26) 油断のならぬルーラーイ、あるいはローレライ *die gefährliche Lurlei oder Lorelei*. 大部な「ドイツ民間信仰事典」*Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens*. 10 Bde. Walter de Gruyter. Berlin, New York, 1987. にも、「ルーラーイ巖の乙女」*Jungfrau von Lurlei* として一言触れられているだけの存在。ライン河のこだけだけに限定された女の水の精だからか。河幅が急に狭まり、急に屈曲部に差し掛かる上、かつては暗礁があつて舟航の難所だったので、発生した伝説である。「ローレ」*Lore* は「妖精」*Elf*、「ライエ」*Lae*、「ライ」*La* はライン地方および低地ドイツの方言で「巖」「石」の意。この「妖精巖」は「三三三メートルの高さがあり、かつての難所を見下ろしている」。
- (27) 水の精 *Undine*. 四大(四大元素)の一つである水の精霊。なお、火の精はザラマンダー *Salamander* (風(大気)の精はジュールフェ *Sylphe*、地(土)の精はグノーム *Gnom* (ゲーテは『ファウスト』第一部でこれを「コーボルト」*Kobold*としている))。
- (28) 歌う妖女 *Sirene*. 上半身は女性、下半身は鳥の形をした海の怪物。ギリシア神話。「オデッセイア」にも登場。海峡などの岸から舟人に呼び掛け、楽しくも美しい歌声で彼らを惑わして引き寄せ、喰つてしまふ。
- (30)(29) アクイタニア *Aquitanien*. 現フランス北西部アキテーヌ地方。かつてのローマ帝国属州ガリア・アクイタニア。ラーン川 *Lahn*. 現ノルトライン＝ヴェストファーレン州、ヘッセン州、ラインラント＝プファルツ州を二四五・六キロに亘つて貫流してライン河に注ぐ川。
- (31) 聖ゴアール *St. Goar*. アクイタニアからライン地方へ来て、キリスト教の伝道に努めた。彼が放埒な生活を送っており、飲酒に耽つている云云、とトリーア司教に対し誹謗中傷する者があつたため、司教によってトリーアに召喚されたが、その途次、およびトリーアで奇蹟を現した、との伝説がある。五〇八年、現在のオーバーヴェーゼルの庵室で逝去し、この場所は彼に因んでザンクト・ゴアールと呼ばれるようになった。
- (32) ザンクト・ゴアール・アム・ライン *St. Goar am Rhein*. ライン中流左岸の町。現在オーバーヴェーゼルとともに連合自治体ザンク

- ト・ゴアール＝オーバーヴェーゼルを形成。町の上流にはカツエネルンボーゲン伯爵家が築いたラインフェルス城の廢墟がある。対岸には姉妹都市ザンクト・ゴアールスハウゼンがあり、ローレライの巖もすぐ近くで、ザンクト・ゴアールの対岸を少し廻った場所。
- (33) カツエネルンボーゲン伯爵家の一員 einem Grafen von Katzenelbogen. 「カツエネルンボーゲン」Katzenelbogen が正しい。ラテン語「カッティメリボクス」Cattimelhocus (カッティ族の山)の転訛。民間語源説で、「カッツェ」Katze (猫) + 「エルボーゲン」Ellbogen (肘) とつじけられるところがある——「ヒュタイン」も、ふざけ半分ではあろうが、これに荷担しているが、そうではない。古い伯爵家だが一四七九年絶えた。
- 我が父コソ／＼すすていくすナレ、／司教ナレ。 Pater meus / Rusticus / Episcopus! ラテン語。脚韻を踏んでいる。
- (34) イングェルハイム Ingelheim. DSB 五四注参照。
- (35) コーブレントツ Coblenz. 現在の綴りは Koblenz。現ラインラント＝プファルツ州の二千年の歴史を誇る古都。起源はローマ軍の要塞カストゥルム・ノド・コンフルエンテス Castrum ad confluentes (合流地点の要塞)の意)。モーゼル川とライン河の合流地点(両河川に突き出した都市の端は三角形をしているので「ドイツの三角」Deutsches Eck と呼ばれる)にある。
- (36) ファストラーダ Fastrada. カール大帝の四番目の妃(七六五—一九四)。カールの三番目の妃ヒルデガルトの死後、七八三年カールと結婚、二人の息女を儲ける。
- (37) 城塞シユテルンフェルスとリーベンシユタイン Burg Sternfels und Liebenstein. 現ラインラント＝プファルツ州の中部ライン河谷に位する町カンプーボルンホーフエン近郊のライン右岸に廢墟がある。シユテルンベルクとレーフェンシユタインとも。憎み合う兄弟の伝説で有名。
- (38) 神の難儀 Noth Gottes. DSB 七三参照。
- (39) ニーダーラインシユタイン Niederahnstein. 現ラインラント＝プファルツ州の都市ラインシユタインの一行行政区画。ライン川のライン河への合流点にある。
- (40) 梟目 Nachtewe. 梟目梟科梟属。夜禽。
- (41) 夜鷹 Nachtgespenst. 夜鷹目夜鷹科夜鷹属。夜禽。「夜鷹」Nachtschwalbe には Ziegenmelker (「山羊乳搾り」)夜、山羊の乳を吸う、とどう俗信から)とか Nachgespenst (「夜のお化け」)などの異名がある。
- (42) 悪魔蛆虫 Teufelslarve. べんな生物の幼虫なのか不明。識者の「教示を俟つ。「黒悪魔蛆虫」schwarze Teufelslarve は釣り餌として使われる由。なお、南西ドイツの諺肉祭の仮装の一つに有名な「悪魔仮面」があるが、これとは関係ない。
- (43)

- (44) ナーエ Nae. 現ラインラント＝プファルツ州を全長一六キロに亘って流れ、ライン河に注ぐ川。
- (45) 下ラーンガウ伯 ein Graf des untern Lahngaus. ラーンガウは「上」「下」とも中世初期フランケン公国に属した地域。
- (46) ハインリヒ 捕鳥王 Heinrich der Finkler. ザクセン公、東フランク王ハインリヒ一世。ザクセン朝初代ドイツ王（在位九一九―三六）。生来狩猟を好み、ドイツ王に選出された旨を伝える使者が来た時も、鳥を捕らえる罠を仕掛けていた、という故事から捕鳥王の添え名がある。神聖ローマ皇帝オットー一世の父。
- (47) ドイツ王コンラートの des deutschen Königs Konrad. フランケン公、東フランク王、ドイツ王（在位九一一―一八）。ザクセン公ハインリヒの父ではなく、むしろ宿敵だった。ただし、コンラートは王国の分裂を恐れ、死ぬ前にハインリヒを後継者に指名した。
- (48) ブライジヒ Briesch. 現ラインラント＝プファルツ州北部の保養地バート・ブライジヒ Bad Briesch のこと。ライン河畔にある。
- (49) アンデルナハ Andernach. 現ラインラント＝プファルツ州北部の都市。二千年の歴史を誇るドイツ最古の都市の一つ。ライン河畔にある。
- (50) オットー Otto. ザクセン朝第二代ドイツ王（在位九三六―六二）。初代神聖ローマ皇帝（在位九六二―七三）。オットー大王・大帝。なお「神聖ローマ帝国」Heiliges Römisches Reich なる名称は十三世紀から一般になったので、オットーの称号は「初代ローマ・ドイツ皇帝」der erste römisch-deutsche Kaiser がより正確ではあるが、通常「初代神聖ローマ皇帝」と唱えられる。
- (51) ペチエネグ Petscheneger. カスピ海北方の草原から黒海北方の草原で八―九世紀に掛けて形成された遊牧諸民族の部族同盟の名称。「義兄弟」の意。十世紀中キエフ・ルーシ（キエフ大公国）、ブルガール人の版図（第一次ブルガリア帝国）、ハンガリア王国、東ローマ帝国など周辺の諸勢力と抗争した。
- (52) アール川 Ahr. 現ノルトライン＝ヴェストファーレン州とラインラント＝プファルツ州を八五・一キロに亘って流れるラインの支流。アルテンアール村から下手のアール河谷は赤ワインの名産地である。
- (53) ノイエンアール城 Schloß Neuenahr. 現ラインラント＝プファルツ州北部下アール河谷にあるノイエンアール山上にその廃墟が残っている。一二二五年建設され、一二七二年破壊された。
- (54) アルテンアール城 Burg Altenahr. アール城 Burg Are. 現ラインラント＝プファルツ州アルテンアール村を見下ろす丘に廃墟がある。
- (55) コンラート・フォン・ホッシュェターデン Konrad von Hochstaden. フォン・アール＝ホッシュェターデン von Are-Hochstaden とも。ケルン大司教（在位一二三八―六二）。一二四〇年代半ばには神聖ローマ帝国諸侯の内最強で、大空位時代突入直前の一時期、神聖ローマ皇帝選出に大きな影響を及ぼしている。一二四八年彼の下でケルン大聖堂の建設が始められた。

- (56) ホッホシュターデン＝アーレ伯フリードリヒ Graf Friedrich von Hochstaden-Are. 「アーレ＝ホッホシュターデン伯フリードリヒ」 Friedrich Graf von Are-Hochstaden の誤。
- (57) シーベンゲベルグ Siebengebirge. シーベンゲベルグ Siebengebirge。ボンの南西、ライン右岸に広がる四〇以上の山と丘から成る山地。最高峰はエールベルク（標高四六〇メートル）。
- (58) セブツ城 Heptayrgos. キリシア語。東ローマ皇帝テオドシウス二世の時代に再建された、ギリシアの都市テッサロニキにある城塞の名称。ヘビュタインはこの名称を単に一般的意味で借用したに過ぎないようだ。
- (59) モン山 Mons Siebenus. ラテン語。Siberius と。
- (60) 浄罪火の燃え燃る場所 Fegefeuerstz. 煉獄。いずれ天国での救済に与えることは約束されているが、僅かな罪あるいは罪の償いが残っているため、これを浄化されねばならない靈魂の行く場所。カトリック教会の教義のみにあり、ルター他宗教改革の鼓吹者は、中世西欧で考え出されたこのような外界の存在を完全に否定しているが、いかに厳しかろうと、火による浄罪と救済への道が示されたことは、民衆にとって、永劫の墮地獄という恐怖を大いに緩和するものだったに違いない。
- (61) 山羊の仲間に入れられざるを得ない den Böcken zugesellen müsse. 最後の審判の折、全ての人人は、羊飼いが羊と山羊を分けるように、主の右手と左手に分けられる。そして左手の者たちは永遠の刑罰を受ける。新約聖書マタイ伝二十五章三十一節—四十六節。
- (62) 火男 Feuermann. DSB五七注参照。
- (63) 政務参事 Staatsminister. この訳語には自信がない。識者のご教示を俟つ。
- (64) キュンメルシユパルター Kümmelspater. 実際にはこうした姓はありえないだろう。「小事に拘泥するやつ」「こせこせしたやつ」くらいの意。
- (65) ちよつくら待つてくんなされや。おら、おめえ様の火でおらの煙管を点けてえた。——そうそ——あんがとさん warte he mant en biskten Ick will mir mant an ihm mine Pieve anzonden! — Su — hebbe jou Dank! この方言は多分このような意味だと思いが、識者のご教示を俟つ。
- (66) 生きてるときゃあおめえ様、なんちゅうても悪い人だったでの。ちつとはつか燃えてもこうつくぶりに差し障りがあるわけじゃねえん he is mant doch ein schlechter Kerel geweten! Dat biskten brennen schadt nich de Lust! この方言の後半の訳は自信がない。識者のご教示を俟つ。
- (67) 汎愛校 Philantropin. ドイツの教育家ヨーハン・ベルンハルト・バーゼドウ Johann Bernhard Basedow（一七二三—一七九〇）は人間愛を説く学派、デッサウ汎愛主義協会を設立。一七七四年バーゼドウが設けた教育機関「汎愛校」では彼が創始した教育学



- (75) 修練女として過ぐす一年 *Probjahr*. ヘネディクトゥスが定めた宗規によれば、修道志願者は修練院で修練士・修練女として年輩の修道士・修道女の監督を受けながら一年を過した。この間に三回宗規が朗読された。
- (76) 一箇月の猶予期間が過ぎるともう彼女に修道服を纏わせた *ieß sie schon nach eines Monates Frist als Nonne einkleiden*. 右の注で分かるように、修道志願者が修道誓願を果たし、修道士・修道女として得度する(修道服を纏う)まで一年掛かった。修道誓願を行った後は修道院を去ることは許されない(定住義務)。
- (77) ローラントの角 *Rolandseck*. 現ラインラント＝プファルツ州の都市レーマーゲンの行政区画の一つ。有名な夏の保養地。地区の背後に連なる葡萄酒山の頂きには城の廃墟がある。ここからの展望は素晴らしく、ジーベンゲビルゲおよび遠くボンに至るまでのライン河谷の景勝が楽しめる。直下にはライン河の島ノンネンヴェルトを臨む。カール大帝(＝シャルルマーニュ)の甥にして十二臣将の一人ローラント(＝ローラン)がここで死んだ、という伝承は近世起源。
- (78) フォルベルクを見下ろすリューデリヒ *Lüderich über Volberg*. 現ノルトライン＝ヴェストファーレン州の一地域ベルギッシュ・ラントにあるかつての非鉄金属鉱山。鉛、銅、亜鉛などを産した。ローマ時代から近代まで稼動。Volberg は現今 Volberg と綴る。
- (79) モルゲン *Morgen*. 昔の地積単位で約三〇アール(三〇〇〇平方メートル)。
- (80) 電の式典 *Hagelfeier*. カトリック教会において電と嵐に対する守護聖人である聖ヨハネと聖パウロの祝日である六月二十六日に行われる荘厳ミサ。
- (81) 柏 *Eiche*. 樺科の落葉樹。日本の柏(周囲約二メートル、高さ約八メートルに達する)、水槇などに似ているが遥かに大木となる。周囲が一〇メートル近くの木や、高さ二・三メートルに及ぶ木がある。いわゆる団栗の一つであるその果実(堅果)はかつて森に放牧された豚の群れの絶好の食餌となった。豚はこれをたっぷり食べて肥え、晩秋に処理されて冬季用備蓄食肉に加工された。全ヨーロッパに見られ、とりわけドイツではライン河下流域の中部ドイツ平原に極めて美しい柏の森がある。巷間伝えられるように樹齢二〇〇年にも及ぶものがあつたかどうかは疑わしいが、一〇〇年くらいか、と類推されるものがドイツに現存するほど長命であり、ずんぐりとした幹から太枝を周囲に伸ばした巨木は珍しくない。この木の森であれば、郷土殿の在世中はもちろん、その子孫孫十数世代に至るまでびくとせず存続したことであろう。
- (82) 而して「我らは」郷土シユレーエンボツシエのハル殿が最後の播種を行うことに何ら異論無く、かつは何ら腹藏無く、同意つかまつる。我らはかかることを確証せんと願ひしだいなり云々 *vrnde bewilligen ihmeme edeln junkherrn Hall vom Steehenbosche die letzte Vssaat sinder widerrede unde [「V」. vrnde 「n」] sinder alle geferde. deBez czo gezügen han wir erbeten etc.* 古文書

からの引用。

- (83) 「神の蒔きたまう種」„Saar von Gott gesät“: すなわち「人間」。新約聖書マルコ伝四章三一八節でイエスの語る譬え話参照——ただし、種蒔くものは「イエス」を指し、蒔かれた種は「その教え」である、とも解釈されうるが——。ポードレル『悪の華』 Charles Baudelaire: *Les Fleurs du mal* (1857) の「酒の魂」L'ame du Vin の最後のスタンザでは、「永遠の種蒔くひと」l'éternel Semeur として神 Dieu が示されてゐる。もともとこの詩の場合、その神が「投じた尊い種子である私」は人間ではなく、ワイン。ベルク Berg: 神聖ローマ帝国の領邦国家の一つ。中世にまず伯爵領として成立。一三八〇年公国に昇格し、一八〇六年まで存続した。現ノルトライン＝ヴェストファーレン州の一地域ベルギッシェス・ラントという名称はこれに由来する。
- (84) デューネ川 Dhüne. デュン Dhunn 川。ベルギッシェス・ラントに源を発し、ヴッパー川に注ぐ。
- (86)(85) ユーリヒとクレーフェの後に連なつて hinter Jülich und Cleve. ユーリヒもクレーフェもかつて存在した公国の名。一五二二年ヨハン三世を共通の君主として推戴するユーリヒ＝クレーフェ＝ベルク連合公国が誕生。これは現ノルトライン＝ヴェストファーレン州の大部分を占める巨大な同君連合公国だった。これが滅びてからも「ユーリヒ＝クレーフェ＝ベルク」は数多くのドイツ諸侯の称号の一部になっていたのである。
- (88)(87) ヴッパー川 Wupper. 現ノルトライン＝ヴェストファーレン州を一一六・五キロに亘つて流れ、ライン河に注ぐ。
- (88) コンポステラ Compostel. サンティアゴ・デ・コンポステラ Santiago de Compostela。イスパニア北西部ガリシア州にあるカトリック教の聖地。エルサレム、ローマと並んで古くからカトリック教徒に崇敬されている大巡礼地。エルサレムで斬首され、十二使徒中最後の殉教者となった聖ヤコブの遺骸が、石の舟に乗せられて近くまで辿り着き、ここに埋葬された、といわれる。
- (90)(89) 聖者ボンファキウス der heilige Bonifacius. ボニファティウス Bonifatius。DSB六一二注参照。
- モリモン Morimont. おぢらぐ。現フランスのシャンパーニュ＝アルデンヌ地域、オート・マルヌ県の小村バルノワ・アン・パツシニイにその廃墟があるシトー会派のモリモン修道院 Abbaye de Morimond である。なお聖者エギディウスの墓はここではなく、プロヴァンスのニームの近くにある。
- (91) コンラート・フォン・ホッホシュターデン Konrad von Hochstraden. DSB一〇二注参照。
- (92) シトー会 Zisterzienser. 一〇九八年フランス東部のシトーに、ベネディクト会派の修道士モレームのロペールが厳格な戒律、簡素な衣食、労働と学問を旨として創始した修道会。
- (93) 徹夜課 Vigil. ここでは文字通りの徹夜ではなく、未明から朝までの時課と思われる。
- (94) さて、蒔いた種の発芽と生育がはかばかするやう……「聖体が運ばれた折 Da man nun das Allerheiligste ..... trug unter Gesängen und



- (95) Litanien. 「竜の式典」を指す。DSB 一〇六注参照。  
 聖櫃 Heiligthum. 「聖体用祭壇」 ciborium のこと。「聖体用祭壇」とは通例貴金属で作った聖体容器 pyx (聖餅を入れて持ち運ぶびんぶろうにした器) を安置する小さな建築物(神殿や礼拝堂を模したものなど様様)。すなわち「聖体安置塔」。もともと「聖体容器」と訳されることもある。
- (96) 聖体顯示台 Monstranz. 中に聖体容器を安置した聖体用祭壇とは異なる。聖餅を入れたガラスや水晶で製した容器の周囲を銀製、金製、あるいは黄金鍍金の太陽のような光彩で飾ったもの。カトリック教会の儀式の折聖職者がこれを掲げて中の聖体(聖餅)が参列者に見えるよう顯示する台。DSB 七三にも出る。
- (97) ユーリヒ地方 Jüliches Land. DSB 一〇七注参照。
- (98) 妖精 Eib. 通常 Eif (ヘルム) と綴る。
- (99) 盤上遊戯をし spiele …… im Bret. 「盤上遊戯とは盤の上で駒や石を動かして遊ぶゲーム(「ブレットシュピール」Breitspiel)。チェス、チェッカー、西洋連珠、トリックトラック(双六の一種)など。中世ヨーロッパにおいて城塞内や宮中での暇潰しとして好まれた。
- (100) 豌豆 Erbsen. ここでは、成熟した豌豆を乾燥させたもの。中・近世ドイツでは穀物不足を補う食材としてありふれていた。足はみづともなかった die FüÙe waren ungestaltet. ドイツ語圏の小人族は不恰好な足をしている、と伝えられることが多い。
- (101) 「鷲鳥の蹠のよう」(DSB 一〇参照) と書いた具合に。
- (102) ベルンのデイトトリヒ Dietrich von Bern. 中世盛期および後期のドイツ語圏伝説における最も有名な登場人物の一人。英雄詩「ヒルデブランドの歌」Hildebrandslied や数数の英雄叙事詩など九世紀から十六世紀に掛けての諸文献に出る。口承は明らかに古い。「ニーベルンゲンの歌」Nibelungenlied でもある役割を果たしている。伝説におけるこの英雄の出身地「ベルン」は普通イタリアのヴェローナとされる。
- (103) ボン Bonn. ジーベンゲルゲの北東、ケルン南方約二〇キロに位置する都市。現ノルトライン＝ヴェストファーレン州に属し、ライン河中流にある。ドイツ最古の都市の一つ。紀元前二二年ローマ軍の要塞が建設され、数世紀間一個ローマ軍団が駐屯した。ローマ帝国の衰亡とともに古代後期、中世初期にボンは衰退。九—十世紀大聖堂が建てられ、宗教的中心地となって、繁栄を取り戻した。後世、ケルンの都市貴族(上流市民)との抗争に敗れ、一二八八—一七九四年の長きに亘り、選帝侯にしてケルン大司教はケルンを退去、ここに宮殿を構えた。
- (104) 巨人とも Riesen. 北欧神話ではオーディンを主神とするアサ神族と対立する——ただし、交流してもいる——存在で、力があるだ

- けではなく、しばしばその深い叡智も描写されている。後世のドイツ語圏民話では貶められて、力はあるが、邪で、さほど利口ではなく、人間である主人公の引き立て役に過ぎないことが少なくない（例外も多々ある）が、伝説ではまだ敬意をもって語られることが多い。たとえば、DSB三一参照。
- (105) エルバーフェルト Elberfeld。エルバーフェルトは一九二九年他の多くの町と合併してヴァッパータールとなるまで、ベルギッシェス・ラントでは大きな都市だった。
- (106) ケルン Köln。現ノルトライン＝ヴェストファーレン州に属し、ライン河中流にある。現在住民は百万を超え、ドイツ第四の大都市。三一三年司教座が、八世紀以降大司教座が置かれる。中世盛期には四万の人口を有し、ドイツ最大の都市になった。十二世紀になるとケルンには、エルサレム、コンスタンティノポリス、ローマと並んで、「聖なる」Sancta という添え名が付けられた。もともと、やがて勃興するケルン都市貴族と大司教の争いが頻発、最終的に大司教は、「二八八年ヴォルンゲンの戦いでベルク伯アードルフ五世とケルン市民の軍勢に敗れ、それ以降、ケルンはもはやケルン大司教領ではなくなり、大司教は宗教行事に携わる場合を除いて市に足を踏み入れることが許されなくなる。
- (107) マルクス・アグリッパ Marcus Agrippa。マルクス・ウイパサニウス・アグリッパ Marcus Vipsanius Agrippa (前六三—前一一)。古代ローマの軍人にして政治家。初代ローマ皇帝オクタウィアヌス・アウグストゥス Octavianus Augustus (前六三—後一四)の腹心で、後その娘ユリアの夫となる。
- (108) コローニア・アグリッピナ Colonia Agrippina。ゲルマニアの一部族ウビイが入植して紀元三九九年に創設したオッピドゥム・ウビオルム(「ウビイ族の町」の意)は、やがてローマ軍駐屯地となり、ゲルマニアにおけるローマ勢力の拠点であった。紀元五〇年皇帝クラウディウスの妃アグリッピナ(小アグリッピナ＝ユリア・アグリッピナ)は自らの生誕地であるこの町をローマの植民都市に格上げするよう強く希望。かくてこの町は「植民都市クラウディア・アラ・アグリッピネンシウム」または「植民都市アグリッピナ」と改称、更に後者の「アグリッピナ」が省略され、単に「コローニア」、次いで「ケルン」となった。長期に亘り帝国属州ゲルマニア・インフェリオル(下ゲルマニア)の総督府。四五五年フランク族に征服され、ローマ統治は終焉を告げる。
- (109) 東方の三賢人たち die drei Weisen des Morgenlandes。三人の賢者、三博士、三聖王。ドイツ語圏での名前はカスパー爾 Melchior、バルタザール Balthasar、マタイ伝二章に登場。特に十一—一節。幼子イエスに黄金と乳香と没薬を捧げた。ケルン大聖堂中央祭壇奥には、三賢人の頭蓋を納めている、という世界最大の黄金の櫃がある。
- (110) 聖、ゲレオン St. Gereon。テーベ軍団(DSB九一注参照)の殉教者。
- (111) 聖、ウルズラ St. Ursula。ブルターニュ王の姫君。一万一千(あるいは一万)の乙女を伴としてローマに巡礼に行き、帰途ケルン

- 市外でフン族に殺されて殉教した。
- (112) マカベア一統 Maccabäer. ユダヤの祭司の一族ハスモン家のユダ・マカベア（「マカバイ」はシリアのセレウコス朝の弾圧に抗して叛乱を指揮、遂にシリア軍に勝利——「マカベア（「マカバイ」戦争）（前167—前162）——した。ハスモン家は約百年独立ユダヤ王国を支配した。
- (113) ナインの寡婦の息子 der Sohn der Witwe zu Nain. ナインの町である寡婦の一人息子が死んだが、これをキリストが甦らせた。新約聖書ルカ伝七章十一—十五節。
- (114) あるローマ皇帝がケルンを攻囲して ein römischer Kaiser Köln belagerte. ローマの植民都市ケルンをローマ皇帝が攻囲した、とはもとより荒唐無稽な話。しかし、フランク族の主要支族サリ族が三五五年から十年にも亘って市を攻囲したことはある。この時ケルンは陥落しなかったが、四五五年最終的にフランク族に占有された。
- 聖霊降臨祭 Pfingsten. 復活祭後の第七日曜日。
- 薪採りの日 Holzfahrttag. テュッセルドルフなど他の都市でも同名の民俗祭礼の例がある。
- (116)(115) ギュルツェニヒ Guzenich. ケルン旧市街中心部にあるフェステイヴァル・ホール。ケルンの都市貴族の一つギュルツェニヒ家によって十五世紀半ばに造られた。当初から神聖ローマ皇帝など貴顕の迎賓やこの都市の祝祭の場として用いられた。第二次大戦中ほぼ完全に破壊されたが、一九五二—一九五五年再建された。
- (118) こういふ賭さね Wir wetten, daß…… この賭は奇妙である。悪魔が勝てば（事実勝つのだが）、悪魔は目的が達成できる。しかし、棟梁が勝つたところで、棟梁に何の利点があったろう。
- (119) 起重機 Krana. もとより木製だが、巨大で、土台、アーム、滑車、強靱な綱を複雑に組合せ、巨石を所定の位置へ運ぶことができた。動力は輓に繋がれた一連の牡牛たち。
- (120) かくして大聖堂の完成は不可能になった Nimmer konnte der Dom vollendet werden. ケルン大聖堂の着工は二二四八年。途中約三〇〇年の資金枯渇による中断があったが、それにしても建築終了は一八八〇年とまことに長丁場だった。ベヒシュタイン在位時（一八〇一—一六〇）には竣工していない。
- (121) 水路 Wasserleitung. アイフェル山地を水源とするケルンへの上水路は紀元八〇年頃ローマ帝国によって建設された。延長九五、四キロで、そのほとんどは地中の導管によったが、ケルン市外数キロの地点で高さ一〇メートルの水路橋となり、市中の流下式噴泉、公衆浴場、家庭内配管に上水が供給された。一日一〇〇〇〇立方メートルの水量だった由。二六〇年まで稼動していたが、ゲルマン人によるケルンの第一次略奪と破壊以降は機能しなくなった。ローマ帝国の最も長い上水路の一つで、アルプス以北最大の古代

構築物とされる。

- (122) 三聖王礼拝堂 die heilige Dreikönigskapelle. 「三聖王」についてはDSB一一二注参照。  
 (123) 悪魔石 Teufelsstein. D S 一九九「ケルンの悪魔石」 Teufelsstein zu Köln 参照。

(124) ダッセル伯にして大司教ライノルト二世 der Erzbischof Reinold II. ein Graf von Dassel. ケルン大司教(一一五九—六七)。しかしケルンにいたのはごく僅かな期間)にしてイタリア尚書長官(一一五九—六七)ライナルト・フォン・ダッセル Rinald von Dassel (一一一四—一一二〇—一一六七)。ダッセル伯爵家の出ではあるが、ダッセル伯ではない。フリードリヒ一世(フリードリヒ赤髭帝)の極めて近い相談役。彼がミラノからケルンへ「三聖王の遺骸」を移送したことによって巡礼が夥しくケルンへ来るようになった。お蔭で——ケルン市自体もなることながら——ケルン大聖堂は経済的に大いに潤ったことである。

(125) 恩寵の徴として豪雨が滝津瀬のちかく降り注いだ heftiger Regen niederströmte, zum Gradenzzeichen. ケルンの紋章の一つは三つの王冠(これは明らかに「三聖王」を指す)の下に十一の黒い雫(あるいは「涙」とも言われる。ケルン郊外でフン族に殺されて殉教した、という聖ウルズラとその伴をした二万一千の乙女を象徴するか)である。後者を、雨乞いの結果三聖王が降らせた雨、と附会したのがこの挿話。

(126) アルベルトゥス・マグヌス Arbertus Magnus. 「マグヌス」、すなわち、「大いなる人」と添え名され、ケルンのアルバートともいわれるこの学者は一九三一年列聖されてもいる。シュヴァーベン<sup>スウェーデン</sup>の貴族ボルシユタット家に生まれ(生誕が一二〇〇年以前であることは確か。一一九三年か、一一八〇年ケルンで逝去、聖アンドレアス教会に埋葬された。その卓越した学識のゆえに在位時既に「万に通じた博士」(ドクトル・ウニウエルサリス)と呼ばれた。その驚異的な知識は、神学と哲学(彼は傑出したアリストテレス学者だった)の他に、天文学、気象学、地質学、植物学、動物学、鉱物学、人類学、化学、物理学、力学、建築学にまで及んだ。ドミニコ会派修道士、レーゲンスブルク司教。

(127) ヴィルヘルム・フォン・ホラント Wilhelm von Holland. ホラント伯ウイレム二世(在位一二三四—五六)、ドイツ王(在位一二四七—一五六)。神聖ローマ帝国大空位時代突入直前、あるいは突入期における対立王の一人。

(128) 三聖王の日に an Tage der heil drei Könige. 三聖王の祝日は一月六日。冬の真つ最中である。

(129) 司教座聖堂参事会員 Domherr. Chorherr. Kanoniker. D S B 三四注参照。

(130) 垂れ布付き頭巾 Gügel. 襟首を覆う垂れ布の付いた頭巾。

(131) ハインリヒ獅子公 Herzog Heinrich der Löwe. ザクセン公(在位一一四二—一八〇)、バイエルン公(在位一一五六—一八〇)。最盛時にはドイツにおける最も強大な領邦君主だった。没年一一九五年。ドイツ王、神聖ローマ皇帝フリードリヒ一世(赤髭帝。公

- 爵の従兄）との抗争でほとんどの封土を没収される。晩年は従兄と和解し、周囲の封土をかなり削られたブラウンシュヴァイク公領の君主として死す。ライオンとの交わりについての伝承はDS五二六に詳しいが、こういう話もある。公爵が聖地へ巡礼した折、乗船が難破したため、アフリカ海岸に漂着した。曠野の洞窟に入ったところ、ライオンが一頭いたが、これは左後足に棘を刺していて、ひどく苦しんでいた。公爵が棘を抜いてやると、ライオンはこれを大いに恩に感じて、狩りの獲物を公爵に提供し、一人と一頭は仲良く暮らした。やがて公爵は魔物と契約して領国へ連れ戻してもらったが、飼い犬同然に懐いたライオンも一緒だった。公妃は、夫は死んだ、と思い、再婚しようとしていたが、公爵はその婚札寸前に帰着、ライオンとともに式典を流血の場に変えて阻止した。詳しくは、J・K・A・ムゼーウス著・鈴木満訳「メレクサーラ ドイツ人の民話」所収「メレクサーラ」(国書刊行会、平成十九年)参照。
- (132) サムソンの獅子との闘い Simsons Löwenkampf. ペリシテ人がイスラエルを支配していた時代、イスラエルに生まれたサムソンは大力の勇者だった。たまたま葡萄畑を歩いていると、若いライオンが吼え掛かって来た。サムソンは徒手空拳だったが、仔山羊を引き裂くようにライオンを引き裂いた。旧約聖書士師記十四章三十一節。
- (133) 獅子の洞窟に投げ込まれたダニエル Daniel in der Löwengrube. (新)バビロニア王国(カルデア王国)の捕囚(いわゆる「バビロン」の捕囚)とされたダニエルはその優れた資質のため大臣の一人にまで登用されていたが、同僚や部下はこれを妬み、陥れようとした。そのため獅子を入れた洞窟に投げ込まれることになった。しかし、何の危害も加えられなかった。そこで王のダレイオスは、ダニエルを陥れようとした者たちをここに投げ込ませた。旧約聖書ダニエル書六章一―二十五節。
- (134) 遺体は洗い清められた後何枚かの亜麻布に包んで納棺したようだ。 wickelte sich aus den Grabtüchern los. 中世ヨーロッパの都市住民の葬儀においては、
- (135) シュヴァインフルト Schweinfurt. バイエルンの都市。十二世紀から一八〇二年まで神聖ローマ帝国直屬都市。
- (136) デーレン(ケルンとアーヘンの間) Dören (zwischen Köln und Aachen). デューレン Düren のこと。ケルンとアーヘンの間のアイフェル山地の北縁にある。
- (137) アーノルトの集落 Arnoldsweller. 現ノルトライン＝ヴェストファーレン州の都市デューレンの行政区画として今なお名が残っている。紋章は堅琴を持って坐っている歌い手で、頭部には聖人を表す光輪が添えられている。
- (138) ガリア Gallia. 伝説の語り手は、ローマ時代の「ガリア」ではなく、後のフランス王国あたりを念頭においていたのであろう。
- (139) ルートヴィヒ Ludwig. 後のルートヴィヒ敬虔帝・王 Ludwig der Fromme [「ルイ敬虔帝・王 Louis le Pieux」]のこと。カール大帝の第三子。兄たちが早世したため、単独の相続者となった。フランク王国カロリング朝国王(在位八一四―一四〇)、西ローマ皇

- (140) 帝(在位八一四—四〇) ルートヴィヒ〔「ルイ」一世。ブルグント Burgund. 伝説の語り手は「ブルゴーニュ」と同一視しているのかも知れないが、フランク王国内における独立性を保った地域のブルグントは、現フランス南部を流れて地中海に注ぐロース川一帯を領土とした中世初期の古王国であって、十四世紀から十五世紀にかけてフランス東部からドイツ西部にかけて存在した強大なブルゴーニュ公国や、現フランス東部のブルゴーニュ地域とは別物である。
- (141) カール、あなたは口を開けるのが遅過ぎた。Karle, du hast zu spät aufgegnint. ぐずぐずしていつ何かをもらい損なった者が、こう言われる。aufgninenは aufgähnen(大口を開ける)。
- (142) アーヘン Aachen. ベルギー、フランスとの国境に近い現ノルトライン＝ヴェストファール州の大都市。都市名は古高ドイツ語の aha(鉱泉。ラテン語の「水」 aqua に相当)に由来する。八世紀末カール大帝が王宮を置いて以来、歴代のドイツ王、神聖ローマ皇帝がこの大聖堂で戴冠式を挙げた。フランス語「エクス・ラ・シャペル」 Aix-la-Chapelle(礼拝堂の鉱泉)ほどの意。
- (143) 朝鮮 菊科朝鮮薊属の多年草。若い蕾を食用とする。この蕾を指している。
- (144) アーヘンの悪魔 der Teufel von Aachen. 本伝説と同じ悪魔を扱っている D S 一八八は「アッハの悪魔」 Der Teufel von Ach なるタイトルだが、これは本来「アーヘンの悪魔」と同じ意味だったに違いない——D S の邦訳、桜沢正勝／鍛冶哲郎訳『グリムドイツ伝説集』(人文書院、一九八七)では「嘆きの悪魔」となっている——。前掲注アーヘンなる名称の由来参照。
- (145) 復讐計画を思いついた brüete einen Rachengedanken aus. アーヘン全市を砂で埋めてしまおう、というもの。
- (146) マース川 Maas. フランス北東部を源(フランス語「ムーズ」 Meuse)とし、ベルギーを貫流、オランダのマーストリフト付近でオランダに入り、やがて北海に注ぐ。九世紀頃からヴェストファリア条約(一六四八)までは神聖ローマ帝国の西の国境線だった。
- (147) ゴアース谷 Soerschal. かつてはアーヘン市の郊外にあり、現在アーヘン市域に属する牧歌的な美しい湿地帯ゴアースのこと。ここには幾つもの小川が流れ込み、この北端からアーヘン盆地唯一の排水路であるヴルム川が流れ出す。悪魔をみごとにたぶらかしてアーヘンを救った老婆は、ゴアースの農婦だったわけ。
- (148) 馬の脚で相手の正体が分かった erkannte ihm am Pferdefuß. ドイツ語圏の民間信仰における悪魔の姿を定義することは大層難しい。ごく大雑把に申さば、額に二本の角を持ち、尻尾が生えていて、蝙蝠のような翼があり、足の片方(左か右かも特定し難い)、あるいは双方が馬の脚のようである、といったところか。
- (149) ロース山 Loosberg. アーヘンの北方に聳える特異な形状の山ロウスベルク Lousberg。「ルスベルク」とも。標高二六四メートル。名の由来には諸説あるが、よく分からない。

- (150) 抜け目抜けの無い根性根性に因よんだ nach dem losen Sinn. アーヘン方言で「ロウス」lous は「抜け目が無い」「狡賢い」の意。
- (151) マーストリヒト Maastricht. 通常 Maastricht と綴る。アーヘンに近いオランダの河港都市（マース河畔）。オランダ語では「マーストリフト」。
- (152) チューリヒの「隠れ処」と名付けられた邸に住んでいた時 da er in Zürich im Hause „zum Loch“ genannt wohnte. 「ハウス・ツーム・ロッホ」Haus zum Loch は現存。かつてヴェッソン騎士の邸宅だった（1130—1150）。1111—118年までは歴代ツェーリングン公のチューリヒにおける館だったであろう。
- (153) 妃ファストラータ Gemahlin Fastrada. DSB 九六注参照。
- (154) 水の教会 Wasserkirche. 元来は、チューリヒ市街を貫流するリマート川右岸の小さな島に建っていたので、この名（「川の教会」とも邦訳できる）がある。現在は旧市街リマート河岸通り、大聖堂橋の東詰めに位置し、川に接しているのは一面のみ。
- (155) ブルガリアから aus Bulgarien. 「ハンガリアからブルガリアを通って」だろう、と思われる。いずれにせよ、ハンガリアの地からアーヘンに行く径路としては地理的になんとも奇妙である。
- (156) ラープ Rab. アドリア海北部のラプ（アルベ）島。現クローチア。ローマ帝政期初頭以降しばしば歴史に名が出る。
- (157) パッサウ Passau. 現バイエルン州東部、オーストリアとの国境にある都市。ドナウ、イン、イルツの三河川の合流点に位置するの
- (158) で「三河川の町」Dreiflüssestadt と呼ばれる。
- (158) 聖物保管係 Meßner. 通常 Mesner と綴る。ラテン語「家の番人」mansionarius から。新教（福音派）では Küster。聖堂世話係、教会管理人。建物の鍵類と聖物（聖体拝領やミサに用いる聖具など）の保管に当たる。後世は地位が低下して鐘撞きなども兼ねる教会の雑用係、すなわち過去の日本の「寺男」程度となる。しかしながら、昔のカトリック教会や修道院では通例しかるべき役僧（幹部）の一人。もともと、ここでの描写では下僕並みの寺男と思われるが。
- (159) テュルパン Turpin. フランスのランス大司教でシャルルマーニュ（「カール大帝」）の十二臣将十二臣将の一人ともいわれる。十二世紀にラテン語で記された、との触れ込みの「シャルルマーニュ年代記」Historia Caroli Magni の著者としても名が出る。これは後世の捏造。そこでの書は「偽テュルパン年代記」とも称される。
- (160) フランケン山 Frankenberg. 現在はアーヘンの一行政地区で、住宅地。「ブルク・フランケンベルク」「フランケンブルク」とも。かつてはアーヘンの市壁から遠く隔たっていた。また、昔ここにあった城は山上の館ではなく、周囲に濠を回らした城塞である水城だった。
- (161) アーヘンの自身の大聖堂に in seinem Münster zu Aachen. カール大帝（「シャルルマーニュ」）は七八六年居城礼拝堂

Prätkapelle「マリリア教会」の建立を始めさせ、八一四年逝去すると、この中に葬られた。竣工当時はアルプス以北で最大の大聖堂だったことを中心に後世大規模に増築されたものが今日のアーヘン大聖堂 Aachener Dom / Aachener Münster だ。皇帝大聖堂 Kaiserdom と称されるものの一つでもある。

(162) 従って長きに亘って続いた累代のドイツ皇帝にもつい先頃の近世に至るまでやはり変わらずこれが挙行されたのである welches auch also geschehen ist in langer Reihe deutscher Kaiser bis nahe heran an die neue Zeit. アーヘン大聖堂で戴冠式を挙げた最後の神聖ローマ皇帝はカール五世(一五二〇年十月二十三日)。皇帝在位は一五一九—一五六〇、戴冠式を挙げた最後のドイツ王はカール五世の弟で後継者であるフェルディナント一世(一五三二年一月十一日)。カール五世の皇帝在位中)。フェルディナントも神聖ローマ皇帝(在位一五五六—一五六四)になっているが、これは兄カール五世の神聖ローマ皇帝退位によるもので、戴冠式は挙げていない。皇帝は既に終焉を迎えてしまっている das Reich ein Ende genommen. ナポレオン率いるフランス帝国の侵攻により、ドイツ諸王侯・高位聖職者のいわば連合体であるにしても、既にほとんど有名無実だった神聖ローマ帝国は瓦解した。一八〇五年十二月二日のいわゆる「三帝会戦」(アウステルリッツの戦い)。ナポレオンは皇帝になって一年)でフランス軍に敗れた結果、一八〇六年初め、最後の神聖ローマ皇帝フランツ二世は自立的に退位、オーストリア皇帝(以前の呼称) フランツ(一世)となる。「ドイツ国民の神聖ローマ帝国」Heiliges Römisches Reich deutscher Nation(「神聖な」heiligが附されたのは十三世紀以降、「ドイツ国民の」deutscher Nation が附されたのは十五世紀以降)の終焉である。アーヘン大聖堂で戴冠した初代神聖ローマ皇帝オットー(一世)。

(163) 大帝。在位九六二—七三)——東フランク国王(在位九三六—六二)。ザクセン朝第二代)——以来八百有余年。その末期にはドイツ語圏の知識階級に、「神聖」でもなく、「ローマ」は国内になく、「帝国」というには皇帝の実権が及ぶ版図ははっきりせず、そして「ドイツ国民の」でもない、と揶揄され続けた形態ではあったが。

「安置」された ward er beigesetzt, beisetzen は「埋葬する」の意だが、「坐らせる」ともなる。

(165) (164) これはこの大君主の死後二日目にすぐ行われた Das geschah gleich am zweiten Tage nach dem Tode des großen Herrschers. 実際にはもっと早い。大帝は八一四年一月二十八日朝に死亡、夕方にはもう埋葬された。これは極めて奇妙なことだった。

(167) (166) ルートヴィヒ敬虔帝・王 Ludwig der Fromme. D S B 1—九注参照。

ザクセン朝の皇帝オットー三世 Kaiser Otto III. von Sachsenstamme. ザクセン朝第四代。短い生涯(九八〇—一〇〇二)。オットー大帝の孫。父ドイツ王・神聖ローマ皇帝オットー二世が二十八歳で急逝したため三歳でドイツ王に即位。母の摂政、母の死後は祖母の摂政で、幼年時代を乗り切る。ドイツ王(在位九八三—一〇〇二)、神聖ローマ皇帝(在位九九六—一〇〇二)。十四歳で親政を開始。西暦一〇〇〇年五月、彼がカール大帝の墓所を探させ、これを開かせたことは、随行したラウメル伯オットー Otto Graf



von Launel の記録にあるものな。

(168) ホーエンシュタウフェン家出身の皇帝フリードリヒ二世 Kaiser Friedrich II. von Hohenstaufen. 一一九四年イタリア中部の町イージで誕生。シチリア王（在位一一九八—一二五〇）、ドイツ王（在位一二一一—一二五〇）、神聖ローマ皇帝（在位一二〇一—一二五〇）、更に一二二九年成功裡に終了したいわゆる「無血十字軍」の後エルサレム王。中世ヨーロッパで最も進歩的君主とされる。しかしながら、彼がカール大帝の地下霊廟を探し当て遺骨を改葬した、というのは当たらない。遺骨を居城礼拝堂「マリヤ教会」の地下霊廟から一一六五年に引き揚げたのは神聖ローマ皇帝フリードリヒ一世（赤髭帝）。もともと、身廊型で象牙・金・銀・銅製の大きな櫃（現在「カールの櫃」Kaiserschrein と呼ばれている）をアーヘンの黄金細工師に注文して作らせ、一一一五年遺骨をこれに納めたのは確かに赤髭帝の孫フリードリヒ二世である。大帝の地下霊廟そのものは現在の研究者には発見されていない。

(169) 神殿騎士修道会 der Orden der Templer. 正式名称は「キリストとエルサレムなるソロモン神殿の貧しき戦友たち」Pauperes commilitones Christi templique Salomonici Hierosolimitanis。ソロモン王が建立した神殿があった、というエルサレムの「神殿の丘」を総本部の地として与えられたので、この名がある。第一次十字軍によるエルサレム占領後、同地で一一一九年結成された騎士修道会。一一一三年結成の聖ヨハネ騎士修道会とともに、それまで截然と分かれていた二つの階層——騎士と修道士——の理念が合体した最初の修道会である。会員は、貴族出身で戦闘を任務とする騎士、平民出身で騎士を補佐して戦闘に当たる従士、事務一般を処理する修道士、および司祭の四成員から成る。中東におけるキリスト教勢力擁護に軍事的貢献をしたが、同時に莫大な資産を金融運用して、騎士修道会維持の主要財源とした。しかし、一二九〇年要塞港湾都市サン・ジャン・ダークル（現イスラエルのアッコ）が陥落し、パレスティナにおける東方ラテン王国が崩壊すると、中東から撤退する。十四世紀初頭、神殿騎士修道会が依然として保有していた豪富に目を付けたフランス王フィリップ四世（美男王）は、修道会入会儀式における鵝姦行為、反キリスト的諸言動、悪魔崇拜などの罪——これらは全て今日から見れば明らかな誣告——に問うて、フランス全土で騎士修道会員を逮捕、騎士修道会の資産を没収、一三二四年には、ずっと囚われの身だったジャック・ド・モレーを初めとする騎士修道会の四人の指導者をパリのシテ島で火炙りの刑に処した。

(170) 神殿騎士館 Tempelhaus. 神殿騎士分団領にして神殿騎士修道会拠点。北西ヨーロッパの主要都市のほとんどにあった。大抵は石造の四角形で、小要塞のとき建造物。騎士修道会の主要財源である金融業の事務もここで営まれたことであろう。

テンペル濠 Tempelgraben. アーヘン旧市街に現存。ただし、現在は濠ではなく、環状通りの一部の名称。

(172) ジャック・ド・モレー Jacob Molay. 神殿騎士修道会第二十三代にして最後の総長ジャック・ド・モレー Jacques de Molay（一一

四四ノ一二五〇—一二二四)。一二一四年三月十八日パリで刑死。

妖精 Neckbold. 直訳すれば「悪戯者」。

- (174) (173) 皺くちや小人 Heinzelmännlein. 「ハインツェルメンライン」を「皺くちや小人」と訳したのは解釈の一つに過ぎない。Heinzelmännlein = Heinzelmännchen = Hinzelmännchen などの呼称を Hutzelmännchen (ちっぽけな皺くちや爺さん) と考えれば、のこと。しかし、ハインツ、ハインツェル、ヒンツ、ヒンツェはドイツではありふれた男性名ハインリヒの縮小形(愛称、蔑称)なので、これに類する小人の呼び方は「皺だらけの年寄り」に対する戯称でもある「干し果物」Hutzel, Heselとは無関係かも知れない。

- (175) コーボルト Kobold. 大雑把に定義すれば、山や丘の胎内に棲み、鉱山の坑道などにも出没して坑夫をからかったりする山の精・地霊と、人間の家屋敷に居着いて、悪戯もするが、僅かな食べ物(クリーム、ミルク、パンなど)を宛がっておけば大いに家事を助けてくれる家霊に分かれる。この伝説では前者。

- (176) エマ城 Emmaburg. 現東ベルギーにあるかつてのリンブルク(リンブルフ)公爵領の城塞の一つアイネブルク(「オランダ語エィネビュルフ」Eynenburg. カール大帝(「シャルルマーニュ」)の息女エマ(イマ)が恋人エーギンハルトとの逢引に使った、との伝説に附会されて、こゝうも呼ばれるようになった。アーヘンからさして遠くないゆるやかな丘の上であり、美しい。アーヘンエーギンハルトとエマ(イマ)の恋についてはDSB五四参照。

- (177) ケルン通り Köhner Straße. 現在アーヘン旧市街に「大ケルン通り」Grossköhnerstraßeと「小ケルン通り」Kleinköhnerstraßeの二つがある。

- (178) 騒霊 Poltergeist. ハンでは文字通り「騒がしい精霊」の意で用いられているが、本来は、特定の家に出没する、姿を見せない精霊で、家具類、食器類を投げたり、家鳴り震動させたり、極めて騒がしい。乱暴なことが多く、これに憎まれる家人は怪我をさせられることもある。ロンドンの雄鶏小路のそれは有名。日本でも同種の現象の記事が江戸随筆(たとえば、根岸鎮衛著「耳囊」)に残されている。

- (179) シレジアのツォプテン Zopten in Schlesien. シレジア地方はかつてのドイツ領シュレージエン、現ポーランド領シロンスクでヨーロッパ中東部に広がる。ツォプテンは現スブツカ Sobótka (ドイツ語ツォプテン Zopten) でポーランド南西部の都市。

- (180) ボヘミアのクッテンベルク Kuttenberg in Böhmen. 現チェコ共和国のクトナー・ホラ Kutná Hora。十三世紀半ば以降、この町近郊から多量の銀が採掘され、町は大いに繁栄、十六世紀に掛けて経済的、文化的、政治的にブラハを凌駕する都市に発展した。DS一「クッテンベルクの三人の鋏夫」Die drei Bergleute im Kuttenberg の舞台。

- (181) ヒンツェンヒンツェン小路 Heinzenstraße Hinzengäßlein. 「ハインツェン通り」Heinzenstraße のことか。これはアーヘン旧市街に現存。
- (182) ヒンツェン塔 Heinzenburg Hinzenburg. エム城との間に地下道が通じていた、という例の市壁の古い塔のこと。「ハインツェ塔」Heinzenburg とも「ヘンネッセン塔」Hennessenburg とも呼ばれた。一二五七年から一二五七年に掛けて造営されたアーヘン市壁の防禦塔のひとつ。一八八一年取り壊された。前出「ハインツェン通り」はこの塔へと伸びていたので、塔の名に因んで命名された。
- (183) ペルフィツシュ Pertisch Pertisch. 現在の大聖堂広場。アーヘン旧市街の中心部。
- (184) 死人の踊り Totentanz Totentanz. 普通の邦訳は「死の舞踏」。これは十四世紀以降西欧に登場した、死が人生に揮う力の寓意主題で、教堂から物を乞いに至るまで、階層の上下に問わず、諸人が骸骨の形をした死神と踊る図のこと。しかし、教会墓地の墓穴から死者たちが骸骨姿で現れ輪舞をする絵や物語詩(ダーテ「死人の踊り」Totentanz. 一八一三)もあり、ここではこちらを指している。「死人の踊り」とした。
- (185) リンブルク Limburg Limburg. 現リンブルフはネーデルラント(＝オランダ)王国十二州の一つ。元公爵領。
- (186) クレーフェ伯爵の Cleve eines Grafen von Cleve. クレーフェ伯爵領(十一世紀初頭に文献に名が出る)、更に一四一七年以降クレーフェ公国は、ドイツの現ノルトライン＝ヴェストファーレン州の一部とオランダの現リンブルフ州他二州の一部にまたがっていた。一五二一年ユーリヒ公国、ベルク公国と連合してユーリヒ＝クレーフェ＝ベルク公国(同君連合)となる。
- (187) 我ラ汝ヲ待テリ Espectamus te! Espectamus te! ラテン語。
- (188) スパ Spa Spa. 現地の綴りでは Spa であり、日本では普通「スパ」と表記する。しかし、ベヒシュタインは Spa と綴って、長母音を示している。オランダ語の発音なら spa の綴りでも「スパ」が近似値。ベルギー南部(フランス語に近いワロン語地域)リエージュ(＝ドイツ語リユッティヒ、オランダ語ライク)州の名高い温泉町。
- (189) フルースベーク Groesbeek Groesbeek. ベヒシュタインの綴りに従う。しかしながら Groesbeek であろう。これなら「緑の細流」くらいの意。
- (190) 聖者レマクルス der heilige Remakus der heilige Remakus. ベルギーの代表的聖人(？一六七一／六七九)。現フランス南西部アキテーヌに生まれ、後のブルッヘ(＝ブルージュ)大司教聖スルピキウスに第一級の教育を受ける。六四五年頃現在の東ベルギーの地に来て、六〇〇年頃から始まっていたこの地方のキリスト教化に更に貢献。とりわけスタヴロ・マルメディ修道院を創設したことで知られる。この複合大修道院は六四八／六五〇年から一七九六年まで千年以上存在した。
- (191) ストックム Stockum Stockum. 未詳。ドイツの現ノルトライン＝ヴェストファーレン州には幾つも「シュトゥックム」Stockum なる町があるが……。

- (192) それからというもの二度と再び辛い暮らしに苦しむことはなくなった …… und litten nie wieder Mangel. この伝説はKH M初版第二部(一八一五)五七番「飢え死にしそうな子どもたち」Die Kinder in Hungersnot(その後の版では削除)と類似している。もっともメルヒエンの方はこのめでたしめでたしの伝説と打って変わって物悲しい。
- (193) かのハイモンの四人の子ら die vier Haimonskinder. 伝説によれば、ドルドーニュ(現フランスのアキテーヌ地域にある)公(あるいは「ドルドーニュ伯」ハイモン(あるいは「アイモン」「エーモン」など)の四人の息子たち、アーデルハルト、リツアルト、ヴァイツアルト、ラインホルト(ただし、これらの固有名詞にもさまざまな異同、綴り、発音がある)のこと。一番末のラインホルトはカール大帝(「シャルルマーニュ」)の家臣のさる大貴族をチェスの盤で打ち殺した。二人がこの遊びをしている最中喧嘩になったので。これを端緒として大帝並びにその十二臣将を相手とした十六年に亘る闘いが始まり、ハイモンの子らは多くの武勲を挙げ、最後に大帝から栄誉ある講和を贏ちえた。もっとも、この伝説はカール大帝の様な戦果を纏めたものに過ぎない、というのが多くの著述家の考えではある。フランス渡来の英雄叙事詩が源。民衆本にもなっており(もとより右に挙げた伝説とは数数の筋の異同がある)、若きゲーテはこれを愛読した。また、この伝説を素材に、ロマン派の文人ルートヴィヒ・テイクは散文の物語を仕立て、ルートヴィヒ・ベヒシュタインは魅力的な物語詩を書いた。
- (194) バイヤール Bayard. 巨大で恐ろしいこの馬にはハイモンの四人の子ら全員が甲冑を着け、盾を持って乗ることができた。四人の子らの内で最も力が強く剛勇無双の末弟ラインホルト(フランス語ルノー)がこの馬と長いこと闘って屈服させ、その忠誠を享けた、との話がある。
- (195) 主人の許に zu seinem Herrn. 「主人」とは、後に出るように、ラインホルトのこと。
- (196) 石の碾き臼 Mühlstein. 中央に穴が開いている円盤状の石。斜めに溝が多数刻まれている。穀物を挽く石の碾き臼の場合、玄武岩、花崗岩、斑岩など極めて堅い石材に溝を刻まなければならない。石臼を二枚重ね、上の石臼を回転(かつての動力源は水力ないし風力)させると、この間で穀粒が搗り潰されて粉になる。直径は二十世紀初頭のドイツの製粉所の場合で七五センチから一五〇センチだった。一枚でも大層な重さであることはいうまでもない。
- (197) アルデンス高地 Ardennwald. ベルギー、ルクセンブルク、フランスにまたがる標高三五〇—五〇〇メートルの丘陵地帯で、大半が森林に覆われている。
- (198) ダイナン Dinant. 現ベルギーのナミュール州の都市。
- (199) シャルルロワ Charleroi. 現ベルギーのエノー州の都市
- (200) ナミュール Namur. フランク王国メロヴィング朝時代、サンブル川とマース川の合流点の断崖上に築かれた城塞から始まる有名な

- 要衝の地。現ベルギーのナミュール州の都市。中世に遡る小領邦国家ナミュール伯爵領の中心都市だった。
- (201) デュイ Duiy. ベルギーのこの町には「城館バイヤール」Le Château Bayardなるものが現存。なお、フランスのドーフィネ・アルプ地域にある同名の城館は、一五〇〇年前後三十年間に亘り、三代のフランス王に仕えて、イタリアにおける合戦で数数の功名手柄を挙げ、「恐れ知らずにして非のうちどころなき騎士」と称揚されたバイヤールの殿ピエール・デュ・テライユ Pierre du Terrail, seigneur de Bayard (一四七六—一五二四)の城館である。
- (202) プルスエール Pousleur. 現在リエージュの行政区画の一つ。田園地帯。
- (203) マラギス Malagys. マクス Magus その他の綴り、発音がある。駿馬バイヤールはこの魔法使いが地獄から召喚した、との挿話がある。
- (204) 長兄のアーデルアルト sein ältester Bruder Adelard. アーデルハルト Adelhard (フランス語アラル)とも。
- (205) コルヴェイ修道院 die Abtei Corvey. 現ノルトライン・ヴェストファーレン州のヘクスターに壮大な建物が現存。一七九二年まで神聖ローマ帝国直轄ベネディクト会派修道院だった。その歴史はフランク王国カロリング朝にまで遡る。
- (206) ルーヴェン Löwen. ベヒシュタインのこの綴りでは「レーヴェン」が近似値の表記だが、ベルギーのフラムス・ブラバント州の州都ルーヴェン Leuven の名だ。
- (207) 万聖節 Allerheiligen. 「諸聖人の日」。十一月一日。カトリック教で、全ての聖人のために祈りを捧げる日。ケルト人やゲルマン人がキリスト教化されていなかった異教時代、死者の靈魂を慰める日だったようで、この習俗がキリスト教に吸収されたらしい。
- (208) 万聖節 Allerseelen. 「諸死者の日」。十一月二日。カトリック教で、煉獄にいる死者のために祈りを捧げる日。当然ながら民間信仰では、この日の夜、教会墓地に亡魂がうごめくことになる。
- (209) 名付けの父 Gevatter. 幼児洗礼を行うキリスト教の場合、これに立ち会って、洗礼を受ける者の神に対する約束の証人となる大切な存在。女であれば名付けの母 Gevatterin. 名付け親は当の嬰児にとっては将来ともに両親同様、あるいはそれ以上に頼りになる。ここでもそうで、体調の悪い名付け子のために一肌脱いだわけだが……。
- (210) 楽士 Spielmann. 「吟遊詩人」とも訳せるが、決して雅なものではなく、中世ドイツで、婚礼や村祭り、宴会などに呼ばれて、楽器を奏でたり、ちょっとした曲芸をしたりして座を盛り上げ、報酬を稼いだ芸人。
- (211) 聖カンタン教会の墓地の傍に am Sankt Quintin Kirchhof. 聖クインティニウスはフランスでは聖カンタン Saint Quentin。ピカルディ地域（現フランス北部。ベルギー国境に近い）での三世紀の殉教者。

結びに一言。

D S B 一〇六「最後の種蒔き<sup>※</sup>」に出て来る証書の古いドイツ語のかなりの部分が分からなかったので、ヨーロッパ文化学科新田春夫特任教授にお伺いを立てた。日本有数のドイツ語学者である新田教授は、掌中の物を指すがごとく、即答してくださった。げに「知恵ある友」は持つべきものかな。新田さん、改めて深く御礼申し上げます。